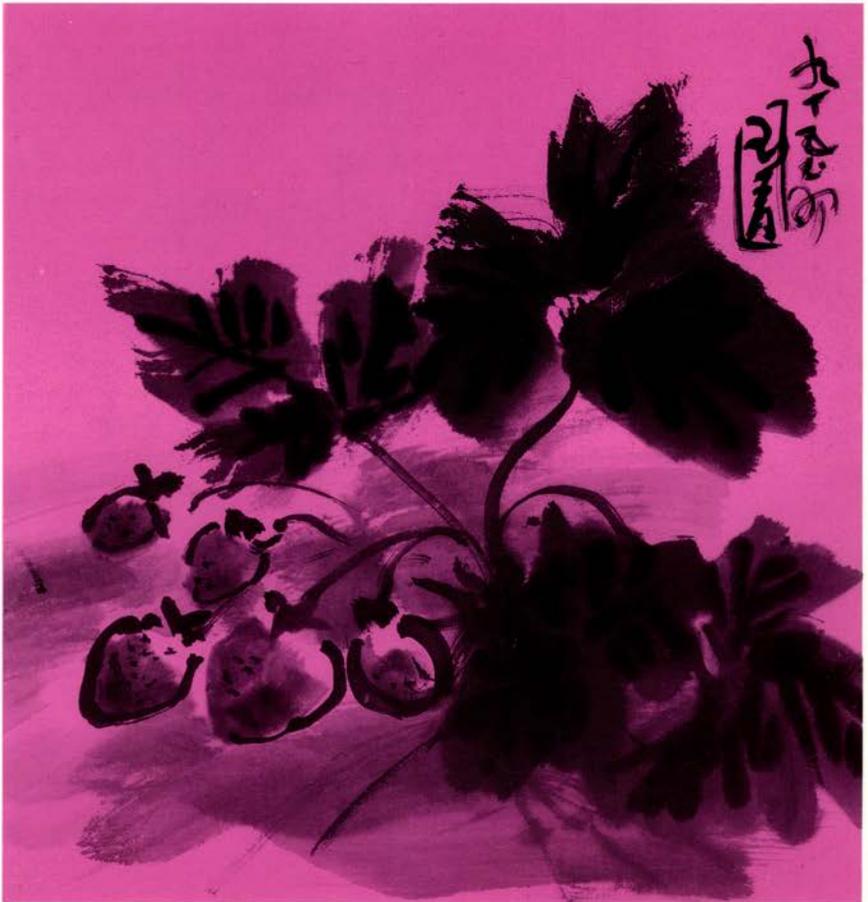


# 川柳塔

創刊大正十三年六月一日發行 每月一日發行  
通卷八四一號



日川協加盟

No. 841

六月号

麻生 路郎 33回忌・麻生 葎乃 17回忌  
中島生々庵 13回忌・西尾 栞 3回忌

# 追悼川柳大会

と き 6月28日(土) 正午開場・午後5時閉会

ところ たかつガーデン(大阪府教育会館)

大阪市天王寺区東高津町7-11 ☎(06)768-3911  
(近鉄上本町から北東徒歩3分、地下鉄谷町九から7分)

回 向 浄福寺住職 西村 哲夫 師

おはなし 日本南画院理事長 直原 玉青 氏

兼題と選者(各題2句・午後1時締切)

「松」 川柳塔きゃらぼく 八木 千代 選

「歩く」 川柳「塾」塾長 寺尾 俊平 選

「こども」 時の川柳社主幹 小松原 爽介 選

「波」 ふあうすと川柳社主幹 藤本 静港子 選

「目」 番傘川柳本社主幹 磯野 いさむ 選

「似る」 川柳塔社主幹 橘 高薫 風 選

会 費 2000円(記念品贈呈) 懇親宴 5000円(同会場で開催)

宿 泊 7000円 アウィーナ大阪(なにわ会館)

(川柳塔社事務所へご連絡ください。申込金5,000円)

主 催 川 柳 塔 社

## 残暑見舞廣告

本誌8月号に掲載する暑中見舞廣告を募集します。広告のスペースと掲載料は右記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお申し上げます。

★個人 1口 2000円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の4種とします。

① $\frac{1}{3}$ 頁 6000円 ②半頁 9000円

③ $\frac{2}{3}$ 頁 12,000円 ④1頁 18,000円

★原稿締切 6月25日

川 柳 塔 社

# 西尾棐先生

## 橘高 薫風

四月十二日の久世町は陽光眩しく、旭川河畔の桜トンネルは満開、丸山大師堂山内のミツバツツジも見事な花をつけていた。ここに九十二歳の二宗吟平氏の

丸うなれまるうなれと石の声

の句碑があり、建立当時からこの方、私は対面の日を待ちかねていた。それは、西尾葉先生と同道を約束していたことでもある。

藤村メ女さんと同宿の「おかもと」の座敷に入ると、床の間の絵軸は鶏でありいま一幅は仙涯の水墨画「瀉江風景」であった。先生は一白水星の西年、中国の瀉江は曾遊の地であるから偶然ながら、これはまるで先生がいらっしゃるようように私には思えた。桃源郷にいるような二日、和顔愛語は常にこのような麗らかな境地のことを言うのであろう。

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

の句も庶民の平和な像の写実であった。

先生の第一句碑は八尾の大聖將軍寺の

一步出すれば我れ旅人となる心

で、昭和五十五年五月に建てられた。

旅行の好きだった先生、旅先では郵便貯金千円也のスタンプを通帳に残すのが楽しみで、通帳も貯金の額も増え続けた。

従兄弟会というのがあって一年に一度六組の夫婦が揃って旅に出て、その日ばかりは奥方に床の間に近い上座に座って貰い、日頃の内助に感謝をするというエピソードも頗笑ましく聞いた。このユーモアは余裕である。葉先生の句にも酒にも、すべてに余裕がにじみ出ている。

平成五年の春に出版の『水鶏庵こらむ散歩』も例外ではない。読後の印象今なお新しい文章のタッチのように天衣無縫であった。書も絵も闊達だった。

先生が中島生々庵先生から川柳塔社の主幹・理事長を譲られたのは昭和五十六年七十二歳の時で、以来十二年間ご苦労を願ったのであるが、晩年にはご自身老齢にしてトップの座を続けるマイナスを感じられたのか、社の運営にも定年制を

敷く検討を私たちにうながされた。平成

二年の頃であった。俳句や短歌の世界で

も、飯田龍太氏の『雲母』廃刊や土屋文

明氏の死去からの『アララギ』の実体や

終刊宣言からして、老齢化の弊を見越して

おられたのかも知れない。結果はどう

あれ、川柳塔の活性化に踏み切った。

先生のもう一つの業績は、高野山靈園の川柳塔碑建立と毎年の物故者法要を義務づけられたことである。

平成元年十一月に建てられた背丈より高い碑の裏面には立派な葉語録がある。

俱会一処

川柳塔同人並に川柳愛好家は死して尚柳号で呼びあい永遠に川柳を語り合う絆を以て此処に愉しく眠る

同人と誌友の有志は基金を納め、墓域の管理と法要の経費に資するのである。

この実績も合掌と和の精神の発露だ。

昭和六十年九月の川柳塔七百号と先生ご夫妻の喜寿金婚、平成元年の叙勲記念、平成六年の八百号祝賀と、次々開催された大会の中の先生の和顔を忘れ得ない。

四十年に亘り目を掛けて頂いた私の印象は、「徳の人」の一語に尽きる。



# 川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 西尾葉先生 .....	橋高薰風 .....	(1)
医学のひとり言 .....	波多野五楽庵 .....	(2)
川柳塔 (同人吟) .....	橘高薰風選 .....	(4)
自選集 .....	東野大八 .....	(50)
川柳の群像 品川陣居 .....	清博美 .....	(52)
古川柳歳時記 『富士詣』 .....	高杉鬼遊選 .....	(56)
水煙抄 .....	安藤寿美子 .....	(54)
秀句鑑賞 「同人吟」 .....	中原諷人 .....	(79)
水煙抄 .....	橘高薰風 .....	(83)
大空のころろ (77) .....	八木千代選 .....	(80)
渺湖抄 .....		

## 医学のひとり言

波多野五楽庵



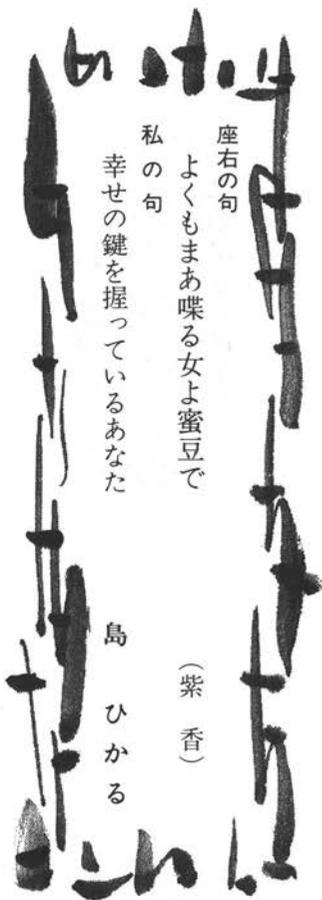
成人病と言えば癌、脳出血、心疾患の三病が依然として上位をしめているが、医学の発達と共にその生存率は必ずしも悲

観的なものではない。かくいう私も癌という病名と生活しているが、悲観の落胆もしていないし、むしろ仲良く暮している、と言つてよい。

しかし、医学の進歩と比例するかのようになつて病名が増えている。四十年前の医学書にはなかつた病名が医学界をゆさぶっている。曰く、狂牛病、ヤコブ病、エイズ、O157、等々。

特に最近問題になつてゐる脳硬膜の移植による痴呆症、ヤコブ病の場合には、アメリカではたつた一人の患者が出た時点で二ヶ月後には廃止命令を出したのに、もかわらず、日本の厚生省は何の対策

茴香の花……………	西出楓楽選……………	(84)
「習う」……………	坊農柳弘選……………	(86)
一路集「側」……………	岩崎みさ江選……………	(86)
「手伝う」……………	田中正坊選……………	(87)
初歩教室「置く」……………	吐田公一……………	(88)
栗先生の思い出……………	高杉鬼遊・河内天笑……………	(90)
路郎賞・川柳塔賞中間発表……………		(91)
五月本社句会……………		(94)
各地柳壇（佳句地十選／山本玉恵）……………		(98)
大野武太さんを偲ぶ……………	福本英子……………	(111)
柳界展望……………		(112)
六月各地句会案内……………		(113)
■編集後記……………		(114)



座右の句  
 よくもまあ喋る女よ蜜豆で  
 私の句  
 幸せの鍵を握っているあなた

島 ひかる  
 (紫 香)

もとらず、ドナーの回収もなかった。その言い分はドナーは医薬品ではなく医療用具に分類されているから、と言うのである。世界保健機構の発表によれば患者五十人の内四十三人が日本人で、しかもそのドナーは未回収のまま現在も使用されているかもしれない事である。

狂牛病の発生により英国の牛肉を全面輸入禁止にした例はまだ目新しい。エイズにしてもその特效薬は無い。世界の医学者が研究に没頭しているが、先は見えない。

いま日本で結核が多くなっている事を読者の皆様は御存知だろうか。しかも最も有効とされていたストレプトマイシンは効果が薄い。特に抗生物質の乱用による細菌の抵抗性には医師の責任と厚生省、製薬会社の儲け主義が原因である事にもっと早く気がつくべきだった。

昔は杉の花粉症もなかった。大地を裸足で走り回った世代には土壤中の酵母により自然に抗体が出来、花粉症などという病名はなかったのである。自然の恵みを忘れた人間は今後何処へ行くと言うのであろう。



橘 高 薫 風 選

大阪市 榊 本 落 児

鳥取県 林 露 杖

大根の白がまぶしい汚濁の世

北の人北の形をして生きる

漁師には銜え煙草がさまになる

心太 七十七の恋五月

外は雪 北の市場は蟹だらけ

雪疲れそんな病気もあるんだな

生駒市 麻 生 アート

薬石の効を頼んで春寒し

見取図になかった花が咲きました

山上の垂訓 雀ふとり居り

マスク 眼鏡 補聴器 耳が足りまへん

記憶力確かに酒の有りどころ

堀越しにとりの桜うちの酒

遠景の緋模様に山ざくら

夜桜や八十路の胸に動くもの

来年のことふと過ぎる花の下

わが畑に在す男爵メーカーイン

独り寝もまたよし八十路春の宵

素振りしてみる木刀が重いなあ

寝屋川市 森 茜

相席がクローン人間かも知れず

おろおろと痛みをつれていく花見

再会の約束がある老けられぬ

叱られること多くなり進級する

おばあちゃんたたかいかいごっこ嫌いだな

猫の家出をからから笑いとばされる

鳥取県 大角正道

背のびした私を責めている私  
無に還るクラシックを聴いている  
真珠コロコロだんだん好きになつてくる  
手をつなぐただそれだけでいいのです  
鬼になるほどたいへんなことはない  
本当の自分を見つげずにおこう

弘前市 斉藤 焔

この黒い土に頂く生きがいよ  
楯は大きく静かに振らんとや  
晩酌を止めて彗星見に行こう  
消防車どこまで行くの花吹雪  
たまごっち飼うてる君も寂しから  
ねぶた絵に早も津軽の血が騒ぎ

高槻市 川島 颯云児

勝つことより負けない術を考える  
切り返す言葉理性が押し戻す  
真つすぐに歩いて蟹に笑われる  
迷信は信じてないが大安心  
拙い字も落款押すと生きてくる  
タコ焼で納得させた腹の虫

吹田市 山本 希久子

夕桜香水の香とすれ違ふ

奇想天外を私にくれる春の雲  
春雷とどろき過ちをただされる  
逢うて悔い別れて悔いぬ今日も雨  
翔びたとう雲の切れ目はきつとある  
三世代同居私に浅いスーブ皿

竹原市 小島 蘭 幸

畳拭くこの厳しさはなんだろう  
古本屋で見付けた宝物ですか  
バイキング二女は美食家だと思ふ  
満期とは淋しきものよ子が巣立つ  
豆ご飯お替わりをしていいですか  
祝結婚とあるなり 古い広辞苑

生駒市 北山 悟 郎

万葉の桜しかと散り際見定める  
雄たけびを何時も心で叫んでる  
自分が自分酷使し悔いがない  
声援に応える力燃えてくる  
一徹の骨の硬さが邪魔となる  
僕と妻 息を合わせて深呼吸

横浜市 菱田 満 秋

春告げるくぎ煮今年も神戸から  
たっぷりと見た花なれば散るもよし  
カタカナ語字典はすぐに古くなる

特殊卵産んでいるのを鶏知らず

S Lの煙も春の匂いする

悠久の墓石を秋吉台に見る

髭を剃る鏡よお前正直な

入歯同士の会話盗聴など出来ぬ

只の薬がわんさと枕元にある

アメリカの米は食わない田整え

待合室でニュースが聴ける医者通い

我を通すだけでは困る多数決

岡山県 矢内 寿恵子

胎動へモーツアルトが話しかけ

セピア色の縁時々手繰り寄せ

あの子この子に傾きながら夢賭ける

ドクターの言葉もしもがつけてある

何べんも頭を打って来た大人

ういのおく山越えて情けが身についた

和歌山市 青枝 鉄治

相討ちは承知で敵の陣に入る

笑ったら損する顔で受理される

百遍の嘘へ真実溶かされる

何気なく笑ってピンチ切り抜ける

叩く真似その指先にある色気

あの世でも酌むだろコップ入れてあげ

一本を空けて昼からポカンポカン

間男の気配大きな猫の影

平和とは 高二があんぱん食べている

天使の羽はえてるところ痒いだけ

とって置きの一万円札米となり

ひっそりの果樹園で読む詩集うまし

西宮市 秋元 てる

あけっぴろげの若さが少し怖くなる

半病人街に溢れる医の進歩

玉結びの糸は残して余命表

成算はないが一先ず歩き出す

美談めいて来て相槌の重くなり

天寿全う身じろぎもせぬ落椿

鳥取県 乾 喜与志

十年目の卒寿で朋と交わす杯

遅咲きの花のんびりと卒寿坂

毎日が遺言 遺書は不要なり

凍北で拾った命から卒寿

雲悠悠とおだやかな僕にする

千年の古木に桜まつ盛り

下関市 石川 侃流洞

付加価値へ躍起農家に匂がない

日替りメニユー猫のエゴには甘い妻

弘前市 肥後 和香子

神様の目線で絵馬に運がない

茶髪くらい何さじいちゃん物わかり

湯割りの湯増やし値上げに耐えている

南無大師 観光バスに乗って鈴

寝屋川市 江口 度

合格の知らせ受話器を遠ざけて

温室の花を見ている塾帰り

まだ地球あったか彗星ほっとする

あたり前のことが明るい話題の世

民宿と民宿結ぶ妻の旅

梅干しも賞味期限がついている

堺市 山本 半 銭

たそがれの旅の窓辺の遠明り

咲き頃へ風も光も微笑みて

壺の花開いて留守を迎えくれ

月も花もいのちもおぼろいとおしき

ビードロは光のかたち風の彩

お喋りな赤白黄色春がゆく

和歌山市 池 永 正 匍

縁があれば又この星のこの島へ

待たされてゆっくり読めた週刊誌

新しい世でもどっこい古酒の味

滝つぼの音 山奥の存在感

ちよつとだけ角を残した丸もある

絹ごしより木綿豆腐が性に合い

米子市 青戸 田 鶴

ひつじ雲抜がる若さうらやまし

筋書きの通りにいかぬ道ばかり

原っぱの中に昨日の落し穴

友だちも私も老いを語らない

あの家からいつも聞こえていたピアノ

彼岸から見ている亡母をふと想う

出雲市 岸 桂 子

どの彩を足しても友に追いつけず

箸枕いつか別れが来るだろう

妥協してばかりわたしが貧しすぎ

蝶の情けも欲しいと思う葱坊主

アルバムの一コマ遠い日の桜

ひっそりと身を退く春とすれ違ふ

岸和田市 原 さよ 子

バラ色に燃えてる孫の理想像

みな主役若さあふれる甲子園

イチローをはって若さの匂う部屋

風邪気味の母がやっぱり朝を起き

ピクニック裏道組は野菜さげ

通帳は年金を出す用事だけ

藤井寺市 吉岡美房

妻がまあ美人に見えた花明り

旅で会う名も無き山の花吹雪

葉桜に男の恋の哀しすぎ

大輪の発止発止と咲く牡丹

白牡丹一花一花の慈悲と会う

堺市 志田千代

末摘花 闇夜が闇であったころ

大あくび やつと二人になれた夜も

鬼二匹おしどりらしく見えた

キミは猫 早寝早起き真似ないで

母は子を子は子を思ふ亀の背な

岸和田市 田中文時

覇気が無くなって来ました酒以外

喚問で白状させた事が無い

青よりも赤信号が増えた老い

肩叩く方が獅子身中の虫

古本屋明治の店主美髯つけ

守口市 森川まさお

山の宿はじけるような返事する

お遍路の中に青道心がある

渡り廊下の向こうに菩薩がいらっしやる

寺の雨澄んでるままで流れ行く

線路の下の石には夢がないだろう

八尾市 宮崎シマ子

五十年のリズムを崩し夫病む

タンポポの黄のまぶしさよ雨上がり

蘇生した夫が御飯食べている

欲の皮にも色があせ皺が出来

菜種梅雨 宮本武蔵読んでます

和歌山市 木本朱夏

さよならを白く零して雪柳

想い出という我楽多と棲んでいる

猫の目に春のランプを点したる

ネックレス首枷となる春の雨

りんごキシキシ思いの丈を食べ残す

島根県 伊藤寿美

母の日の凶書券で買う広辞苑

不意に湧く思慕葉ざくらはみどりなり

十八は今しかないと子の茶髪

急がずに生きてしっかり切る句読

春一番二番たまごつちが不足

茨木市 藤井正雄

包丁もびかびか光る初鱈

駅裏にくいの訛りで飲める店

出発進行自転車で行く二度の職

受験子のおやつ大福辞書片手

風呂の順姉に譲って観るナイター

熊本市 永田俊子

風が火を火が風呼んで阿蘇野焼  
火の山を火文字で飾り春を呼ぶ

春愁や女性ミイラの全裸なる(ミイラ展)  
命短しさくらの花がささやいた

春宵一刻時計よ止まれ花浄土

熊本県 高野宵草

アホらしいテレビチラチラ 待合所

口喧嘩 頑固互いに呆け防止

悔い少し日記に捨ててパジャマ着る

おやこも桜だったと咲いている

土産話ボンボンと出す旅靴

唐津市 山口高明

鬼遊がさ泊った部屋と格を付け

本会議済めば秘書との小会議

乱世なら男凌いで名をあげる

留守番の余禄は好きな店屋物

甘言に乗るも余裕のある証拠

唐津市 久保正剣

隙もなく生きて虚しく黄昏れる

豊作の案山子怪訝な輸入米

百歳の蓄財老後のためと言う

二人部屋オンブズマンに用はない

五パーセント嘘かと思つた万愚節

唐津市 仁部四郎

郵便が来て本日を折り返す  
声高の愛国論にある仕掛け

あの時のあの訳がある古名刺  
情報的大海へ犬かき試してる

弁当を覗かせてやる玉子焼

唐津市 山門幸夫

桜花爛漫去年のように春が逝く

春雨に森羅万象はじけだし

川の字に愛を育てた末娘にも娘が

母さんに習った味で夫を飼ひ

子育ての娘にふつと亡母の所作

唐津市 山門タミ

我老えり十九世紀のカゲ茶碗

退院日桜並木に回り道

川止めで三途の川を引き返し

枯木にも芽立ちせかせる春の雨

六文の足袋始めての藤間流

唐津市 市丸晴翠

世捨人陽の移ろいを窓に追う

亡母の指揮長いトンネル通り抜け

修羅に耐え退院の文字踊り出す

青い空病床で聞く花便り

僥幸を謝し余生への第一歩

北九州市 梅田宣司

抜擢の気分を知らぬ雑魚であり

とっておきの言葉お世辞にされている

悪友が俺の尻尾にからみつく

叱るのはよそうあつさり辞めるので

もらい泣き身内以上の他人なり

香川県 工藤吟笑

行き詰まり明治の知恵を借りにくる

野仏に曳かれて今日も寺詣り

抱きついてきたバアさんも八十五

腹時計止まってしまふ冬ゴモリ

幾山河越えた夫婦の春日和

香川県 木村あきら

カアさんの心は海の広さかも

新世紀へ助走始まる丑の歳

定年で婦唱夫随と言う身分

片袖の机で定年やってくる(係長)

長生きの秘訣一口の酒があり

香川県 成重放任

ア ウンで通じるやっぱり夫婦仲

装った義務と演技の夫婦みち

流行歌覚えた頃に終った

朝焼けに雨具の用意論す母

負け戦 家路が遠く遠くなり

香川県 川崎ひかり

いつからか土の匂いのしない道

雑草だってやつと来た春生きている

それぞれが合わぬ時計を持つ家族

雨雲の上の青空信じてる

日向ぼこ鬼の背中も丸くなる

香川県 山地マツエ

打つ手皆はずれてからの不眠症

どん底に居ても明るい母が居る

ホームドラマ嫁に主役の座をゆずる

嫁いだ娘の話をしようお雑さま

潔癖な男にたまる寒い風

香川県 池内かおり

霧雨にさくらさくらの十津川よ

那智アメをコロコロお習字の稽古

研ぎ汁が澄む頃迷いふつ切れた

留守番に申し訳ない今朝の膳

朝刊が届いてからのひと眠り

松山市 宮尾みのり

借景へ空の青さも組み込まれ

シルバーセンター皆ちよぼちよぼの人生さ

そう言えばやはり息子も斜に構え

漬物上手という一面はかくし持ち

雑魚の意地打たれ強さを秘めて持ち

松山市 丹下美津子

満開の桜 目白も蜜に酔う

札所の句碑 恩師を偲ぶ春遍路

優勝に拭くにはおしい玉の汗

ストレス解消夫と庭の草を抜く

可燃金物うっかり出せぬゴミ袋

西条市 片上明水

陽当りの違いがわかる春の花

春祭り待たずに桜散りました

定年を迎えた春のシクラメン

手も脚も酒も弱って父の春

渡り鳥発つとカラスが来た河原

今治市 越智一水

愚かなる心が故に詩を愛す

妻がよく寝ている俺を信じてる

わが妻に敬語を使う世の変り

孫と接吻ママに言わないことにする

「君が代」を孫が歌っている恐さ

今治市 野村京子

ひびきあう鈴へ夫婦になりました

初恋の駅でふらりと途中下車

ロールキャベツことこと満ちる家族愛

わたしにも母に抱かれてみたい日も

赤を着て老いの余力を試される

高知県 赤川菊野

井の中で海の広さがわからない

散る日まで弱音は吐かぬ寡婦の舞

見失う私を探す旅に出る

善人の素顔意外に冷たくて

肩書がとれて名刺も軽くなり

鳥取県 両川洋々

冬ごもりしても夢は野に放つ

永田町に一発パンチかまそうか

それからのドラマは君と僕で書く

浮かれてちゃ駄目よ謀反の矢が刺さる

先の先読むと地球に明日はない

鳥取市 春木圭一郎

今日の悔い明日へ残さぬ手を洗う

回り見て無難な方へ手をあげる

午前二時怒らぬ妻に手を合わす

手まねきに弱く散財くり返す

ライブルへちらり奥の手見せておく

鳥取市 武田帆雀

定年を楽しみ哀れみ後二年

雀鳴き鶯鳴いて一眠り

村長のアイデア手打ちそば道場

怖いもの知らずが鯛を釣って来る

マネキンのような女がガラス拭く

風邪引いてときどき粗大ゴミになる  
鳥取市 美田旋風

改革が庶民の油また絞る

古稀からが命を賭けた鬼退治  
目の保養ときに佇む人物画  
自身史で枯木に花を咲かす春

鳥取市 杉本孝男

叱られる刻は我慢の亀になる

それからは触れぬ古傷痛むから  
頂点に立てば眼鏡の度が進む  
夕暮れの話し相手が欲しくなる  
金づるを掴んでからの他人顔

鳥取市 小谷美ツ千

ループ橋忍ぶ逢瀬に加速する

レンギョウの黄にほだされて日向ぼこ  
ジョギングの道に地獄の釜の蓋  
黄金の鯉 大屋根を震わせて  
初節句見栄もはためく大幟

鳥取市 西村黙光

健康をチェックしている酒の味

迷い子札心に宵のネオン街  
化けの皮はがされそうな春の花  
わが庭に季節音痴の百合の花  
地上げ屋が宇宙開発夢に見る

酔っても軍歌の節は間違えぬ  
鳥取市 岩原喬水

音無しの構えて深夜妻が待つ  
新聞の悔みの欄にまだ載らぬ  
米櫃がゆっくり余生過ぎさせぬ  
酒タバコ止めず長生きしてみせる

鳥取市 坂田和歌子

クレオンの堅さで虹を描いている

酒飲みは李白の如く孤独なり  
あと五分充電します眠らせて  
手折っては駄目な浅い春の夢  
そつと指す椿一輪笠地藏

鳥取市 植田一京

手紙らしい手紙貫って読みかえず

ゆっくりとひとりを生きる深呼吸  
魅せられて追っていたのは蜃気楼  
明るくて苦勞語らぬ母が好き  
育つものありて林の風光る

鳥取市 倉益一瑤

愛と書く墨にこころを遊ばせて

不発弾抱いて力走するわたし  
日記帖を花園にするいい出会い  
風邪の菌くださったのも愛ですか  
夜桜が曲者にした春の乱

倉吉市 野口節子

万策を使い果して神だのみ

バードウォッチング庭に小鳥の声がする

小回りのきかぬ夫と腕を組む

困ったら来いと古里温かい

根回しが出来てのろしをあげて来た

倉吉市 最上和枝

午後六時雲が火攻めにあつている

針箱の中に見つけた小宇宙

桃色の入浴剤の小宇宙

優しさに負けてだんだん傾いた

葱坊主北でのろしを上げている

倉吉市 淡路ゆり子

浅知恵と対峙していた長い一日

わたくしはまだまだ生きる花作り

手の平に乗る財産を子にゆずる

早ばやと主婦業さばり湯に浸る

惚けたかな愉快な話ばかりする

倉吉市 松本よしえ

春なのにメランコリーな老いた鶴

北国の男が従いて来いと言う

口だけは一丁前の青レモン

通せんぼした子が今のお父ちゃん

賑やかな人で楽しいお先棒

倉吉市 米田幸子

風下に立つと情けが身に浸みる

けんかする度に絆が太くなる

仇敵と目差した彼が無二の友

掘り下げて古代のロマン眠らせぬ

子を塾へ送迎用の免許証

米子市 石垣花子

墓参り借り一つずつ返すよに

天気予報晴れでも傘は持つて出る

とろ火になって妻へやさしい事も言え

春のきまま咲くにも咲けぬ桜達

花冷えの日々を脱いだり重ねたり

米子市 木村富美子

宇宙からの光は差別などしない

無限大に生きるわたしは小宇宙

択捉よ日本に還ると言いなさい

雲行きで変心をするかもしれぬ

血を分けた絆が遠く浅くなる

米子市 林荒介

千年を厨子と過した仏たち

花筏むかし昔にたどりつく

蹲る犬か裏口はなれない

ハンカチに包まれていた紳士たち

積み上げた本が塔になった

米子市 茂理高代  
この先は言わぬ だが胸鳴り止まぬ  
傾いた橋でも無理に渡らねば

入道雲連れて逃げてよ極楽へ  
よい事がありそう北の切符買う  
椿活け里の山へと思ひよせ

米子市 野坂 なみ

高原の風に乗りたい種風船  
原っぱの隅で見つけた子のボール  
子の服にかたばみの実が付いている  
散歩した野原に亡犬を埋めてやる  
風の駅コント拾いに行ってくる

米子市 澤田 千春

挫折したわたしに桜のぞきこむ  
木も石もみんな持つてる小宇宙  
浮雲よあすははずいで浮くのかな  
泳ぐほど潮に流されゆく怖さ  
眼裏に北山杉が消えやらぬ

米子市 政岡 日枝子

花冷えや菜の花浅く漬け込んで  
蛇が身を隠すに浅い花の下  
浅く深くプライド顔をのぞかせる  
浅い山にも深く哀しい谷がある  
浅い林を軽くあしらってはならぬ

米子市 中井 ゆき  
雪柳ゆさゆさ私も右左  
木の芽から逆にエールが降って来る  
野の花も小さい顔で泣き笑い  
花の波泳ぎ切ったらお浄土か  
ゆっくりと仏壇の前ティータイム

米子市 木村 春枝  
鯉のぼり男を空に泳がせて  
お寺でも耳に蓋する噂聞く  
困り事 死のぎりぎりで考える  
何時見ても笑顔不足の顔を塗る  
何時までも子供に負けぬ自負を持つ

鳥取県 新家 完司  
点滴の如くしみ入る波の音  
スリッパを食べる痴呆有徳大僧正  
銭にならぬ特許をひとつ持っている  
犬の瞳も穏やかなりし桃の村  
いつ消える耳の奥なる爆撃機

鳥取県 乾 隆風  
春一番おれのほおかむりを外す  
畑打つ腰が曲って丁度ええ  
悪人と見たのか犬に吠えられる  
悶着の歯止めにしようナマンガブ  
不器用であいまいな手が使えない

鳥取県 乾 隆風  
春一番おれのほおかむりを外す  
畑打つ腰が曲って丁度ええ  
悪人と見たのか犬に吠えられる  
悶着の歯止めにしようナマンガブ  
不器用であいまいな手が使えない

春うらら名のある草も雑草も

鳥取県

鈴木公弘

風ぐるま魂までは売ってない

遅ぎくから見上げて安堵しています

燕の巢やがて空き家となる定め

風光る今日を信じるほかはなし

鳥取県

津村八重子

古い傘亡母の匂いの消えぬまま

駅弁の思い出旅の歴史です

初孫の仕ぐさにみんな目を細め

海山の幸に祭りの膳も栄え

紅うすく引いて老醜カパーする

鳥取県

西原艶子

母の忌や春は哀しいものになり

桜もち歯のない口へほおぼりぬ

気丈さは母似 母の血をもらい

古手紙開けば母がいてくれる

生き切ったように命の灯が消える

鳥取県

幸家単車

招かざる客が大手を振って来た

人の輪に溶けて話の種もらう

甘言の裏に大きな罫が見え

ひっそりと自己主張する影法師

青い空トンビのカーブ美しい

父の忌の香の煙にむせている

個性とや人が迷惑してる癖

ばあちゃんか唄ってるから暗れて来る

手も足も動く間は休まない

今日もまた昨日と同じ労働歌

鳥取県

羽津川公乃

母の日に派手目きつめの服届く

新緑に活力貰う爪も伸び

往年の酒量も減った祭り客

大げさに夫の送迎手を合わす

最終のカーブを越えたららしい風

鳥取県

橋本多哥由

定年後己のために朝起きる

キリストも仏も笑顔うつくしい

春が来て長電話する老いひとり

涙には弱い昭和の人間だ

気の弱い鬼で稀には経を読む

鳥取県

田村きみ子

七十の恋はスマレか菜の花か

おばさんの魚屋が乗る始発駅

駅のホームではったり合った過去の女

花粉症なぜにわたしが好きですか

六月の花嫁 紫陽花道に行く

鳥取県 谷口次男

傾いた家のドラマを忘れない

礼述べて鶴の一家が北帰行

あの雲が大地に恵みもたらした

愉快だが金のないのが欠点だ

社長の座ゆずると言つてゆずらない

鳥取県 土橋睦子

春の音聴いた土竜の運動会

夫病んで三年ぶりの茄子トマト

首だけを浮かした春の露天風呂

淋しいと言うが愉快な話しぶり

相性が合う悪友をかつき出す

鳥取県 土橋はるお

半分にしてごつつい話する

半分は妻へゆずると言つてない

相談の安受け合いはするでない

金の卵のメッキが剥けたお爺さん

雲一つないから本音吐きましよう

鳥取県 土橋螢

夢にみた浄土の春は花ざかり

喫茶店まで新聞を読みにゆく

有限の生命に許すことばかり

必ずや土に還るぞ草庵る

父ははのうしろの山が笑っている

鳥取県 岩崎みさ江

温暖化の地球の未来 子の未来

怒つても褒めても無視をする背中

ガンバレヨ気根伸ばせよ折鶴蘭

雑草に伸びろ伸びろと菜種梅雨

花びらよ白寿の窓へ舞うてこい

鳥取県 石尾かつ乃

普段着で来たおよばれに打ち解ける

後手ばかり歩いた過去も又たのし

イベントに参加するにも金が要り

合格の日から気付いた春の花

かくし味そつと教えて嫁がせる

鳥取県 黒田くに子

夢積んできついひやめし苦にならず

プライドをどこへ脱いだか露天風呂

脇役もホットな誇り背を伸ばそ

冷めた目で見てるテレビの政治劇

五パーセントが目目を回してのお献立

鳥取県 上田俊路

廃鉱になつても唄の月は出る

網を曳き亡くした過去を浚えてる

トップにはなれぬ男の批判ぐせ

冬の風計画外のことばかり

春の坂登つて夢を買いに行く

松江市 舟木 与根一

狭き門通る同じような顔

足元も老いたと露天風呂で知る

円安で発言権も弱くなり

筋書きが無いタイガース面白い

地価下落気を取り直す葱坊主

松江市 柳 楽 鶴 丸

バージロード資格審査はありません

万歩計お供に桜ウォッチング

妻であり恋人のような女です

距離おいて見たら素敵なひとでした

百万の味方妻と子と運と

出雲市 尼 れいじ

世紀末そんな言葉在玩ぶ

一本の孟宗竹が吠えている

アンパンをかじる日本の朝だ

匂を食うまた過ぎていたお酒

少しずつ薄くなってく朝のパン

出雲市 園 山 多賀子

響き合ういのち触れ合う阿伝像

骨のある魚丸ごと余命表

片ちびの靴です未だ無冠です

平均寿命勿体なくも越えませんでした

スカートの赤視かせて未だ女

出雲市 吉 岡 きみえ

春風にデマふくらんでふくらんで

貧も富も差別ないのが花の下

惜別のドラマ三月去ってゆく

財布のひもかたかくたく自衛策

白樺の絵にふるさとの路がある

出雲市 板 垣 夢 醉

雨漏りの音で借金妥協する

頭から指の先までおんな化け

門札も汚れて文字も歳をとり

白旗は生きる望みをつなぐ旗

ちと安い金魚も権利主張する

出雲市 石 倉 芙佐子

霧雨に金襴緞子も濡れてゆく

妹へ乾杯の唄掠れがち

父母と娘の最後の夜は花の雨

嫁がせて言うことも無い老い二人

フランスにローマ地図で辿れば夢の間に

出雲市 小 玉 満 江

かんざしが揺れる娘の晴姿

嘘溶かすグラスはスカイブルー色

我が儘を通し孤独な根無し草

腰に巻くセーター若い風の中

母系で三人官女が控えている

島根県 西村 早苗  
売れた牛が人を見て鳴いた別れ

夕やけがこんなに夢を持たせすぎ  
手帳にぎっしり書いて忘れんぼう  
コンピューター女心を探し出す  
マツチをすつていい運命をのぞかせる

島根県 森 茂美

車椅子押す老妻の影淡し

灯火が窓から洩れる共稼ぎ

閉山の炭坑におぼろの月が出る

花の下一句書き留む箸袋

四月馬鹿ボクの出番だ五円玉

島根県 松本文子

手を動かす足も動いてほっとする

地動説信じてからの不運です

卯月の海へ太陽は浅く落ち

今日も一人でなんだ坂こんな坂

もつともらしく戒名を付けられて

島根県 佐々木 鳳 笙

濁り澄むと逃がした鮎は藻に潜み

アムロよりキムタクよりも御老公

癌だと言えぬ空しい見舞いして帰る

担俵へ往年の父哀える

星屑の空へ捨てとくわだかまり

花咲いて生きる尊さ戦盲も

いらだちを抑えるような風の声

失明の指に野の花優しくて

うなずいて笑顔半分わからない

人並みに点字くらしのうたに生き

島根県 堀 江 芳子

夢のよう夢のようです初対面(吉岡美房先生)

とうさんも眠ったふりをしてました

銅鐸定期ロマンに託す夢抱いて

行く先はみんな同じの花浄土

辛抱を教えた亡母の星仰ぐ

島根県 小 砂 白 汀

せせらぎの音を葉わさび抱いて来る

菜の花で一輪さしも春になり

屋根替えの脳ミソ叩く槌の音

菜の花とさくらのけんか空が泣く

要らぬもの買ってしまつた消費税

島根県 藤 原 鈴 江

初節句雨降るな降るなよ鯉のぼり

髪染めて五月五日を祝おうよ

春活けて曾孫の寝顔しげしげと

悲喜こもごも嫁にゆく孫愛おしむ

温泉にひたり想いにひたり過去未来

岡山市 井上柳五郎

消費税よそに騒ぎの花の下

いらんもの買ったと妻に市場籠

お見舞いに思いがけない戦友に逢え

生きようよ幾度か散る命です

ちよっぴりも税の還付へ小気味よし

岡山市 時末一灯

長針は遅く短針速い日も

来し方を手繰れば自滅ばかりの碑

都市銀も並んでみせる崖つぶち

慎重にしたぶんミスが悔まれる

哭くもよし燃えるもよしと茜雲

倉敷市 田辺灸六

人情をこぼさぬように喜寿の皿

花曇懐古宮本武蔵駅

すつきりとしなない返事の隙間風

赤ん坊は無言の乳房驚掴み

嘘つきが洗い忘れているうなじ

倉敷市 小野克枝

石橋を叩いて石の返事待つ

首折って帰るピエロに明日があり

逆らえぬならば静かに背を流す

陰口を笑いとばせる齢になり

涙には負ける大きな手の男

岡山県 荻野 鮫虎狼

消費税なかなか酔えぬ花見酒

健康になれば就職先が無い

妻が買う花一輪の特売日

お隣の孫が可愛い日の孤独

Uターンした古里は春の風

岡山県 江口 有一朗

サムシングロング世間も私も

悟ったようなことが言えるも若いうち

若者の孤独な遊びたまごっち

会釈して通る名前は知らぬ人

二日三日帰省遊学の子も多忙

岡山県 山本 玉恵

ひっそりと花が生きてる息つき場

ハードルを越すには波が荒れすぎる

一寸したはずみで心舞いあがる

残り火のそこから先は地に埋め

B面につづくくらしのあれやこれ

岡山県 大石 あすなろ

おでん鍋噂ばなしも煮えつまる

身勝手な願いばかりの春の絵馬

歴戦の父も老いたか日向ぼこ

日やけ止め土に馴染んだ手につける

背で泣いた孫も二十になりました

呉市 横田英詩

暇過ぎて良からぬ空想してしまふ

善を積む祈りに足が痺れだす

的が外れて素敵な妻と添いました

瞑想の邪魔だ石焼き芋の笛

雨のち晴 地球ドラマを繰り返す

廿日市市 林野甦光

雑音を逃れ施設の草を摘む

危機管理狭い背中にのしかかる

むつかしい頭になったと散髪屋

突拍子な声が応援席にいる

空気だけはひなびた街の忠魂碑

竹原市 森井菁居

夜桜へもう騒がない五十路の血

ジャンケンで決まる敗北だつてある

卒業の日へ連れ戻す枝垂れ桃

平成の戦に向いた靴を買ふ

孫が描くアンパンマンも大人びる

竹原市 古谷節夫

夢の色なかなか出せぬ朱に凝る

臆病な鬼が夫婦で棲む館

お銚子がコロコロ本音吐く気配

パスポート予定はないが作らされ

政治家に明日の夢を消されそう

竹原市 石原淑子

恋一夜 定めのままに花吹雪

フキの葉の帽子似合つて地蔵様

菜の花やますます深き真行草

そんな事あつたわねえとさりげない

笹の舟大きな夢に揺れながら

広島県 藤解静風

背筋のばして女一生貫いた

前略につづき値上げの候と書く

折鶴は仏のかたちして座せり

お互いの弱みを知つてから夫婦

新駅に用もないのに降りてみる

宇部市 平田実男

かじるだけかじつた脛をばいと捨て

使わない金は石ころにも劣る

口答えしたい日もある寝たつきり

手紙焼いただけで清算出来ますか

蛙の子が蛙で恙ない我が家

美祿市 安平次弘道

夫婦して飲むコーヒーも久し振り

ペン先になぜか力が入りすぎ

あいまいなところが魅力かも知れぬ

帳尻が合えば無性に腹が減り

すねに傷あつてゆつくりしておれぬ

神戸市 木村 貴代子

待たれてる幸せたとえベットでも

校門へ万感胸に子と歩く

転ぼうと一人歩きのしたい年齢

来年の桜もここでこの人と

まりのごとはずむ仔犬と子に勝てず

尼崎市 春城 武庫坊

歳相応の顔にならないまま老いる

一枚の春ていねいに仕上げよう

草萌える力素足で確かめる

さあ四月 日々の生活変えてみる

曾孫誕生桜満開喜寿歓喜

尼崎市 春城 年代

夫婦して句を編んでいる花筏

たれかれに似て曾孫ひっぱりだこに遭う

風船のどこまで飛んだ母の湖

蕨の芽の萌えて高校一年生

漢方にかたむくゆるい下り坂

西宮市 奥田 みつ子

見渡せばときめきの芽のそこかしこ

喜びも怒りも沈め澄んだ湖

月の窓あなたもひとり私もひとり

花の下君はいっしか花の精

良心を時々暗い箱へ入れ

西宮市 門谷 たず子

かくれんぼもう出てこない友を呼び(坂野はつこさん逝く)

会者定離もう待合わす駅もない

花冷えや隣の椅子は空いたまま

残されて生きる限りは顔上げて

明るい顔で明日に会いたく歯を磨く

西宮市 山本 義子

息切れはわたしだけでは無いらしい

雨どいの落ち葉かき出し春支度

北山杉 花粉をちらす詫びを言い

山へ行く 天も地もただ優しく

鳥の声に目覚める宿のしあわせ度

西宮市 牧 淵 富喜子

青春の通過に雨の甲子園

そして又昨日になったある一生(悼 杉村春子)

歯が抜けて唯ひたすらのおちヨボ口

眠るにもエネルギーが要る知らなんだ

そくそくと足首の冷え特措法

西宮市 亀岡 哲子

吊り橋の下に風あり桜舞う

落花盛んブランコの子は飽きもせず

逆光に透くさくら花亡母おわす

息子四十 桜も四十 今盛り

ピザだってほんとは好きなおばあちゃん

西宮市 刈田泰司  
上手には言われへんけど好きやねん  
御堂筋ゴンドラ揺れる寒い窓

難波で降りると行きたいところがたんとある  
嫌いかと問えばいいえと首を振る

嫌いでもお金次第で好きになる

芦屋市 黒田能子

金持ちと思ったことのないわたし

大根の好きな寒さが去っていく

ひと言が心に残る長い夜

断った約束思う雨しきり

春の咳 花の見頃が過ぎていく

伊丹市 山崎君子

菜種梅雨花のにおいの傘たたむ

ひろい道直角にくる入園児

逢うたびに暇乞いだと老姉笑う

チューリップひとひら落ちて雨になる

武者堀を越えて花びら蝶のよう

宝塚市 上田佳秋

ことなかれ主義で味方も敵もなし

涙腺がこんなに脆くなって古稀

メーデーであんなに叫んだ木が枯れる

競馬新聞買いに駅まで二十分

雨しとど都会は男置き去りに

宝塚市 嵯峨根保子  
北斎の波を探しているサーファー  
筋みちを通して敵もすこしいる

銀髪の世慣れた顔に負けそうだ  
うどん屋と同じ匂いに出来上がり

花時計サンバが似合う波止場まち

加古川市 吐田公一

捨て石の読みの深さをまだ知らず

捨て石が起死回生の策となる

目になった石がとことん暴れ出し

油断した一石 目から鱗落ち

カッと血が上って負けたあの一手

相生市 中塚礎石

四コマの起承転結急所つき

見どころがあるから鞭もきつく打ち

透き間風 線香の火をかきたてる

手術あと互いに見せて湯につかる

单身赴任男が臭うランドリー

大阪市 津守柳伸

安らぎの旅三猿のリフレッシュ

脚光を浴びて姿を消すワイン

偶然に集う恩師のご命日

ふる里に積る思いが増す不況

換金の知恵図書券が見当らぬ

大阪市 河井庸佑

冗談を本気に取られあわて出す  
氣負つても壁は厚くて高過ぎる  
重い荷を担ぎ苦しむ自己過信  
ねつ造が通ると読んだ浅い知恵  
ふん飾の中味が洩れていてあわて

大阪市 本間満津子

善と悪お金も知恵も使いよう  
他人ごとやおまへん 私も適齡期  
発つときの顔は誰にも見せないで  
旅立ちには緑の頃と齡重ね  
その話止めて爽やか新茶の香

大阪市 西出楓楽

花少し多目に買って春ごもり  
芽柳ととくといのちのはなしする  
たてまえの言葉でつづる鬨病記  
聞き下手とおしゃべりが会う春の街  
組で言いたいことを切り刻む

大阪市 大塚節子

御厚情深謝 薄い葉書来る  
長い風邪全快 胃痛と入れ代り  
春日和 雲の裾で富士昼寝  
帯ポンと叩いた背に火打石  
菜の花の和えもの今日はもどり寒

大阪市 神夏磯典子

雨のち晴 いつも信じて生きている  
岬には父恋う花が咲いている  
好きなどこ一つあるから五十年  
近所にはやさしい友が居てくれる  
竹の子に妻が張り切る夕御飯

大阪市 稲本凡子

愛を編む二人の糸はもつれない(孫娘結婚)  
絵馬吊つて最敬礼をして帰り  
背のびしたカードが一人歩きする  
娘にはさびしい顔は見せられぬ  
煮えている腹を重ね着して隠す

大阪市 板東倫子

金城も錦城も良し花の城  
刻とまるかっぱ横丁古書の町  
大正の自負 漢字ならまかしとき  
一せいに情念芽吹く夕桜  
桜花賞 優勝騎手もピンク帽

大阪市 清水利武

日本を甘く見ている密入者  
渋滞へテールランプが眼に痛い  
受験生インスタントで息を入れ  
恋を乗せ涙も乗せてこまち号  
浪花からはるばる弓削へ句碑建てに

大阪市 玉置英子

大阪市 松尾柳右子

孫の数 子の数だけの幸がある  
思いがけずよくぞおかえり貸した金  
一つ鍋畑の違う諸を煮る

明日は明日 今日の終りの深呼吸  
山城の筈の出を待っている

大阪市 井上白峰

過ぎし日の愛憎手繰る古日記  
夢一つ抱いて点した心の灯

政治家が本音を吐けば大ニュース  
札幌に酔うて外れた人の道

選考に漏れて気付いた自己過信

大阪市 故大野武太

自分史をかけば奥歯がきしみだし  
はしくれの生業なれど子に遺す

七十一歳この人生は僕のもの  
腹がへるまだまだ生命あふれてる

一病を抱いて人生綱渡り

大阪市 寺井東雲

今年から鼻水の量多過ぎる  
野球部に女子マネージャー元気出る

ませている茶髪したいと幼稚園  
雪の下水の流れる音がする

似た声で奥様だます面白さ

おせっかい過ぎて祖母ちゃん嫌われる

おせっかい喜ばれるもたまにある  
暇と金あればおせっかいやきたいよ

仏壇の供物を拝む小さな掌  
背丈抜く孫にてい良く吸い取られ

大阪市 川端一步

人生の縮図が見える駅勤務  
友の計が続き電話の恐怖症

愚弟賢兄亡母の話で酒過ぎる  
わが家が基地である今日も飛び立つ

使い捨て万年筆が捨てられぬ

大阪市 松永会美

古希すぎて母の形見が間に合って  
古希すぎて数減るよりも増える友

友ありて古希を祝えるありがたさ  
白梅に寄りそうように紅梅が

しばらくは席も立てないラストシーン

大阪市 黒崎恭子

古稀になりやと歯車なめらかに  
ラブコール今日は何時にかかるかな

きらわれたカラスはすねて黒ずくめ  
むなしくてあざみの歌を口ずさむ

童謡が心にしみるハーモニカ

嘘をつきその又嘘を隠す嘘

大阪市 川内 呷笑

ユーモアは神が授けた潤滑油

夫婦して増えた白髪と物忘れ

沖繩の音が聞こえぬ特措法

駅一つ増えて近郊緑消え

大阪市 川原 章久

心に影させばでぼちん曇ります

北新地あの娘流石に女子大生

くねくねの人生枝に花が咲く

誘惑を蹴って帰って自画自賛

頭上から魔除けが睨む門構え

大阪市 小林 周信

春爛漫桜三彩吉野山

蕾なら前夜祭だと花見酒

ユーモアが通じぬ国の四月馬鹿

一人居の仮設に飾る招き猫

ちよっぴりですが入れておきます募金箱

大阪市 田中 節子

雨降って地固まりつつ来る夜明け

言うまいと波風の立つ狭間にて

天然に勝るものなし旬の味

背伸びして無理した頃の懐かしき  
句作りに我とわが身を食ってます

どの子好き嫌いはないと母はいう

大阪市 中田 あい子

黄門の行脚の足がうらやまし

おはぎよりケーキが売れるお中日

すばらしい字を書く友の筆不精

父母の法要の寺の花ざかり

堺市 桑原 道夫

只今の地球を思う目玉焼き

花の下ズボンに風を孕ませて

よれよれになつて純喫茶に入り

書庫鬱然わが身から洩れでる空気

たたまれた昆布をひらく肉欲か

堺市 吉本 菁風

お好みの味噌が織りなす食文化

そら春だ出端をくじく花粉症

ビルばかり高灯籠は孤高なり

誇りだけ残り看護に手がかり

飲み忘れ薬がたまる社のデスク

堺市 近藤 豊子

川の汚染岸辺の桜きれいのに

入学式すんでのどかに散るさくら

ふしぎそうに桜見あげる女の子

ほのじろき春のまなざし桜さく  
桜前線 今日から日本らしい空

高石市 浅野房子

雪の朝 金の成る木も枯れていた

他人事で済まされぬのが低金利

年齢の限界を知るカート引く

片思いばかりしてまだ死ぬぬ

マイペース マイペースとて骨休め

豊中市 田中正坊

功成らず太郎が帰る菜種梅雨

FAXで父上さまと書いてくる

しあわせとは何か今ごろ考える

好きな事好きだけやり日が暮れる

幸不幸みんなこころの中に棲む

豊中市 安藤寿美子

孫十八タカラジエンヌになり損ね

ふんふんと素直に育った十八歳

うかれても居れず学費の工面する

君だけがわかってくれると言われても

団菊の勧進帳を見た火照り

豊中市 吉田あずき

花だより月もふかふか浮いている

おのおの花に会いたい人がある

ユーホーが来るやも知れぬ春の宵

春眠や車掌に今日もつつかれる

あと一〇〇〇日行方不明にならぬよう

豊中市 滝北博史

象さんも見るか鎖のとれた夢

お浄土の花かヒマラヤ雪の下

川柳で不断煩惱得涅槃

宇野千代が春夏秋冬着た桜

震災後減った気がする猫の恋

豊中市 稲葉眞郎

苦も楽も支えになって五十年

琉球にも高天が原や天女達

屋敷街の散歩桜と語り合う

春毎に孫は大人に見えてくる

春の朝笑顔千両紅を引く

豊中市 湯浅馬洗

芸七十年 桜花を供に幕下ろす(杉村春子さんを悼む)

割り切れぬ世の算式に四捨五入

生き生きと人間詠んだ一行詩

ご免だね家内と同じクローン人

僕の癖古い手紙を捨て切れず

池田市 岡本吉太郎

パチンコ屋さすが盛り陰がさし

耐えてまつ人は心に虹見てる

何も彼も水に流せるよい日本

ビタミンをたっぷり取らせ尻たたく

タレントは悪いうわさでよく稼ぐ

箕面市 岩津 ようじ

お帰りなさい優しく愛想よいセコム

怪しからんほど変わる常識

子を抱けば美女も才女も母の顔

よう飼わんに犬ついてくるついてくる

白い雪なぜ美しく見えるのか

吹田市 栗谷 春子

八十のおてんば過ぎてまたぐらり

外科病院殺風景がとりえかも

絢爛の春のひびきもいただけず

左手はなさけの手です知りました

病窓にはじめて白い桜見る

吹田市 瀬戸 まさよ

桜散るなかで眠る死涅槃図か

懐かしい思い出なぜかときめかず

主婦の知恵銘柄よりも味を買う

筍も、ふき、えんどうもみな並べ

似ているがうなぎ嫌いで穴子好き

茨木市 堀 良江

水槽にブラックバスの気弱な目

空グラス女の話まだ続く

実話よりよく出来ている裏話

新芽吹く冥府へ若き友送る  
お別れの読経延々黄砂降る

茨木市 島元 ふみ

外の顔置いて来はった寝息かな

呆けた母古里の歌狂いなく

いつからか寝るだけの夜老い二人

友達より主人の方が馬が合い

十歳も若手が年だなどと言う

寝屋川市 柴田 英壬子

これ以上山を削らぬ鎮魂碑

女系家族支えて老いた百日紅

物干しからくちなしの虫教えられ

さるびあの真紅わが家を元気づけ

ダンヒルを吸う指の線意識する

寝屋川市 岸野 あやめ

不信感抱いて深爪切りました

病名を知らずに逝った美しさ

消費税上がる 食い溜め出来ぬのに

役所にもへそ練りの要る訳がある

どんな道巡る札束手から手へ

寝屋川市 堀 江 光子

若々しく見えるのを選ぶ老眼鏡

老眼鏡もう大切なパートナー

梅地下のうどんでほぐす旅疲れ

ひやかしの道具屋筋の小半日  
或る日ふと辻を曲って行っつきり

寝屋川市 富山 ルイ子

服たたむ明日死んでもいいように  
若葉萌える胸に嵐が吹くけれど  
アルゼンチンタンゴ終る夜の三時  
政治の貧困 寝た切り抱え知る  
来世もまた親子の絆結びたし

寝屋川市 太田 とし子

一本道だからケンケンして歩く  
敵味方幕の引けない仲間たち  
ここまでは来たがここから帰れない  
正直が恐いの うそがばれるから  
家族かナ時には混線する電話

寝屋川市 北岡 波留吉

片隅で弱者が嘆く大都会  
満ち足りて辛抱出来ぬ粗衣粗食  
無理すなと嫁が諫めるやせ我慢  
家伝薬信じ切ってる医者妻  
落ちついて見てられぬ子の初舞台

寝屋川市 後藤 黎之助

下積みの玉葱新芽出してくる  
飽食の子供らパンの絵は画かず  
雨の日のテートは野球場と決め  
定年はバックミラーに支えられ  
春うらら嫁と姑はお買物

寝屋川市 籠島 恵子

齒科の椅子おもわずうがいしてしまっ  
世辞を言うお客に苦い茶が入り  
しあわせな人ね夫を振りかざし  
春の山 山の笑いをたしかめる  
そしてそうして夢をけずっている五十

枚方市 二宮 山久

社会人一年生の子の寝顔  
嫁がせた娘と平和な長電話  
定年がまぢかとなった趣味多忙  
インシュリン打ってもお酒やめられず  
就職の息子とローン終えた肩

枚方市 八田 敏

家事介護 倒れられぬと万歩計  
花の道桜が語る世の無常  
芽吹く木々取り残される老いふたり  
野草の名 孫に教えて野辺の道  
悩みみな日記に預け夢枕

枚方市 森本 節子

菜の花は黄色のさざ波日は真上  
蝶の羽化造化の神は手際よく  
いかなごのき煮 変らぬ友うれし  
コバルトの絨緞土堤の犬ふぐり  
へール・ポップが京の夜桜かいま見る

枚方市 海老池 洋  
臥薪嘗胆 鬼になれ鬼になれ  
大津絵の鬼の憎めぬ面構え  
聞いてくれる人を友だと思ひ込み  
一浪ぐらいとみな慰めてくれるけど  
閉山に残るはストの物語

枚方市 前 たもつ

ヘルメットへ思わず返す朝の礼  
夜遊びと娘にうつるらし僕の趣味  
桜の夜 確かに亡父とすれ違い  
妻といる夜はちつとも怖くない  
人生八十慌てることは何もない

交野市 福崎 しげお

ラベンダー咲く頃おいでと娘の便り  
国後を呼べば無情の霧に消え  
絢爛の城に長蛇の花の下  
彗星は見えず眠らぬ街の空  
年金で恥ずかしながら太鼓腹

東大阪市 森下 愛論

銘柄はいとみませんと酔っている  
老春の一時火を吹く疼く胸  
散るさくら風は裸足で駆け抜ける  
花に寝て転がせている缶ビール  
露天風呂桶の銚子も浮かれてる

東大阪市 指宿 千枝子

咲きましたよ亡夫に白いリラの花  
白い骨は花のように見え  
聴診器古書の店主になりたくて  
百聞を確かめたくて旅に出る  
日本に帰り満月懐かしや

松原市 玉置 重人

美しい花美しい国に咲く  
欲みんな捨てたと欲を捨てぬ顔  
守備範囲譲れぬ線と譲る線  
無理すまい無理はすまいと思うけど  
百歳をめざしています粗衣粗食

松原市 小池 しげお

沈丁花母に暫く会ってない  
住職の袋で鳴っている電話  
神棚の奥に祀つてある宇宙  
自叙伝を馬鹿な男が書いている  
裏切りが頭を刈つて現れる

藤井寺市 中島 志洋

しぶしぶで慣らされてゆく消費税  
負けるが勝ち果てない平の処世訓  
才媛がいつか愚妻に恐妻に  
久し振り初恋に逢う若作り  
ライバルが賛成だから反論し

藤井寺市 福元みのる

サングラス外せば純情可憐な眼

眼鏡とるそろそろ涙溢れそう

一生を眼鏡は無しですみそうな

子報官の自信に合わず午後後の照り

無駄話中にひとつのヒントを得

藤井寺市 高田美代子

うす汚れに気付く五月の風の中

一年のごぶさたでした毛虫這う

張りつめたものをふっ切る深呼吸

おおかたの役目を終えてのびたゴム

一気飲みひと汗かいた後の水

羽曳野市 田中透太

来年の約束をする通り抜け

北の窓開けて五月の風を入れ

寂しくてポストの前で佇ちどまる

冗舌が過ぎて桜も散りはじめ

春の雪訣れの駅に降り積る

羽曳野市 吉川寿美

いろはにほどの字が足りぬ子無し妻

ゆで玉子つるりとむけて抱く謀叛

エプロンで涙をふいてもらい泣き

子に見せる父の背中の中 正誤表

遮断機が降りてしまった鬼ごっこ

八尾市 宮西弥生

夢いっぱいわたしにください花の下

歯の治療すめば旅に出かけよう

この人もあの人も逝く神のミス

椿ぼとり明日はわが身かも知れぬ

目立たせ上手で髪を切ったり伸ばしたり

八尾市 内海幸生

花見した去年の席と同じでも

人間の勝手に花につく値札

墓参り亡母の好みは安い花

一本の野菊が似合う机なり

水やって去年の鉢がつけた花

八尾市 吉村一風

ゴンドラに乗ると雲から誘われる

腰かけた石に生き方聞いてみる

竜宮でゆっくりしてと流し雛

朝刊の読む順 子らに変えられる

菜種梅雨きつと筍うまかろう

八尾市 高橋夕花

縁あって桜いち枚肩に来る

春愁の郵便函のしらじらし

娘を生めぬ母華やかに身を包み

パソコンは私に遠し墨をする

病む人に届いてほしいわが祈り

八尾市 高杉千歩

改札機わたしの切符二年生  
あじさいに銀の雨ひき筆をおく

ゴールデンウィーク子の城へのぞみ号

てにをはに迷い削除キーを押す

銭湯がガレッジになる五月闇

八尾市 生嶋ますみ

木の名前梢見あげて問うており

病む姑のささいな甘え聞いてあげ

遠まわりして買物も三千歩

言いすぎてせめて夫の布団敷く

蛇口全開 水まで派手に使う癖

岸和田市 岩佐ダン吉

口癖に母さん明日は晴という

苦しさにカーブを切つてからの僕

チャップリン笑い怒っている私

多数派の中に虚ろな僕がいる

ゴールインみんなと握手してしまふ

岸和田市 芳地狸村

凍雪のシベリア越える直行便(日航ロンドン便)

衛兵にヤギが並んでいる儀式(バックینگラム宮殿)

バラ窓に七百年の彩がある (ノートル・ダム寺院)

写真よりやっぱり凄いマッターホルン(スイスアルプス)

地下鉄になれた三日目もう帰国(パリ地下鉄)

岸和田市 高須賀金太

ユートピア追つてお粥を食べている

議員バツジを絶対はずさない勇氣

見ていると眠くなります春の雲

薄い色かさねて僕の彩をだす

沖繩を軽く見すぎてくださいませんか

岸和田市 長谷川 呂万

もめ事へ花一輪が角をとる

貸金の催促に要る中ジョッキ

空席へ友呼ぶ声の逞しさ

女子アナの早い言葉に置き去られ

ギャンブルに奪い取られている余生

岸和田市 藪野 けい子

クローン羊のセーターを着てみたい

五パーセントが冷蔵庫に入れたまま

新駅にふらりと降りる東西線

旅情を抹茶と琴で迎えられ

雨の中 桜の小道女連れ

岸和田市 寺田 甚一

孫は伸び私はちぢむこの落差

年度末人事異動ももう無縁

消費税アップもすぐに慣らされる

ここだけの話まともに受けた鬱

琉球はアメリカよりも遠い国

富田林市 片岡 智恵子

立ち話ひとりはきつと聞き上手  
名案なくただ妥協の手打っておく

欲に欲運気は日毎遠ざかる

老いて今キヤッチボールが狂い出す

さわやかにさざ波のこし孫かえる

富田林市 池 森子

星屑を撒いて下さい王子さま

しあわせな涙ぼろりと華の湖

風が動いて沈黙が破られる

曇天を割って男の子が産まれ

強がりを書いてぼろりと花の首

河内長野市 井上 喜醉

ラーメンが好きな浪速の酔っぱらい

宴会の酒なら酔えるから不思議

脱サラへ人生賭ける肝っ玉

飲み込んだ言葉が嫌な喉仏

引っ越しの寺もの言わぬご本尊

和泉市 西岡 洛醉

日向ぼこ温い心を無位無冠

正論を吐いて前進する歩幅

古傷を触って脱いだ鬼の面

太陽がゆっくり回る日のドラマ

今日の糧稼ぐ日銭へ靴を穿く

和泉市 岡井 やすお

老いの日々為す術もなし消費税  
新刊書図書館に出ず立読みに

第二節ばらつき出したプロ野球

雨の日のデートは野球でも見よか

婦唱夫随また良しと説く披露宴

大阪府 榎山 隆盛

六月のうつ旗日なくかびる雨

つゆ晴れ間額に入れたい二上山

シナリオを読んだドラマにはまりそう

引金を立派にひける指がある

米朝に納得 自信ある笑い

大阪府 八十田 洞庵

りんごむく男に嘘は言い出せぬ

はしゃいでるピエロの胸に入試の子

鳴き砂がつぶやく人を待っている

桃の花風も口づけして通る

炎溜め女は今日を梳る

京都市 都倉 求芽

火に油 水に油の国界

陽炎の河原に青春基地がある

結末はおのれも知らぬ句読点

息抜きを昔ながらの坪庭で

挨拶は半人前の議論好き

京都市 山海友 熙

真つすぐに川が流れる母の里  
故里よわたしを忘れることなかれ  
雨の降る街よわたしも濡れている  
六月の空にわたしの白い雲  
京の風心の中を吹き抜ける

京都市 大河 未佐子

路地の朝 三重唱の若き僧  
雪解けの便りに桜舞い降りる  
キューピッドになつたつもりよフフフフ  
決断の届も薄い紙一枚  
ええ齢で恋しています花吹雪

京都府 稲葉冬葉

春の雨によきによきによきと芽が笑う  
ただいまを受け止めてやるだけの祖母  
旗たたむ勇気を妻が持っていた  
全快の呼吸青春謳歌する  
子を捨てるほどの男にまだ会えぬ

奈良市 宮口 笛生

消費税五パーへ財布花冷える  
意地悪な雨満開の日曜日  
娘の離婚話へつづく曇り空  
キリシタン弾圧の悲話聞く五島  
生きづくり五島列島海碧く

奈良市 吉田 笑女

いい話また聞きもらす老いの耳  
雨三日つづき桜も散り急ぐ  
古都奈良の暑い日ざしへ傘が要り  
仏前に供える小菊赤白黄  
春彼岸お墓詣りへ行きそびれ

大和郡山市 榎原 慧心

うるさいと孫には言ったことがない  
震災の話題も遠くなる月日  
想い出を花嫁の父捨てかねる  
過去がなく未来ばかりの孫を抱く  
退職の花道かざるひと仕事

大和高田市 岸本 豊平次

梅桜牡丹紫陽花 大和みち  
庭隅に春蘭山の色で咲き  
興聖寺琴坂歩く水の音  
定退が朝一番に散髪屋  
安物も粗大ゴミには出し惜しみ

奈良県 長谷川 春蘭

九の年の九の日句作りさわやかに  
路味噺が小皿の中にある故郷  
早春の香り商い白川女  
面影が揺るるよ庭のかすみそつ  
折込みの広告の嵩春を告げ

海南市 三宅保州

紺碧の空にもオゾン層破壊  
青色でないが青信号である  
人生に灰色だけはなくしたい  
保護色に染めても滲みでる私  
魂はどんな色でも描けない

和歌山市 福本英子

花の雨うわさ話も湿っぽい  
花に逢う約束流す雨つづき  
食い違ふ思いばかりを子に賭ける  
子に見せる背は真っ直ぐ伸ばして  
耐えてきた数だけ刻む母の皺

和歌山市 堀端三男

なぜなぜと孫に兜を脱がされる  
貧富老若選り好みせぬ自動ドア  
グラスから旅のロマンが香り立つ  
無になればはつきり聞ける天の声  
誘惑に勝って孤独になつてゆく

和歌山市 玉井豊太

酔い心地うれしい舌がよく回る  
老人に道順とえば念入りに  
童顔の面影みせて久しぶり  
遅れずに世間の波に乗っている  
山育ちはだか一貫まらちに出る

和歌山市 山田高夫

正眼に構えた背だが隙だらけ  
お値段も手頃と客を値踏みする  
貧乏も板についてる無精髭  
小細工が出来ぬ無骨な指の節  
負けたなと心で思う久し振り

和歌山市 桜井千季

敵討ちみたいに捜す誤字脱字(二百号記念合同句集校正)  
三隣亡パチンコ玉も入らない  
通りすぎて螢光灯がつく廊下  
四月一日快晴孫の入社式  
目移りをしている隙をつつかれる

和歌山市 宮口克子

土壇場でみせた女のいい度胸  
欠点はあるが異性として魅力  
山動くさあ立ち上がらねば男  
それからの熟成されたきみに逢う  
鍋一つ焦がして一句出来上がる

和歌山市 古久保和子

折られそうな方へ花の芽伸びてくる  
素うどんで済ませたなぞと見えぬ靴  
畳紙を開いて亡母に風送る  
ラムネビン出られないままおわる夢  
左手の温さに誰も気付かない

和歌山市 福井桂香

東京都 山口新子

ワンカップ提げ逢いにゆく夕桜

溜息の鎖でつなぐ虞美人草

草叢へ私の皮を脱ぎすてる

街に住み如蓮華在水などおもふ

結び目を一つほどいて若葉かな

和歌山市 山口三千子

どのページも曇りばかりの古日記

パーシロード ロボットのよう歩く父

郵便受けにまだ消しきれぬ娘の名前

夫婦喧嘩犬そわそわと落ち着かず

子は巢立ち心通わず共白髪

和歌山市 川上大輪

春だ春だ環状線をひと回り

乾杯が済むまで紳士淑女です

迫力で大阪弁が勝っている

悔やむのは勝負がついてからで良い

ガラクタにされた宝は亡父のもの

和歌山市 川上富湖

切り身ふと一匹だった頃想う

爪先を鍛える背伸びするために

風媒花今度の風に期待する

紫陽花と組んで女の処世術

捨て台詞チラシの裏に書いてみる

天仰ぎ病状を問う泣き上戸

病む君へ無力な足も腕も組み

花便り今日も脳天通り過ぐ

お守りに手術成功報告す

退院の報そめい吉野も七分咲き

横浜市 清水潮華

話せない愚痴掃除機に吸い込ます

長生きの秘訣も聞いた通夜の席

ばけ話面白そうに他人事

ゴミ捨てに行くにもタバコ放さない

バスの窓少しわたしの風入れる

静岡市 安本晃授

死ぬまでは男で生きる夢を抱く

団欒へチョッピリ茶化すランドセル

自叙伝は知ったかぶりの語録集

目の前で僕を呼んでる明日の風

老春へ造花の蜜が薫る朝

富士宮市 渥美弧秀

晩年の夫婦に幼友の計が届く

霧雨けむる中を妻との散歩道

若葉萌え富士へと続く万歩計

毛糸編む妻の背丸く夜の底

背の孫と歌って帰る影法師

羽咋市 三宅ろ亭

世の変遷四大年号中を経て  
一年生たった一人で入学式

祭りの日 土日に変えている行事

笛名人呼出し役も兼ねている

木蓮の花びら拾うまつりの日

富山市 酒井輝

角曲り違えて運を拾い当て

ジュースなら強いと下戸が如才ない

同サイズなのに合う靴合わぬ靴

本当のひとの情けは棘もある

唇のモデル脚から気を遣い

富山市 島ひかる

死ぬるとはこんなものかと深呼吸(近親者の臨終 四句)

にぎり返す余力ない手を握り締め

鑑真の瞳にじっと見つめられ

時刻表だけが知ってる一人旅

母になる兆しへ送る姫ラッキョウ

富山県 増田紗弓

乗ったことないでしょ汽車の窓からは

石炭のおい煙もなつかしむ

さよならが言えず燻るような雨

花鋏ちよつと謝りながら持つ

執刀へチームワークが頼もしい

仙台市 川村映輝

妻病んでお粥を作ることに覚え

買物で好きな海鼠も買ってくる

冠雪の蔵王は雨で縞模様

万民が飢えても軍備怠らず

万歩計初うぐいすにしばし立つ

弘前市 小寺花峯

エリート顔は賄賂にあたるかも

愚痴を蒔く酒がほそぼそ立ち上がる

開店の車はスピード出したがり

義理少し欠いてる額の熨斗袋

泣き虫の涙を入れた洗濯機

弘前市 岡本花匠

懸命のペダルの汗へ握り飯

あるがまま空華の両掌弥陀憑み

表札の柿落しや自己主張

花びらを盃うけて花浄土

人生の重荷ふっ飛ぶ花見の輪

弘前市 相馬銀波

雨読して睡魔に負けている農夫

菜園のキュウリ猫背をもて余す

離農する古希の決意は問うなけれ

チャンスまで素振りが続く無精髭

裏面史はいつも小さな声で読む

弘前市 高橋岳水

幸せの王道は無し靴の紐  
序列から外れて人の道に出る  
対岸の花に見惚れて蹴躓く  
父の背の原風景を撮っておく  
花小函わが青春の秘宝館

弘前市 中山雅城

雪回廊巖しい冬の風物詩  
一度だけ遊んでみたい無重力  
無気力にはならない達磨さん  
割箸がパチンと割れる夜鳴きそば  
ゆっくりとしてはおれないチンドン屋

弘前市 佐治千加子

高い高い雪の回廊青い空  
雪の回廊かの日の亡夫と語り合う  
風花や湖の目覚めの初々し  
雪どけの波たぶたぶと乙女像  
しっかりと春をつかんだブナの森

弘前市 高瀬霜石

敵だからおいしい話だけします  
散る時がくれば散るのだから いのち  
後片付けで決まる仕事の出来不出来  
満身創痍僕はますます強くなる  
戦争の話になれば長くなる

黒石市 相馬一花

どの酒もすぐ空になるめてたい日  
生臭いこの世が好きで逝きそびれ  
八分から七分へ減らすダイエツト  
右肩を無理して上げる女文字  
本物のパパと入らぬ喫茶店

弘前市 櫻庭順三

津軽富士を借景とするゲレンデよ  
冬晴れてはじけるほどに滑らされ  
樹氷から根開きになるシユプールよ  
しょぼくれるように豪雪遠くなり  
南風ふわりとくるみ雪を剥ぐ

弘前市 蒔苗果林

四月降る初雪のような雪いとし  
リボンから春風そよぐ娘と並び  
孕んでる蕾の息吹く樹が怖い  
さみしさとりんごの落花浴びに行く  
うたた寝に一つのドラマかたがつき

弘前市 須郷井蛙

バス旅行わたし一人にバスを止め  
大病院すぐに退院させられる  
六十の手習いステツプ ミスばかり  
終列車酒と煙草の香にむせる  
人事部の小匙に地震まだ続き

冥福を祈り続けて一周忌

八戸市 島田昭治

亡妻恋し一年経たら余計恋し

亡妻恋しのり子のり子と泣きながら

亡妻恋し涙流して句を作る

只今と旅行帰りの亡妻の夢

青森県 西谷大吾

ライバルがいるから生きる張りも出る

真っ当に生きて無縁の立志伝

うっかりと本音を吐いて荆棘を踏む

一合の酒をエキスに句を捻る

輪の中で建前論が泡を吹く

青森県 諏訪柳々

大川の流れさえぎる葦になる

ラブレター落とした涙紙魚になり

退職後野武士の如き形にいる

女房には落としたという空財布

咬みつきの牙を抜かれてベットにされ

砂川市 大橋政良

肩書の外れた日から宙に浮き

説ってるからワープロに出てこない

履歴書に尻餅ついた跡がある

さりげない素振り煮えくり返る肚

おこぼれがあるから頭下げている

鶴渡来 借地の餌場とも知らず

降り込まれ造花で花見温泉も

一つずつ芽出すほかない憂の種

雲行きに左右されては先送り

熊本県 岩切康子  
唐津市 田口虹汀

妻と言う役目を果す旅に出る

釈迦にでも聴いて見ようか夫の役

流れ星今日は何処を宿とする

我が庵は童話の生活孫が来る

唐津市 浜本ちよ

心配が次々湧いて呆けられず

淋しさに長電話する妹哀し

世の流れ早さについて行けぬ老い

水墨画草木の心見直して

香川県 永峰伽名子

たまげましたエジプト首相の招待とは(婦夫妻に)

春はお札の羽音に財布宙に浮く

大人になれないおとなのコンプレックス

鷺たち静かになつたら帰って来い

今治市 矢野佳雲

朝礼のよう箱詰めのサクラランボ

味噌汁に卵落として一人住む

手の切れる札に汚れた釣りをくれ

心配をするなど男傷を嘗め

高知市 北川竹萌

米子市 林瑞枝

ニユース見る金沢八景二男住む  
オーバーホール 八十半ばの身と心  
会静か軒端に雀覗いてる  
新しい夢花の種買っている

高知県 小澤幸泉

飼い猫も一人前の成人病  
生かされるつらさ喜び負とともに  
においだけ残し息子の春の部屋  
十字架の何をか耐えん主とともに

鳥取市 前田一枝

手を引いた孫に引かれて寺参り  
ダムの底さくとも今年咲いたかな  
好きな娘が目の前チラチラして困る  
春雨にぬれてしょんぼり青を待つ

倉吉市 野中御前

頂上が近づくみんな待っている  
ごめんねですむこと済まぬこともある  
向かい風くの字になって突き進む  
ゆずられた椅子で切れ味試される

倉吉市 山本玲子

実力はないが気分でもっている  
城下町ひときわ目立つ寺の屋根  
それからと座り直して説教だ  
もう嘘はばれているのに物申す

青春を過した風の絵と生きる  
もぎたての真夏のトマト恋しがる  
夕茜見えないものに見守られ  
縁あつて出会う蜻蛉もかまきりも

米子市 白根ふみ

瀬切りに立つと浅知恵が流される  
湿原で神のさずかりもの宿す  
どこからか神が出没する宇宙  
千切れ雲思いいもいでまとまらぬ

米子市 鷺見正子

夫婦春秋うたつて義父母の恙なし  
パチンコ屋の前を無視して通れない  
宇宙から来た弟のお嫁さん  
孫帰る も一人子供産もうかな

米子市 永井三津子

天国に一番近い場所死ぬ  
同席の美人に脈が狂いだす  
裏切られ傷付いたって人が好き  
ハイヒール暗い明日など跳び越える

鳥取県 さえきやえ

おきなぐさ今年も笑いくれました  
四歳の孫が勉強せぬとなげく人  
亡き友のはなしにもどる花の宴  
雨三日心ゆくまで写経する

鳥取県 石谷 美恵子

祝い鯛値切り上手も遠慮する  
さようなら私が先に言うつもり

別れるのは桜が散ってからにする  
隙のない奇麗な嘘で攻めてくる

出雲市 久谷 まこと

隙間風夫婦の絆伸びちぢみ

視野ひろげ詰めかえていく知恵袋

世渡りのまずさが酒を出し惜しむ

仲直りしたが拳はそのままで

出雲市 富田 蘭水

会者定離さくらの花がぬれている

子育ての鳥に頭を下げている

角度かえ船はゆっくりこの別れ

古稀という言葉に酔って老い早め

出雲市 小白金 房子

おち椿過去は語らぬ思いやり

紙雛も二人で並ぶ春の段

頼られて役立つ日々へ感謝する

対話から口論若さ筋通す

岡山市 花田 たけ志

数年も前に故人と知る電話

油注ぎよりも手袋鎌が好き

ほけすすむ自覚にわびしい日が続く

ほめられて痛しかゆしの真似手芸

岡山市 川端 柳子

一時間位すぐ経つ本を伏せ  
若いっていいなあ燃えることばかり

一呼吸する間も落花相を変え  
花びらはピンク召されて舞うた天(杉村春子さん遠く)

倉敷市 井上 富子

美しい嘘で包んだ惚れ菜

ほろ苦い条件も呑む角隠し

あの日から寡黙になった妻の笛

花の下あなた好みの若づくり

岡山市 二宗 吟平

目がかすみお酒を一寸飲んでみる

卒寿きて髪の黒さを賞められる

目覚し時計叱ってみたら遠い耳

講演会一番ボロの傘を持ち

岡山市 福原 悦子

愛憎を分け合い歩きダイヤ婚

こぼれ種生きる力で芽吹いている

無口でも睨みを効かす父が居る

何よりの薬と思う子の笑顔

岡山市 岩道 博友

先生が安売りしている妥協癖

年表を持って先祖の墓洗う

図書館で歳時記を借り見送られ

自尊心構えて邪鬼の街へゆく

動燃へ友達の子が就職す

赤瓦堂々として廃寺なる

浮き足でうっかり鬼と手を組んだ

歳月や見てきたものは幻か

広島市 森田文

人間は小さき者よ波頭

Gパンの穴を夫として叱り

この年でテストの夢を二度三度

地を割ってうす緑なり大根菜

竹原市 岩本笑子

苔に慕われて五輪の塔眠る

月の海私のものとした渚

確実に白髪が増えてくる鏡

信じよう花も素直に咲いて散る

竹原市 時広一路

3分の2は女ばかりの老人会

老人会小学校の歌へ気が合つて

八十過ぎの私が乾杯の音頭取り

私の臓器はどうぞ提供する

柳井市 弘津柳慶

体騙して病と仲よく生きてます

整理整頓わたしの辞書に見当らぬ

青信号時には落とし穴がある

騙し舟目を瞑ってはいけません

神戸市 山口美穂

一卷の絵巻を終えた桜なり

木蓮の花白々と亡母の里

夕ざくらとすつぽり空の中にいる

さくらさくら生きる辛さと楽しさと

西宮市 西口いわゑ

匙の背で卵の頭ボンと割る

地下街の泉にたまる待ちぼうけ

桜咲く城は栄枯を偲ばれる

わらび取り言いたい事の言える仲

西宮市 菊池トミエ

同じように育てた子等にある個性

成人の息子に亡夫を重ね見る

孫どもの若者言葉通じない

夫逝きし後は強気で子を育て

伊丹市 小熊江美

知らん顔しても聞き耳立っている

頷いて知ったか振りでどじな奴

極道が今の自分を支えている

ほどほどに色気あるひと待つ今宵

宝塚市 黒台伊佐武

すい星を見つける空の消えた都市

何となく生まれそのまま生きている

間一髪無常の風がそれてくれ

口下手の切り札皺のついたまま

川西市 松本ただし

川西市 氏 林 洋 敏

金で買う喜びなんてしてている  
すぐ怒るとつても涙もろい人  
お隣も深夜テレビをつけている  
戦争に勝った話をする明治

大阪市 町 田 達 子

暮れ残るアヒル一幅の絵になつて  
惜別の曲流れてる花の下

春の鬱 魍魅魍魎が往き来する  
久々に訪う息子の家タローが真つ先で

大阪市 渡 部 さと美

言わぬのも愛でその場からはなれ  
パチンコ開店 客も反対派も女  
齢なりの脱皮をしよう春だから  
柵打てばもうはい上がるつるの先

大阪市 藤 田 頂留子

歯にしみるしあわせ色の朝イチゴ  
風みどり心の窓をいっばいに  
あれもこれも心痛める記事ばかり  
昨日今日あしたへ二十一世紀

大阪市 北 勝 美

紙おむつ買うのにさえも消費税  
お花見ヘナース付き添う車椅子  
足腰の痛さに耐えて看とる老い  
埋めといて律義に咲いたチューリップ

大阪市 辻 川 慶 子

ひとつすめばひとつ始まる紅をひく  
改革の三寒四温まだ咲かず  
連休の母はせつせと五目ずし  
エヌジーを重ねて生きて早古希に

大阪市 清 水 絹 子

さざ波も昨日はきのう嫁姑  
あの辻まであの辻までと子を送る  
また明日に残し夕餉の八分目  
誠心誠意も母に及ばぬ姑の性

大阪市 小 糸 昭 子

労使共ボタン一つが噛み合わぬ  
留守番はたった二人の内裏様  
脳内革命側頭葉が働かぬ  
ブレーキが互いに踏めぬ好敵手

大阪市 奥 田 良 子

眼の奥に光るものあり恍惚の人  
雨やどり歩きつかれる虹の町  
山国の小さい駅のレンゲ畑  
街灯もみどりに光る御堂筋

大阪市 福 岡 雅 楓

まわりつつ毒の翳りを持つ地球  
眠っても眠らない夜も人生ね  
せせらぎと友の寢息の旅枕  
終焉のポーズ未だに描けない

急いでも進む世相に追いつかず

堺市 柿花 紀美女

慌ただし人間模様朝の駅

荒城の月を合唱老夫婦

雨の日は老いの遊びを考える

堺市 黒田 真砂

春のうつしヨッピングして気が晴れる

うつの日の化粧は冴えず肌の色

愛の重さ秤は心の中にある

愛手からこぼれて散ってシャボン玉

堺市 中野 樺子

紅梅うどん相性良くて梅一つ

今は昔 駅へ小走りだった脚

エンジンのかかりが遅い脳も齢

春がすみ今年しつかり見る桜

豊中市 江口 明光

人臭い話が好きで寄る鴉

タバコをうまそうに吸う浪人よ

賞罰を気にはしてない山桜

その裏は読まず珈琲甘く呑む

豊中市 井上 直次

陰ながら助けてくれたらしい友

賞味期限勿体ないと仕舞われる

ストレスにずばりお金が効くと言う

枕木に時速三〇〇支えられ

一筋のあかりに道を教ええられ

豊中市 松岡 久留美

花柄の小鉢に盛った母の味

妻徳ぶ手籠に活けた白椿

足音にはつと安堵の母の顔

箕面市 椎江 清芳

無職でも父まん中で胡坐かき

金溜るはずの手相の線が消え

奔放なベンが他人を傷つける

いい話単細胞はすぐに乗り

池田市 藤井 計光

神様の設計図から逃げられず

消費税すったもんだで波静か

稲妻はストロボライトのように刺す

午前様と知りつつ今日もあなた待つ

池田市 栗田 久子

伝説の木は中程にうろを抱く

歩の人生変わる時がやがて来る

うつむくが花弁反るカタクリの花

満開の花に嵐が熱い恋

吹田市 茂見 よ志子

梅も善し甘酒も善し大阪城

長じても子の面影は幼くて

若い木は願う型に納まらず

髪カット襟脚軽し春野行く

吹田市 古川 喜美子  
春が来てまた春がきて生きている

丸い背の母に似てきた誕生日  
相応のうす紅させばそれなりに  
殺されそうな時は大声出すつもり

高槻市 井上 照子

銀の匙 疑心暗鬼の胸晴れる  
立ち向う心必ず果す意気  
可憐だよサボテンの花針の騎士  
昇進の姪に男を垣間みる

高槻市 芦田 静江

赤レンガ裸婦像抱いて艶たもつ  
妖精の靴音らしいおぼろ月  
六月の花嫁になるキヤリアギャル  
蛙百態画いてカッパに笑われる

守口市 結城 君子

松露搔き かの日の砂丘遠い日よ  
蓬餅疎開の話にそれてゆく  
片栗の花が微笑み持つてくる  
枯れた鈴蘭に聞く住みごこち

寝屋川市 坂上 高栄

美辞麗句治ったはずの偏頭痛  
値上げだけ決まる改革年度明く  
七癖の一つを磨く玉の汗  
五分咲きの下で呼ばれてうろたえる

寝屋川市 平松 かすみ  
ご先祖の名前を持った杉の山  
暑さ寒さに露店屋さんをおもいやり  
裁ちばさみ持てば細胞若がり  
ポンコツを捨ててママチャリ買いました

寝屋川市 酒井 勇太郎

錦之介 桜吹雪と共に散り  
孫期待なのに二人はその気ない  
城壁を築いて孤高忍び寄る  
満ち足りていても小遣い拒まない

東大阪市 安永 暁子

ウラウラと桜に酔うて石山寺  
気の多い源氏の君の絵巻もの  
猫のこだわりで犬知らん顔する  
赤ちゃんの笑顔にわたし癒やされる

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

一瞬の火の匂いした恋消える  
夜に切るわたしのつめは犬の爪  
パスポート昨夜の恋と今日の恋  
誘われて燃える身体はのこつてる

羽曳野市 酒井 一壺

世間から変な夫婦と言われてる  
世間なみこれが案外むずかしい  
見栄っぱり大蔵省は火の車  
波の音あまり静かで不安です

笑い皺 苦勞話をあたためる

八尾市 大内朝子

梅雨晴れにカッと脳みそ干してやる  
ふらりと充電旅行してこよう

欲望の電車をおりてから素直

岸和田市 古野ひで

花冷えに衣重ねて病んでいる

或る日ふと亡夫の愛をかみしめる

言い残すことは日記にとどめおき

たまりかね爆発をする活火山

岸和田市 井齋一齋

結納は家紋に恥じぬ額にする

酒タバコ断って父さん瘦せてきた

巢立つ子の叩く肩幅もう大人

京言葉やんわり高い勤定書

貝塚市 池田寿美子

雨雨雨 花のいのちが惜しまれる

女でいたい みやこ忘れのむらさきに

五パーセントアップとにかく日々をつつがなく

天国へもう少し待つパスポート

河内長野市 植村喜代

さからわず波に乗り下りしています

七十は七十の足と足が言う

鷺に耳もかさずにいそいでる

お風呂出て裸と言えず電話口

言葉つむいで感動さす十七字

奈良市 天正千梢

信仰はアヘンなんだと語る人  
パリだけ行ってフランス語り出し

修羅の野をかけて来たのか光つてき

奈良市 米田恭昌

躍動感あふれる朝の駅が好き

好きな子にちよいといたずらした昔

お勝手は守りの堅い姑の城

まといつく貧乏神というストーカー

大和郡山市 坊農柳弘

紫陽花に心変りを見透かされ

昨日より百歩余分に万歩計

愛された分だけ愛で返したい

ジュンブライド拳式は札幌時計台

和歌山市 田中輝子

たたかいの火蓋をきった置き手紙

長い橋振り向くことの多くなり

一斉に鳥が飛び立つ一大事

お隣にきかせるように打つ鼓

和歌山市 細川稚代

涸れることあふれることのない清水

妬くほどの事かとダイヤ嵌めてみる

遅咲きの息子に拍手してやろう

快報へ桃も桜も赤飯も

和歌山市 玉置 当代

潮の香に誘われて干しわかめ買つ  
朝露を跳ねて山菜採り夢中

桃色に染まる桃山町抜ける  
花に雨 猫も退屈そんな顔

和歌山市 岩本 美智子

春風と歌おうドアを開けておく  
薄衣をまとい桜の精の舞い

淡桃色の雲海に乗る水上バス  
撒かれた貝 砂漠のひとが掘っている

町田市 竹内 紫 鏑

携帯電話中毒が来た外来に  
新しい入れ歯でさらうドイツ曲

耐えがたきを耐えと唱えて会社員  
受験苦の兄を超えてた右の脳

静岡市 藪田 獬 杏

飽食の裏で心が痩せ細る  
清き水彩づく山から流れ来る

出勤に隣の犬が尻尾振る  
桜見て来た温泉は雪の宿

富山市 舟渡 杏花

日暮れ坂 冬の仏と立つ枯野  
介錯はわたしがします 深情け

暁を告げてめんどり舞い上がる  
それみたことか 茄子やかぼちゃに笑われて

弘前市 一戸 ツネ

無為無策春を忘れた老い河童  
輸入リング林檎の花をおびやかす

荒波を越えてきました羅漢さま  
懺悔した過去をしゃべるかデスマスク

弘前市 今 生恵子

桂浜ダンディ竜馬と対面す  
栗林でひと足ごとの景色追ひ

貧しい心豊かに変える花を植え  
芸の虫春子 女の一生終え

十和田市 阿部 進

無理させて無理をするなという上司  
裏の裏読んだ一手が裏かかれ

残業の疲れをいやす屋台酒  
あれこれともめにもめたが元の鞘

(前月分) 大阪市 故大 野 武 太

深呼吸生きる生命の深呼吸  
貴婦人のよう錦鯉池に舞う

老妻とホタルとび交うバスにのる  
銀行の危い話きく世相

産声に生命があかく炎えている

川柳塔唐津支部及び麻生アート(生駒市)、結城  
明玄(東京都)両氏から、追悼川柳大会に金一封  
を拝受いたしました。厚くお礼申し上げます。

# 自選集

西田柳宏子

仲の良さ寝言で掛合い言うてはる  
低金利 騒ぐことなし預金零  
通り抜け短冊見付け悦に入り  
足りぬことあつても余ることはない  
価値観の違い余ったもので揉め

波多野五楽庵

臆病な影で冷や汗ばかりかく  
夜桜の渦にもまれる病み上がり  
俺よりも先に逝くなど念を押し  
しがらみの先を千切った糸切り歯  
一冊のカルテになつた負けいくさ

金井文秋

取り崩す預金百まであるやろか  
杖要らぬ足が理想の万歩計  
体調のよい日わるい日余命表  
よく動いてはる長生きを出来まっせ  
流通革命の中で消え行く小商売

野田素身郎

時の記念日 時計の電池代えておく  
子を叱る娘かつての妻にそっくりだ  
年金据え置き寝るよりほかに策はない  
主婦失格また包丁で指を切り  
日向ぼっこ孫は寝ている乳母車

野村太茂津

耳障り税が零れる音だろう  
青葉若葉に包まれ絵筆動かない  
忍び歩きだ茂みの中だ見逃そう  
忍び逢うシーン楽しい回顧趣味  
余生尚希望の一つ捨てられぬ

小西雄々

負の思考すてずオアシスまで行けぬ  
無気力な私こまらすレクイエム  
幸せを続ける落し蓋磨く  
姑よりやさしい声でベツト呼ぶ  
時々怒る父権へ肩の凝り

黒川紫香

エビとカニ嫌いですがと山陰で  
ノンストップバスお喋りな女横に居る  
花街をのんびり抜けた焼き芋屋  
お元氣ですなと卒寿祝われる  
亡妻よご免この世にまだ未練(妻の五十回忌に)

月原宵明

笑わない約束で子の夢を聞く  
サムライと言われ人生ひとりぼち  
もう泣かぬ女となって色褪せる  
白旗を畳んで露地に住みなれる  
ネクタイと別れてからの世が丸い

正本水客

馬鹿になることを覚えて桜散る  
真っ先に手を上げたのは私です  
月明り寝顔を美しいと思う  
軽い咳存在感を主張する  
しみじみと雨の音聞く気にもなり

遠山可住

娘も大人雛はどうでもいいみたい  
ポトリッと落ちて椿にある噂  
だんだんと病気のはなし年が寄り  
余生とやゆっくり魚の骨をとり  
おふくろという名で少し距離が出来

藤村 女

匿名のまままで続いて来た善意  
喝采のない善人のちびた靴  
灰ポトリ人指し指の物思い  
さしかけた人が濡れてる俄か雨  
別れての傘のしずくが重たすぎ

奥谷弘朗

万病に効くのはあてになりません  
今日は寝ろぐらいで休ます父の愛  
どくだみが医者より効くと父頑固  
無欠席その情熱を買ってやり  
尻軽なところみんなに親しまれ

高杉鬼遊

桜桃忌老いにかかわりなく雨が  
行き倒れ携帯電話鳴りつづけ  
消費税どこのどなたのふところに  
不機嫌はわたしではない風のいろ  
本人が留守だと奥で言っている

藤井明朗

計画財政でわが家も消費税  
貧乏閑なしが卒寿までつづく春  
広い城址に怨念が秘めてある  
僕の足跡やっとう写真集が出来  
親しみの顔感激に会う桜

辻 白 溪 子

お隣の主人に触れた愚痴を聞く  
彫刻の手へ喋らせるマイク向け  
カラオケに凝って胸透くドレス着る  
ほめ過ぎのお世辞にあった下心  
病弱で注射の針を怖れない

小 林 由 多 香

心配をさせない嘘も底をつく  
菓子箱の賞味期限を追って食べ  
存在を示す小さなホラも吹く  
悪いくせばかり出て来た負け戦  
恋芽吹くやさしい風に誘われて

松 川 杜 的

老眼鏡見付からぬまま日が暮れる  
ポストへも無沙汰只今病んでます  
N T T 病気の方で世話になり  
医者よりも私の体知ってます  
掌を合わす曼荼羅図絵は春の色

恒 松 町 紅

下駄箱も驚いている子の躰  
突然に手ぶらを詫びて来る友情  
エスカレーター年のひらきを見せつける  
まだこんな力があつたのだ仏  
男手が足らぬ広さをあきらめる

河 内 天 笑

まさかまさかかよわい妻に養われ  
楽をして儲かる面白いはなし  
ピカピカと顔磨いてる妻が好き  
友達のぎっくり腰に学ぶこと  
太股にぼてんと落とす冷や奴

八月母の十七回忌

橘 高 薫 風

眼を閉じて見え眼を開けて見えぬ母  
白鳥と見えたは湖に映る雲  
考える人なかなかの痩せ我慢  
なんとなく河馬の母子もこどもの日  
阿か呷か混濁の世に処する身は

この一句

天と地のはざまにふわり生かされて 緑之助

人生の愛欲も憎悪も越えた達観の境地。「ふわり生かされる」。飄々とした諦観にも似た師の一面を窺い知ることが出来る一句である。私の座右の句として、挫折の刻、師の句に温顔を重ね叱咤に励まされ、遅々とした歩みを積み重ねて来られたこと、感謝の念に堪えない。尊敬する尼師の心に少しでも添いたいと憶うことしきりである。(園山多賀子)

## 品川陣居

東野大八

「東京で一番古い川柳家といえ、島田天涯子である。窪田而笑子が出した『川柳とへなぶり』が出たのが明治39年11月ごろで、こへこの人の名が出ている。その同じ欄に、『人形町の三太郎』で出ているのが川上三太郎先生であった。二十代の紅顔の若者の頃である。

天涯子さんは、若い頃から本郷下の白山花街で芸妓屋を営んでいた。この天涯子先生にうまく言って川柳まつりを催したことがあった。集まるもの三太郎・周魚・雀郎・文象に宮尾しげをもやってきた。この白山花街は、樋口一葉の『にこりえ』の舞台ともなった私娼窟が発展したもので、中学生のぼく(陣居)が初めて川柳に頭をつっこんだのはこのときのことである」(『川柳雑誌』昭30年刊)

本名・中野竹雄だが、東京品川に生れ住んでいたので柳名品川陣居、名は「じんきょ」と読む、別号糸井武雄・竹魚亭主人。明治28年5月30日生れ。

「旧制の中学を出て、さるところの大学にも籍をおいたが、文学道楽で行ったり行かなかったりで、いろんな文学本を読み漁った」と筆者に語ったことがある。東洋新報記者の肩書で北京へ渡り、その特派員でいるとき華北交通参与でいた石原青竜刀とカンタン相照らす仲になり、北京川柳会の和田黙然人や間組北京支店長で着任したばかりの古川柳研究家の森東魚等を語らい、なんと北京の盛り場王府井で中国初の『国際川柳展』を開いたのは、古い川柳人仲間も知るところだ。

「何さま、天下の文豪魯迅の実弟で、華北

文化界の大御所周作人先生まで招いてやったのだから、わが川柳生涯における一大壮挙だった」とは、青竜刀大人の在華中における『一大壮挙』だったわけ。折悪しくこの開催の昭和19年冬には、筆者は赤紙召集で中支で兵衣にテッポ姿の最中だった。

陣居といえ、故山川花窓坊、親友の満鉄社員高須啞三味と『関東川柳三人男』と称し、昭和初年には、江戸から上方へ、つまり東京から大阪の地へデモったというのが川柳界の一つ話になっていたものだ。

社と家の唯一本の道がある 陣居と一句ものした実直一途の勤め人で、趣味は文学一筋、川柳は道楽と自称していた。

「啞三味といえ、少壮三十歳初めの頃は、いっぱいの小説作家を志し、エライ勢いで傍へも寄れなんだ」とは青竜刀のむかし談義だが、その頃の話によると、啞三味は陣居と図り、菊池寛の『文芸春秋』や、中村武羅夫の『不同調』に対抗するつもりで『並行文壇』を創刊した。北林透馬・今東光・山口青柳・福富青児という後に知られた文人が参加していたものの結局、生気潑刺たるこの若手文学誌も売れ行き不振で三号雑誌に終わった。

戦後、帰国した陣居は、東洋経済新報出版局室のヒラのままで停年を迎えた。そのあと

は、さかんに各柳誌へ柳文を書いてしたが、その筆頭は麻生路郎主宰の『川柳雑誌』の常連だったことだ。今は『川柳塔』と改題した本誌も、元を正せば川雑の流れをくむ柳誌でその川雑のバックナンバーを繰ると随所に陣居の柳論や随想にお目にかかれる。

その中で最も筆者の印象に残るのは「風刺」への反論だ。川柳における「風刺」といえば、かつて大陸での同志的親友であった石原竜刀がおハコの「川柳諷刺論」への反論になる。試みにその陣居が最晩年の一文たる川雑三五八号の「川柳誌は人間の総合誌だ」という大扱い二頁の要点を掲げておこう。

「われわれが作句する場合、在来は人情風俗というような『真綿』だけを読んで、その真綿の中に含んでいる『針』を毛嫌いした」というと冗談じゃあない、川柳の諷刺性というものは川柳の骨格で、古川柳のすぐれているのもそのためかゆえといわれているが、まあ、待つて頂きたい。

『諷刺』とは……を広辞苑には「①遠まわしに社会・人物の欠陥・罪悪などをいうこと②それとなくそのこと。あてこすり」とあるが、ぼくは川柳の本質に諷刺性を持つということにギモンを持つものだ。このことはヤカましいギロンになりそうだが、だいたい人間

が人間をそしり、あてこするということが文学性があるかーとぼくはいいたいのだ。

文学とは、そういうザラザラした肌ざわりのものではないはずだ。よしや、そういう面を材料として文学しても、そのウラに温かさゆるすもの、ゆるすというより信じるものがあるはずだ。

川柳に諷刺はつきものだーと定義されてきたのを安直に呑み込んでしまうのは危険だし、イヤだというのだ。これは単にぼくだけの好悪ではない。なぜ諷刺がイヤかという知恵がほしいのだ。

われわれは上っ面な諷刺性なんか無視していけばよいのだ。

とにかく流れきたり、流れ去るコミュニケーションをフルイにかけて、じしんの知恵の畑を肥やしていけばいいのだ。川柳誌は、人間の総合誌だ。あふれるような、いっぱい、にんげんの芽「が」つまっている」

これを目にした筆者は、竜刀の諷刺論と一度対決してほしいものだと思望していたが、結局、文学者側のいう『諷刺第二芸術論』に陥り、これの主唱者岸田国士センセイにでも立会ってもらいたいーというところへ落ち着いた。ともあれ、この竜刀対陣居の諷刺論者が協力して、北京の盛り場で『国際川柳展』

を開催したことに今もって無限の皮肉を覚えている筆者である。

昭和34年3月7日、肺ガンのため死去した。享年64、秀岳院陣居法句居士。

陣居は川柳作家というより『評論家であった』と交友深い麻生路郎は、写真入りでその死を悼んでいる。

その川雑古本の中で、彼の『古川柳の現実への触れ方』の興味深い一文があるので、前述の諷刺への見解の参考までに抄録しておく。

「ぼくはかねてから柳樽以下の古川柳作者の多くが『不知読人』であったこと―それが編集者の独断で、また商業主義の便宜からきたものであったろうが、それらが期せずしてそれが川柳というものの本質にも当てはまっていたような気がして興味深いものを覚えるのだが、それは当節の『落首ばやり』に乗って一般のマスコミが、一流紙もふくめて、いろいろととりあげているのが品性をますます落とすところとなったと考えている」

灯のギンザ空洞となりぼろろごめく 陣居  
ほととぎす東京の空でもう啼かず 〃

▼次号は「大熊 吉三」

## 『富士詣』

清 博 美

山があると、人々はその山に宗教的な意味を与えて尊崇し、やがて独特な宗教形態を持つ山岳信仰に発展させていく。富士山もまた、その例外ではなかった。

室町時代、長谷川角行なるものが、富士講の基を築いたが、その後江戸時代に入って、富士山を崇拜する庶民が、盛んにこの富士講の組織をつくって活動をはじめ、その講の数もおびただしいものにふくれあがり、俗に江戸八百八講とまで言われるに及んだ。

「近年江戸御城下及び近在諸国にて一類の党徒あり、是を富士講と云ふ。其始めを尋るに、書行（角行）藤仏と云者より生まれり。……始めは奥州某山に入て修業し、夢想の靈告を得て、初て富士の人穴に入て苦行すること日あり、三十七日の断食して穴中に四方の

杭を樹、其上に立ち、角杖をつきて二十一日の間立行を為す。時に仙元菩薩の告ありて、富士講の一派を開く。其教は仏道に似て仏道に非ず、神道に似て神道に非ず、富士峰を巡礼し、哥を唱へて懺礼するのみ」（『甲子夜話』）とあるのは、その辺の事情を書いたものである。「其教は仏道に似て仏道に非ず、神道に似て神道に非ず」とあるように、その信仰形態も一種独特なものであったことが知られる。

ところで、江戸時代の富士山は、女人禁制の霊場であり、また修行者にとつての道場でもあったから、いかに信仰のためとはいえ、一般の人達が簡単に登れるわけのものではなかった。仮に、登ろうとする意欲があつても、江戸から富士まではかなりの道程であ

る。老人や女性には先ず体力的に無理であり、富士講の講員となつても、経済的な負担は馬鹿にならない。というわけで、当時の人々にとつては、やはり富士山は相変わらず遠い存在だったのである。

しかし、富士山を信仰する気持ちに変わりがないとするならば、何かその代用品が必要である。そこで考え出されたのが模造富士の築立であつた。これならば、江戸に居てもたやすく富士に登ることが出来る。登ることによつて罪障の消滅を祈ることが出来るなら、こんなに結構なことはない。需要は供給を呼んで江戸の町のみならず、全国的な規模で模造富士が続々と築かれることになつた。

『江年表』をめぐつて見ると、

慶長年間記事 本郷の富士、其頃小塚の上に祠一つあり。駒込へうつして莊嚴をなし、六月一日大市立て、繁昌するよしいへり。以上慶長見聞集に所載、

安永九年、五月高田宝泉寺に、石を積て富士山を築、成就す。

文化年間記事 目黒村に富士山を築く。

文政年間記事 深川永代寺、鉄砲洲稲荷内、茅場町薬師境内等に、石を積みて富士山を造る。○神田明神社地に富士浅間社を勧請し、六月朔日参詣始る。

文政十一年 下谷小野照崎の社地へ、石を疊て富士山を築く。

六月朔日、富士参り、晦日より参詣群集す。駒込、浅草砂利場、高田馬場近所

などなどと記載されているが、これですべてを網羅しているわけではない。この模造富士は全国的な規模で築立され、江戸時代のみならず、明治・大正・昭和初期に至るまで築き続けられたのである。

井原西鶴は、貞享元年（一六八四）に『諸艶大鑑』（好色二代男）を著わしたが、その巻之四に、「水無月の夜を籠めて、江戸の新富士に参詣する事あり、人皆白衣の袖を連ね、水道の流れに身を清め、松明立連れて煙は空に……」と、既に富士詣のことを記している。

また、『守貞漫稿』には、『五月晦日六月初日の兩日、江戸浅草、駒込、高田、深川、目黒、四つ谷、茅場町、下野、小野照（以上八所ともに江戸の地名也、並に富士山を模造して、浅間の神を祭れり、平日は此に模山に登ることを聴かず、此の兩日のみ詣人を登す、蓋し駒込を江戸の本所とす、）等の富士詣でと号て群参す。各所必ず麦蘖製の蛇形を生杉枝に纏ひたるを、売るに大小あれども皆同制也。富士詣人の方物とす。或書曰、宝永

中疫病行れ諸人患之、干時駒込農夫喜八なる者、麦わら製の蛇を富士辺の市に売る。買之者皆必らず疫病の患を除く、依之て以後毎年今日専ら売之、又曰、当時は遠近より富士詣の童子専ら披髮にて行く云々、又曰、享保二年始て鉄砲洲の船松町より花万度を毎年今日駒込富士権現に献す」とあるように、この富士祭の名物が麦蘖製の蛇であった。

「駒込富士権現祭礼 六月朔日、麦蘖にて蛇を作りてあきなふ事、宝永の頃、百姓喜八といふ者、風と案じ付て、是をつくりて、祭礼の日市に売るに、珍敷細工なりとて諸人求之、其年の秋、江戸中、疫病時花事家々なり、其時、此のふじの蛇を持たる家には、一軒も疫病のうれひなし、是より、富士祭りの麦わら蛇はやりて、今当所の名産となれり」とは、『江戸塵拾』の記述。この麦わらの蛇は、現在でも富士祭の当日に売られている。江戸時代に売られていた蛇は、六尺余（一八〇センチ）もあったが、今ではすっかり小型になって二〇センチほどになってしまい、その数もめっきり少なくなりました。そしてまた、この麦わらの蛇の売られている由来を知っている人達も皆無に近くなっています。

ほふろくをなげて見たいと不二詣  
— 所謂土器投げ。 四八二〇

不二詣一トむれ雪の白ゆかた 五六一八

— 白衣の装束と富士の雪の縁語仕立て。 五七三二

不二まふで六郷目から横へきれ 五七三二

— これは浅草の富士。途中から遊里吉原へ 五七三二

それてしまふ。 五七三二

夕立を上からのぞく不二参り 九一八

— こちらは本物の富士に登つて。 九一八

富士参りかひく敷くもたすき掛 一〇五四二

畑から駒込へ来て竜になり 宝八八

— 畑の麦が蛇になる。本句では竜と表現。 宝九八

駒込の蛇は直をまけて追つて来る 宝九八

— 直は値段の値。 宝九八

一年に一度蛇の出る賑やかさ 三四九

麦わらが化けて蛇となる暑い事 四六二三

蛇をさげてお七が墓所聞きあるき 一六六七

蛇をかつきながらお七の墓を見る 明七満二

— 右二句、駒込の富士と吉祥寺は間近、この吉祥寺に八百屋お七の墓があるとされ 明七満二

た。 明七満二

吉原の道を蛇の知るあつ事 四一三三

にぎやかさ供部屋に蛇が五六匹 傍一四一

— 浅草の富士と吉原は近く、富士詣のついでに吉原へ繰りこむ。供部屋は、妓楼に 傍一四一

設けられた供の者が待つ部屋。 傍一四一

# 秀句鑑賞

同人吟 安 藤 寿美子

—5月号から

手斧目を残して柱ゆるがない

林 荒 介

「川柳で何やら」私にとってこれは大きな課題です。二十年余川柳と平行して勉強していた俳句を止めました。いつかの本社句会で申し上げたことですが、重ねて申しますと、俳句と川柳は同じ五七五を中心軸とした同心円であつて俳句は季語を半径とし、川柳は人生全般を半径とした無限大の円であると思ひます。俳句はそのボーダーラインを固守してはみ出るものを嫌います。同心円ですから川柳は俳句の分野をも含んでいます。どこへ立ち入ろうと自由なのです。でもそれ故に自分の足場が頼りなく、これでいいのかどうかかわりません。でも自分の中に解決のつかない課題を抱えているのは、しんどいけれど、生きる証となつてくれます。他人様の句を上手

琵琶湖畔の彦根城にも手斧目を残した城門があります。じつと見ていると一つ一つの手斧目が何かを語っているような気がします。職人わざとでもいうのでしょうか。美しい手斧のあとを見せている匠の誇りが、太柱をゆるぎないものにして居ます。ハイテク時代の建築材料を尻目にこうした柱は、いつまでも残るのではないのでしょうか。

佗び寂びが解らぬままに齢をと

麻 生 アート

だなあと思つて真似してみても、結局自分の句ではありません。みじめな失敗に終わります。川柳は生涯をかけての勉強だと思つて、じっくりやっていきたいと思つこの頃です。五月号から頂いた句を好きなように読ませて頂きました。どうか失礼の段はお許し下さい。

茶人や俳人の有り難がる言葉ですが、一体どれほどの人が解っているのでしょうか。田辺聖子さんは姥シリーズの歌子サンに、

こもり歌とか、かぞえ歌とか、母の乳の匂いや土の香りを思い出させる歌ではないでしょうか。そうしたやさしい歌は大切に又次の代へ歌いついでいきたいと思ひます。

百歳に驚くなかれまだいのち

土 橋 螢

わびさびといわれてもカピの親類ぐらゐの気がすると言わせておられます。まあ歌子サンは嫁さん達に対抗してかなりテンションを上げてはりますから、そう言つたと思ひます。広辞苑によると、蕉風俳諧の根本理念で閑寂味の洗練されて純芸術化されたもの、とあり

ます。解らんほうがまともやのんと違います。確かな価値観をもって老境をむかえられれば、それこそ人生の達人と申せましよう。くす玉を割る人汗を知らぬ人

公共の建物が出来上がりにいいよ落成式、工事の指揮監督にあつた人のまだ上にいた人が薬玉の紐を引つ張ります。鉄材や生コンを運んで汗を流した人々はハレの日は又次の現場で働いていることでしょう。テーパーカッターに十人近い人を並べてテーパーをスタスタに切っているのはマンガチックですね。くす玉を割つた人は事故の際の対処や報告をしつかりやる覚悟をしておいて頂きたいものです。

辻 川 慶 子

母からの習うた歌の皆やさし

堀 江 光 子

きんさんぎんさんにたくさんの出演料が入るでしょうが、どうして居られますかと聞いたら「老後の為に貯金しています」と答えられたとか、ジョークにしても出来過ぎですね。

今日もまたあつという間の一日で

山口 美穂

何でもない句のようですが、全力疾走した後の清々しい汗を思わせます。お家のこと、お仕事のこと、お母さまのこと、愛犬のこと、そしてあの震災の深いかなしみ、すべてをひとりの肩に背負って三面六臂の働きをされる毎日です。どうか充分ご自愛下さいませ。世の中には、なかなか日が暮れなくて次第にボケてくる人もありまして困るんですが、古希を過ぎたら、「老骨に鞭打つな」をモットーにのらくらしている私なのです。

インターネット人ばらばらにしてつなぐ

岡井 やすお

めいめいのパソコンに向かって一人なにやらやっている。ディスプレイには遠くの人、海の向こうの人々のメッセージが現れてくるかもしれないが、暗いなあと思うのは私ら年寄りだけでしょうか。小学生が集まっても、二人ぐらいでワイワイとファミコンをやっても、二人は寝そべってマンガを読みながら、ファミコンの順番を待っています。鬼ごっこや三角ベースでゆで蛸みたいになったことも達はどこへ行ったのでしょうか。つながついているといつても、一人一人ばらばらでキーを叩くだけでは、顔もしらず手のぬくもりも伝わり

ません。この先どうなるだろうと言う漠然とした不安をうまく表現して下さいました。

花束を持つ青年の悪びれず

奥田 みつ子

明るくほほえましい風景です。ずいぶん昔「男が花束持って歩くわけにいかんから」とお見舞いの花をこつこつ買った事があります。あほらしいですねえ。しようもない事に肩肘はらず、素直に行動している現代の好青年はプロポーズに行くのでしょうか。「お嬢さん私にお父さんを下さい」とテーブルの角へ頭をぶつけている光景が浮かんできます。

投票所へ行くむなしさはどう程度

高田 美代子

たいていの人が同感ではないでしょうか。でも投票しなければもつと空しくなりそうです。この先どんな世の中になることやら、私ら年寄りは「あんまりけつたいなもん見んうちに早く死の死の」と言いながら、せつせと消化薬やビタミン剤を飲んで居ります。

花よ蝶よと育ててもよその嫁

榎原 慧心

それを悟られたのは大そうご立派です。さりとて子離れして、一步はなれて娘を見守って居りましょう。息子又しかり、長男の結婚式のとき、サイン帖が回って来たので、私は

「もつこれであのぐつたら息子の面倒を見なくていいのだバンザイバンザイ」と書いてまわりからバカにされてしまいました。

蹟いた石をたびたび振りかえる

小池 しげお

たびたび振りかえる、というのは石そのものでなく、何かの隠喩かと思われます。齟齬をきたした事がらを何度も思い起こして軌道修正されたのでしょうか。つまりと云えば、平坦な舗装道路で蹟くのです。それは老化ですと云って貰わんでも解つてます。ハイ。

誰の葬儀かみんな陽気に酒を飲み

新家 完司

いいですねえ。きつとご高齢でまさに天寿を全うされたのでしょうか。私の死んだときにも皆で賑やかにお酒を飲んでくれ、そして私にも一杯供えるのを忘れるな、と言ってあります。死なれても誰も困らないようになってからでない、死んではなりません。それまではどんな事があつても死んではなりません。

節税の企みもなく焼く

仁部 四郎

これも爽やかな生き方をしていらっしやいます。福岡の天神で女将の自慢の鰯を頂いたことがありますが、玄海灘の鰯はとて大きくて美味しかったのを思い出します。

# 水煙抄

## 高杉鬼遊選

綾部市 藤田芳郎

風に飄飄華はノーともイエスとも  
諸事繁多頼まれもせぬことばかり  
がむしゃらに走って神とすれ違う  
目が入りだるまは耳が遠くなる  
妻が哭く子が泣く週刊誌が売れる

横浜市 川島良子

万が一の一になる事だつてあり  
子育てが終われば待っている介護  
ベアルック若くないから迷います  
スイッチポン ポン ポンで日が暮れる  
調子よい返事△つけておく

八王子市 井上京一郎

箴言を拾い集めてきた祝辞  
ふいと去る猫にもあった自尊心  
謝って済むことかとは金のこと  
書を捨てて出ればパチンコだけの町  
戦争を生きた世代が消えてゆく

吹田市 石原靖巳

川柳でしゃれた辞世を残したい  
熱燗を冷えたビールに替えて初夏  
夜目遠目ライトアップに甦る  
少子化のつけ恐ろしい新世紀  
一罰百戒 猫が大きな欠伸する

八尾市 與田明

一滴の水にもかかる消費税  
負け相撲土俵の土をなぐりつけ  
自転車のパンク我が身に似ているな  
葬儀屋の美学水車回り出す  
呆け防止ときどき妻の檄がとぶ

尼崎市 田辺鹿太

じいちゃんのパフォーマンスを唾えない  
カプセルの色で生命の灯を点す  
深酒は止しなと孫が意見する  
六月の花嫁となる雨おんな  
金脈も人脈もない日向ぼこ

東大阪市 谷口 義

八尾市 村上 剛治

打つ手は打った桜でも見に行こう

おだやかな波も安心できません

一波乱あつてようやく喪主決まる

タクシーは一つ手前の辻で下り

即断即決今日のお昼はBランチ

八尾市 神原 まさと

散髪をして流感よさようなら

天守閣 金の鯨見に登る

初孫が来てから顔に張りが出る

玄関のちっちゃい靴に励まされ

貸金庫中味だんだん痩せて来る

高知県 百田 幸

春風に花芽がやつと気を許す

人質へシブリアーニのたこが出来

帰宅まで悪い想像ばかりする

そうだった忘れていたと聞き上手

連れ添うて長い短い五十年

兵庫県 安達 厚

芋植えを手伝う孫が邪魔になり

欲張った分だけ揺れがひどくなる

だあれもが幸せそうな花の下

家混んで周囲の景色に幕が降り

すそ分けのそのすそ分けとくぎ煮くる

子育ての妙薬になる褒め言葉

お金さえあればとくに役に立ち

置薬忘れたころに役に立ち

さわやかな匂いが会釈して通る

満開の花へ無情の雨が降り

八尾市 村上 ミツ子

消費税ズキンズキンと応えてる

母の気ままをきいてやれないもどかしさ

大部屋の見舞いへ花は分け合うて

喉のあたりで迷子になっている記憶

かたいこと言うなと夫うまく逃げ

豊中市 石川 勝

嘘つきにカメラ向けると逃げてゆく

句読点忘れてひどい疑いを

溺れたとだれも思わぬ金魚の死

雨になりほっと息つく予報官

むつかしい一日も暮れタバコの輪

米子市 林 風子

病む人の居て庭草の猛威かな

君の山をたどる君へのレクイエム

断崖の巣で鷺の子は風を識る

絶壁の松一枝まで命なり

空海へ漕ぎ行け君の白い舟

和歌山市 木村親路

養殖魚海の広さをまだ知らぬ

泣き上戸幹事よほっておきなはれ

横町のバラ一輪が話好き

先祖から母ちゃん強い家系です

シャッターを笑うまで待つ七五三

八尾市 平川幸枝

こちよい話で耳が恥ずかしい

茶をすすり葬儀の話など夫と

大切なことを素通りして困る

すれ違う犬と比べる犬を連れ

相槌がほしい独りの花見かな

和歌山市 松本良

養生訓守っていても風邪を引き

頼れない子らへせつせと句の味

眠られてしんどい荷物行楽日

携帯電話持てば持ったで離されず

嫁の来ぬ淋しさが乗るトラクター

横浜市 後藤早智

仕事ない朝はドラマを見てしまふ

四面楚歌あなたの恩は忘れない

肩の荷を一つ下ろせた子の縁談

子育てもそっちのけですたまごっち

義理チョコへ夫律気に応えてる

大阪市 一本勇太

わが道をゆく酒だから人も来る

すぐ鎧着たがる心持て余し

繕いの歴史と人の貧しさと

詫びてすむことではないが一夜漬け

保護色をうっかり見せた足の裏

和歌山市 森口美羽

一日が無事に終わった日を祈る

淋しさを両手で抱いてくれる人

生きているうちに一花咲かせたい

一期一会確かに愛は動いている

鮮やかに仕切って文句言わせない

八尾市 鷺見章

カレンダーいらぬ世界で病んでいる

ラベンダー香るナースの部屋静か

仇討ちをするよりハビリ専念す

政治とは無縁に病んで三ヶ月

病みなれてふるさとの山窓に追う

沖繩県 杉谷一栄

寝返りが出来た喜び骨粗鬆症

腰痛の痛みうすらぎウソのよう

痛い顔すれば周りを暗くする

蒔いた種自分を責めることばかり

有難う大空仰ぎ叫びたい

犬山市 早川盛夫

冗談にしては急所を衝いている  
自慢するものがないから黙ってる  
美声でもないのにマイク放さない  
騙される金もないから気が楽だ  
友来たり酒はけちらぬことにする

富田林市 中井アキ

たたかれた肩から熱を帯びてくる  
気にかかる薔薇はゆるゆる横を向く  
冗談の通じぬ方とじゃんけんほん  
宿題は遊びに飽いてからでよい  
明日こそ言わねばならぬ有り難う

吹田市 西岡豊

巢立ちした子の目覚ましが鳴っている  
今が花今が華だと言い聞かす  
べちゃべちゃとはしゃぐ女に歳がない  
コーヒーで口説かれて揺れている  
霧囲気で感づいている花の芯

堺市 井崎ミサ子

あかなあ すぐに負けん気出す青さ  
笑っても笑っても来ぬ福の神  
大声で笑ったあとに拭く涙  
せかせかとハトも歩いてゆくホーム  
あらまあ次の言葉が出て来ない

大阪市 尾崎黄紅

竹光の折れを接着剤で付け  
いい歳が恋をしましたくないしょ  
趣味だけに逢える女であつてよし  
再会は蛇に蛙というわたし

兵庫県 北川とみ子

言いふらす風にも千の耳を持つ  
定年の日から歩幅がちがいかけ  
過疎の灯を消すのはおいしい母の里  
大空に亡母と重なる流れ雲

尼崎市 軸丸勝巳

魁夷展 葉は天に伸び池に伸び  
朝昼晩 実感のくる消費税  
国会証言 二人羽織のもどかしさ  
寝不足に程よい午後の環状線

和歌山県 中村君枝

消し忘れ焚き忘れあり老いの道  
税アツ前にかわれた洗濯機  
わけぎぬた私の好きな春の味  
約束はまだ果たせない桜の季

鳥取市 岸本宏章

子離れが予定どおりに行く不安  
満月にこころの裏を見抜かれる  
ひとりでは何にもできぬ妻の留守  
浅い瀬でおぼれたことは内緒です

和歌山市 楠見章子

210円と言われ6円引つ込める

おっちゃんもミニクワツサン買つ列に

辞書をひくBGMにあかさたな

満期くる貯金とにらめっこが続く

今治市 渡邊伊津志

誰からも愛されてない恐ろしさ

貝は過去振り返りつつ砂を吐く

テトラポット波とおしゃべりして孤独

海の春嘘を信じてしまえそう

鳥取市 岸本孝子

ひとり居て家がこんなに広いとは

ときどきは消されぬように顔を出す

子作りが親の都合に合わされる

生まれるも死ぬもひとりと言ふ

海南市 谷口義男

欲の皮だけが突つ張る世紀末

借りるだけ借りて野となれ山となれ

正直を取り柄で生きて来た頑固

シルバーの世界にもまだある派閥

愛媛県 黒田茂代

傘パツと開いて気持ち切り替える

乗り替えた方のレールが性に合い

やはり齢 今日ハードル高過ぎる

握手よりおじぎが似合う花小紋

香川県 神保坊太郎

九十の坂で足腰ためされる

余白にはお国の余り者と書き

代議士も学者乞食も出ぬ家系

禍をみんな背負つた流し雛

倉吉市 山中康子

はんなりと座る牡丹がかぐわしい

愉快だがホップステップむずかしい

湯けむりに女の肌が競いあい

欠点を容赦もせずに子にゆずる

三重県 佐々木森哉

さくら闇男を騙す赤い唇

モーニングコーヒー雀の会話爽やかに

春なればときめく恋をした胸

嘘軽く舌で転がすモカ二杯

鳥取県 近藤春恵

泣いた過去忘れ優しゆう姑を見る

あの坂を越えると母の風に逢う

虫食いの野菜安心して食べる

裏門をくぐつたことを子は知らぬ

横浜市 菊地政勝

異動先一挙一動見つめられ

窓際でいつも足し算考える

途中下車してみたくなる花曇り

ブリクラを妻がしたいと真面目顔

広島市 流 奈美子

華やかに咲いてはかない花の精  
臆病になつたと思ふ尾氈骨  
菜種梅雨自問のときが多くなる  
故郷の風に五感が弾み出す

北九州市 岡田 幸生

越して来て九州弁に囲まれる  
少し欠けた夫婦茶碗がお気に入り  
ウォーキング パン屋の前の甘い朝  
止り木の妖しい花が気にかかる

西宮市 古谷 ひろ子

輪の中の花の女でまだひとり  
姑を通さず運び揉めている  
卒業式 茶髪いちばん泣いている  
昨日今日そしてあしたがきてほしい

河内長野市 大西 文次

悲運だと諦めている砂時計  
再会へどうにもならぬ顔の皺  
米作の農家が食べる朝のパン  
誕生日老妻は段々小さくなる

大阪狭山市 伊藤 尚子

定年の波打際に来てしまい  
復興の風見鶏から鳩が飛ぶ  
がんばって酔生夢死で終りそう  
辻褃の合わぬ話で揉めている

札幌市 三浦 強一

健啖の箸がうれしい鍋奉行  
廃校に又三郎の風が吹く  
春の杖尺取虫の歩の確か  
居酒屋を指す磁石なら持っている

鳥取県 権代 康女

母の忌はれんげの花が咲きほこり  
雨の音聞いてとび出すジャンプ傘  
気が晴れるならばなんなり聞いてやる  
無記名と言えばすなおに書いてあり

堺市 上野 楽生

肺機能試されている北新地  
人材派遣たつぷり仕事させられる  
介護保険期待を抱いて待っている  
パソコンで花占いをする深夜

伊丹市 樫谷 郁子

売る建てる一人で担ぐ荷が重い  
春愁に亡夫の形見のペンを執る  
写経して春のいちにち傾きぬ  
春うらら着ぶくれの身は世を拗ねる

鳥取市 富山 雄幸

親の脛噛る子どもの歯が脆い  
緋牡丹へ苦節に耐えた礼肥し  
オカリナを吹くから鬼も目を醒ます  
熱気球俺の余生と似て悔し

倉吉市 大下智子

必要とされて愉快になるわたし

ゆずるものないけどほしいものはある

食べたいなおいしいケーキ子にゆずる

たんぽぽが咲いて愉快的な風が吹く

大阪府 奥野義夫

子の宝 夜の金魚まだ生きる

嫁が点け姑消して春おぼろ

ジョークだと気がついたとき発車ベル

子離れがうまく行き過ぎ子は疎遠

静岡市 増田扶美

心機一転ポツと灯が見えました

後ろ髪引かれる思い別れ橋

休日もなかつた母の割烹着

連休もどこ吹く風か自営業

守口市 石森利昭

道具屋の隅に一人で金太郎

片方が譲り釣り合い取れている

負け犬も何時か逆転狙ってる

花よりも若葉の薫る頃が好き

羽曳野市 徳山みつこ

5パーセント鰯一口残せない

まさかまさかがみんなほんまになる怖さ

省エネで夫婦げんかはやめました

一日のやれやれ包む春の闇

伊丹市 延寿庵 野鶴

御身拭い脚立の上の温い風

エレベーター出前の匂い付いてくる

のめり込む趣味で生きてる翁面

水割りの琥珀に溶ける酸性雨

鳥取県 山内芳江

雲つかむような話が降って湧き

いい話だけを土産に母見舞う

買物で草臥れ果てた旅帰り

咲くまでの苦勞を花は口にせぬ

倉吉市 田中 八太郎

汚職とや浜の真砂は尽きるまじ

中年を若くて良いと思うなり

もう一度青い背広が着てみたい

玄関で外と内との面を変え

島根県 菅田 かつ子

バカバカと馬鹿を頼って居る夫

花見客ずらり並んでお手洗い

出雲弁気楽にしゃべり生きてます

物干場 黄砂仇討ちしに来たか

今治市 渡辺 南 奉

会者定離いつか一人もゼロになる

ああ生きていく辛いことまだ続く

拭き取って何もなかったことにする

神様も連休疲れ春おぼろ

島根県 武 島 ちよえ

輪になればトップもビリも分らない

一線を引いてもやはり親子です

言わずとも分かっています夫婦です

苦いけど飲めば薬になる言葉

鳥取市 近 藤 秋 星

四月馬鹿5パーセントに踊らされ

転勤の季節は悲し君も去る(月坂さんへ)

離任式せめて髭なと剃っておこ

春四月嫌な男が舞い戻り

今治市 村 上 久美子

鬼も蛇も出よう出ようと世紀末

悪の芽に誰かが水をやってる

これ以上便利は困るメカ音痴

単細胞嬉しい時も眠られず

八尾市 山 本 宏

さらさらとこぼれ落ちてる時の砂

ピカピカの母さんと行く幼稚園

満はたち何事もなく桜咲く

花びらと春を楽しむ野天風呂

米子市 小 塩 智加恵

あざやかな花びら透けるゴミ袋

滑走路伸ばす子算に揺れる村

ガラス越し誰似か孫の鼻高い

ほどのよき妻人肌酒の爛

尼崎市 森 安 夢之助

酒呑んで心の錆が落ちますか

ラストシーン隣で妻も泣いていた

巻き戻し出来たらなあと思う歳

八十歳 夢は未だに捨ててない

大阪市 立 蔵 信 子

鹿もそう観光客をあてにする

往復の切符がないと落ち着かぬ

美術館 絵を買いたい葉書かう

ふたり家族すわればそこが居間になる

富田林市 大 橋 鐘 造

町内に報道記者が二人いる

似顔絵の顔をけなしている鏡

虎の威を借りる狐になり下がる

生きている証を残す日に一句

大阪市 川 久 保 睦 子

古い二人互いの背中道しるべ

バラの香に棘あることをつい忘れ

夫好みなのに忘れて髪を切る

首を振るたびに揺れてる金魚鉢

高槻市 左 右 田 泰 雄

生憎が気の毒そうに石を蹴り

路のとう見付けて何かいい予感

さらさらと余命を刻む砂時計

長靴も足駄も遠くなりにつけり

河内長野市 印藤智子

安定剤あの人飲む木の芽どき

食事どきテレビ一人がしゃべってる

さくら散る私もいつか散るけれど

年金で風呂とトイレに手すり付け

今治市 野村清美

年かなあ無駄なものまで捨て切れず

遅咲きの花は回りへ遠慮がち

傷のあるわたしの好きな古机

ばあちゃんに残してくれた飴一つ

高知県 桑名孝雄

教育改革 孫に入試がないように

税務署が僕に払えと言ってくる

ご期待に添えないままでまだ夫婦

忘れもの人質としてママが持つ

横浜市 山下省子

胸の中の鬼が怒れとけしかける

まあまあと善い鬼さんに宥められ

その時の心を満たす無駄遣い

プロ野球試合ない夜はよく眠れ

今治市 中村好恵

蛙には蛙の意地で太い声

デコボコがあつて世の中うまく行き

好きですと言えず尊敬しています

他人には無駄と思える物ばかり

東大阪市 北村賢子

助手席で身体こわばる急カーブ

餌くれる夫居るから飛び発たぬ

君となら一緒に転ぶぬくい坂

税あがるもう買わへんで買わへんで

寝屋川市 瀧本八十八

鈍色の虹が気になる新世紀

年一度すつきりし給うお身拭い

煩惱はひとときの夢玉手箱

炭鉱閉じ月も淋しく拭く涙

兵庫県 倉垣恵美

子は宝ほんとうなのかなんなんや

貝になるそれがどんなにつらくても

陰干しと言う優しさを干している

土筆摘む孫の将来如何せん

大阪市 杉澤汀

踏まれても負けていません天の邪鬼

オッチャンにいつ代わったの理髪台

今日明日でないがと母が下を向く

一人去り二人出て行く通夜の席

横浜市 保田絹子

朝いちばん富士山望むとき至福

能書きのとおりに渴き癒えますか

マヌカンのポーズで照れるおろしたて

パンチ効く淑女にびびるのが男

河内長野市 水谷 笙子

過労死の骨は軽くてただなみだ

関空で我が子の骨を出迎える

花を打つ雨の続きし思明かな

ひよっとしてひよっとするかもタイガース

今治市 越智 青園

血の絆切れて故郷遠くなる

巡礼の鈴が打ち消す小さい罪

八ツ裂きにされても笑う花名刺

算盤を頭にこわい女なり

唐津市 江川 青琴

春休み孫の帰省が待ち遠し

愛犬に励まされての散歩かな

酔っぱらい にくたらしいほど無理を言う

淋しくて電話をすれば留守ばかり

高槻市 乙倉 武史

満開のさくらにむごい雨三日

水よりも肥料が欲しい花の顔

他人から見れば気楽な独りもの

思考ゼロ吸い殻ばかり溜めている

八尾市 井尻 民子

化粧見てどこいくねんと聞く夫

散り敷いてはかない命花あかり

5パーセント忘れひととき花見宴

美人だと一度言われて見たいもの

横浜市 丹下 智洋子

人寄せに長けて亜流が栄え出す

坊さんがベントで走るお中日

閉山の町がメロンで甦る

口喧嘩負けると猫が膝を逃げ

和泉市 中川 楓

5パーセント引きになつて春気分

妹と会う楽しみも春彼岸

親馬鹿でいい親しか馬鹿になれんもん

この指止まれ観桜の電話ベル

尼崎市 松下 比ろ志

忘れてる昔したこと感謝され

形状記憶の眼鏡をかけて変らない

昨日今日の仕切の線を太く引く

無人駅無言のままに終電車

徳島県 安宅 美代子

人並みの幸せでいい奉賀帳

官僚が地道に生きる夢を消す

お役所があつちこつちと振り回し

かさかさの女になつて村を出る

愛媛県 宮本 末子

覗きたい中は予約のガラス張り

陣中に見舞いがさぐる旗の色

消費税アップをさりげなく払う

預貯金の利息すずめの涙ほど

現役で赤門の夢ありがとう  
夫婦連れ晴れの赤門入学式

倉敷市 家守政子

気が付けば乗り越しました花見酒

枚方市 大鼻隆広

手の焼ける子供はいつも楽しそう  
わが面子つぶしてみても何も出ず  
裏方の父が愛した安い酒

鳥取市 有沢せつ子

筆箱に家族のようなペン並ぶ

新しい味は家族がモルモット

新聞を毎朝読める有難さ

岡山市 清水金太郎

三食昼寝つきでも内助の功

真実を話し逃げ出す友ばかり

忘れたい酒だなみなみ注いでくれ

羽曳野市 西村りつえ

背伸びした愛も息切れもたれあい

控え目な母の助言が効いてくる

乗せられてまた弾かれる憎い掌よ

益田市 岡田たけを

さくら散り消費税にも慣れてくる

螺子巻いて今日一日を舞い終える

行く末を語ればいつか眠くなり

突然に子が昇給の土産来る

島根県 谷岡ふみ

絵画展を回る分からぬまま終る

陽が昇る一日の無事深呼吸

横浜市 上野天々

義理を欠く言訳ちよつと風邪のため

閑静が取り柄の軒をジェット飛ば

掛けた価値どんどん目減りする健保

神戸市 船津とみ子

三角あげ三角のまま煮ています

受話器取る はいとひと声だけ私

ささやかな欲望に合うバッグ買う

横浜市 荒井広和

カルチャーのダンスは持てるから通う

花の下だから許せる杜の批判

カラオケの余韻 茶の間に持ち込まれ

富田林市 藤田泰子

眠れない夜は聖書を読んでいる

流水の音が聞こえる春の駅

踏まれてもよし雑草として生きる

池田市 木村一笛

底抜けの陽気になったワンカップ

月明かり恋する猫の影ぼうし

仮初めの夢が破れて花が散る

羽曳野市 芦田 絢子

踊る気はあるが笛吹く人がない  
けんかした事がないとは表向き

花の下で止ってしまふ万歩計

横浜市 金森 徳三

靴下を一枚脱いで春うらら

彗星をやつと見つけてよく眠れ

低金利古新聞の値も下がり

尼崎市 内田 美也子

初孫を抱いて命の重さ知る

みどり児は桜の花の精のよう

街中が桜の下で動いてる

羽曳野市 川田 晋

許しても水には流せない浮気

火だるまにまだまだなつてない総理

そろそろの職まだまだと手放さぬ

八尾市 砂田 八寿子

ドレミファソ口を揃えてめざしたち

愚妻でも人に言われりや腹が立つ

買いだめてきてどれほどの得だろう

横浜市 秋元 和可

亡母の年までを余生と決めている

期待する大器晩成後がない

いねむりがテレビを消すと目を覚ます

横浜市 近藤 道子

信号が青になったら逢いにゆく  
門灯が掃りの遅い娘を案じ  
気休めをいっぱい聞いて疲れてる

落ちてゐる画鋏生きている意地を見せ

岸和田市 不破 仁緑

蓮根の穴から覗く別世界

就職難金の玉子の掴み取り

和歌山県 杉山 精子

回想のわたしに青い風が吹く

甘口のワインで小言しまらない

さし出した梯子登れぬ自尊心

堺市 梶本 哲平

嗚呼ポコよともに暮らした十五年

明日火葬ひと夜褥をとにもする

骨箱は掌にぬくかつた桜散る

兵庫県 円増 純子

見栄張った帯が重たい孫の背な

義理一つ果たさんための帯を締め

騒音に消えた気がする「愛してる」

和歌山県 中後 清史

塾の子を緑の風が呼んでいる

溜め息を吐いてばかりはいられない

いい湯だなもつと長生きしたくなる

横浜市 伊藤ふみ

有料となつたらゴミも惜しくなり  
健診があつて法事を延期する  
春雷が生けとし生けるもの起す

東大阪市 今岡真人

沈黙の美術館たり石の庭

あと一步ゆずれば風のおだやかさ

歳月の流れうわさを消しながら

東京都 清原悦子

七人の敵にいい顔して疲れ

絵葉書へ用件だけで締めくくり

花言葉知らずに父は種をまき

愛媛県 中居善信

尻尾振る癖が五十で直らない

今度こそもう破らない辞表書く

次の駅までを繋いだ一生だ

高槻市 執行稲子

一升瓶と師に会いに行く花手桶

他人からまだ使えろと粗大ゴミ

残り炎が泣きに似てまだ女

横浜市 福田由美子

五の段の九九がとびかう消費税

職歴に主婦業とかく夢をみる

つきそいが居眠る春の映画館

唐津市 林公一朗

陣笠も一人前に視察団  
不器用も煽て効いたか木に登り  
出世魚 人事異動で太くなり

砂川市 武田正美

人間の弱点に住む神仏

親思う息子夫婦で気兼ねする

コンビニで買う弁当に飼育され

東京都 瀬戸きん子

行楽日 雨を待つてる花粉症

銭湯の煙突高い町が好き

山椒昆布炊いてひとりの昼さがり

愛媛県 安野案山子

雨降りにぱつと明るい女傘

職場からストレス連れてきた夫

割り勘へはつとしてのお金持ち

出雲市 榎ミツエ

ガタガタになるまであけぬ菜箱

医者ぎらい菜ぎらいな私です

原爆の悲しい傷に鳩の群れ

吹田市 野下之男

春の夜をただ只管に猫の恋

先輩の意地を見たかと棒グラフ

恥の字は辞典にあるが知らぬだけ

岡山県 国米きくゑ

曇る顔笑顔に変えて看取る時

ワイングラス曇ったままで妻の病む

昨日は毒 今日薬と飲んでる

広島県 山本示風

自転車の数に驚く街だった

帰りたい梅とお粥の待つ日本

自然美はどこにも負けぬ瀬戸の海

今治市 塩路よしみ

子と孫の連係プレーに負けました

合格へ死んでるように寝てる孫

へそ曲り時にそっぽへ豆のつる

鳥取県 奥田信敬

使途不明五パーセントがなぜいるの

猫にやる小判で何時も飲んでる

たまごつち高い金だす代物か

鳥取市 福田登美

信じてる縄をも一度確かめる

朽ちかけた杭も流れに凜と立つ

牡丹より心やさしい人が好き

新潟県 高野不二

胃カメラに悪知恵まではうつるまい

いい時に辞めたと思う食糧費

死んでまで松竹梅と言うランク

大阪府 澤田和重

脱いだ靴 親の躰が見えてくる

謙遜の言葉本音と誤解され

渋滞のタクシーメーターばかり見る

兵庫県 中野とよ子

居所の虫が音たて戸をしめる

うまい物山と積んでも手が伸びず

關病の朝のひと口あついお茶

鳥根県 岩田三和

途中下車奴がいる町おどかさう

江戸文化咲いていたのは山ざくら

春の女神きいろい着物白袴

鳥取市 石上悦子

プチトマト誰も食べぬが植えている

病室に夫が単身赴任する

新入りのお世話は古い患者さん

和泉市 横山捷也

検温で起こされ外は明けやらす

子供会古い遊びの指南役

乗りつぎが一つ違って歩く坂

兵庫県 谷田多美子

記念写真美人は前へ前へ出る

新ニュース オウムははるか遠くなり

亡母がした通り朔日櫛変え

姫路市 服部 一典

人生は神の遊びの双六だ  
日向ぼこ極楽行が顔ならべ  
忘れ物したまま人生終わるよう

鳥取県 吉田 孔美子

傾いた家に不安もなく嫁した  
授かった女の宇宙閉じたまま  
羨まし噂の煙でも欲しい

羽曳野市 三好 専平

腹八分やっぱり少しもの足らず  
爪切って将棋を指しに出かけます  
ガラガラのスーパー店員だけ目立ち

鳥取県 藤山 弘子

小春日に雀の学校よく歌う  
無農薬 雀の声が弾んでる  
家族でも防火訓練しています

和歌山県 村中 悦男

よくしゃべる人はどこでもよくしゃべる  
限界になった輪ゴムが抵抗す  
うそつきがまた一面に大活字

鳥取県 原 みさを

あの時の答えがもらえそうな雲  
傾いたままで書棚に資本論  
ほうき星ときどき痛む脛の疵

堺市 桜井 莊次

ソロバンに合わぬ話に乗せられる  
ライバルの安否気づかう空模様  
胸の奥まで見透かされてたのん気

尼崎市 小川 富江

朽ちかけた杭も流れに踏ん張って  
少しだけトボケて見せる老いのエゴ  
カルチャーの数ばかり増え皆半端

大阪市 和田 和風

均等に列島揺らす大鯨  
歩数だけ増えて延びない歩行距離  
当分は買わんと決めた消費税

鳥取県 橋谷 静江

楽しみは料理上手な嫁と住む  
一日のドラマ疲れと共にすぎ  
やっと咲く桜へ無情雨つづく

静岡市 大村 正雄

ご自慢の話その先知っている  
合格で天神様をつい忘れ  
通ぶって茶碗の音を聞いてみる

静岡市 宇佐美 寿美

いつか行く旅のプランが宙を跳ね  
腕まくりすぎて職場の目に射られ  
夜桜の灯に咽ぶ濃き慕情

春眠へ無情の起床ラッパ鳴る

岡山県 大家 風太

ブランドが旅に出たがりまして春

晴耕雨読自律神経失調症

横浜市 鈴江 純子

アバウトに過ごして長く生きてます

セーターに編み込まれてる母の柄

五月晴れ鯉も布団も上機嫌

高槻市 江原 秀夫

長生きゲームどちらが勝つか妻も古希

勇気あるお方でいつも敵がいる

ことごとくにこんがらがって老いの連れ

兵庫県 高見 末野

誕生日 孫と二人の食事会

雨垂れの音数えつつ春の風邪

正直に生きたつもりも敵がいる

河内長野市 木太久 正一

桜散りや々と片付く置炬燵

菜園に活気漲る夏野菜

足腰に気をつけ余生健やかに

横浜市 長島 亜希子

春めいて散歩時間が増えてきた

暖房の電車が春の風を入れ

早く雛片づけてねと娘がせかす

立つ鳥のうしろ姿か胡蝶蘭(中田純次氏を悼む)

東京都 井上 つよし

スキ焼の肉は子供の方へ寄せ

お互いに話半分釣り自慢

鳥取県 奥谷 彩子

栄冠に無欲な父とにぎりめし

友への便りさくら一片入れて 春

福耳へうれしい話だけ通る

八尾市 篠原 いつふみ

一時間きっちり終るお葬式

出口まで首上げたまま通り抜け

自分でも涙 脆さが可笑しくて

大阪市 亀井 円女

私が逝けば泣いてもくれませうか

亡母の星もう何年も見えませぬ

ガンは私に家族でなくて有難う

島根県 福岡 博利

古時計動きはせぬが捨てられぬ

わら屋根の宿にときめくひとり旅

遺言書あなたにだけは見せておく

兵庫県 徳平 毬子

ダイエツトやけ食い一度逆もどり

ことしはやくぎ煮届いて春の音

娘の治療 桜も春も何処へやら

兵庫県 大谷 幸次郎

振り向くはまだ先のこと前になる  
花粉症 鼻がルーズになつてくる  
針穴を無理に通つてしごかれる

松江市 浦辺 静江

留守電へ楽しいニュース聞かせとく  
雨続き暇もて余す濡れ落ち葉  
ラジオから流れる歌を夢うつつ

河内長野市 妹背 尽呂久

整然と若芽居並ぶ入社式  
夜も更けて優しい女爪を研ぐ  
本音では勘定高い低い腰

鳥取市 藤 ふうこ

人は去り花は相似てまた春に  
松の芯天を目指して春は萌え  
いつしかに鞍馬のごとく生きて古稀

尼崎市 中澤 向西

夢乗せて紙ヒコキが飛んでくる  
都落ち辿れば水の清き里  
控え目に嘘が言えない母が好き

大阪市 中橋 恵美子

未だおんな自己検診をする乳房  
愚痴話ほどほどに聞く花粉症  
ばあさまの啓蟄となる花見頃

尼崎市 尾宮 弘治  
ペット二匹扶養控除をしてほしい  
五十年の愛妻猫に寝取られる  
任されてひとり苦しむロダン像

横浜市 生坂 サト子

日食が池にはまって欠けてゆく  
珍味です賞味期限の念をおす  
雑草が励ましあつて伸びている

大阪市 中井 正秀

生きるとは高くつくよねでも生きる  
お金ない遺言残す事もない  
仏様オカズなしでも召し上がる

宝塚市 飯西 ミサヲ

老いらくの恋も電池の切れるまで  
スタートで転ぶな泣くを踏まれるぞ  
考えて一つ買うため二つ捨てる

高知市 細木 子龍

余所行きの言葉の混じる参観日  
少しだけ冒険をして老いを生き  
過去ばかりぐちっているが今がない

島根県 槻谷 仲子

ジーパンを一度もはいたことがない  
三寒四温 時々悩む花粉症  
リラックス テレビすやすや春炬燵

鳴門市 八木芳水

悲しみの重さに耐えず落ち椿  
余韻断つ傘の雫をパツと切る  
手のひらの運命線が消えてゆく

鳥取県 国森武子

甘酒がうまく作れる母となり  
それぞれの生き方ドラマより真面目  
焦っても退化する脳止められず

高知県 大野蒼流

チンドン屋明治の音でまだ達者  
凡夫婦下駄の音だけよく揃い  
点滴の窓へしたたるような碧

和歌山県 藤井春子

焦ってはならぬと足に言い聞かす  
八方美人中味がなくて情に欠け  
雲行きを見て冗談をやめにする

鹿児島県 大山舞鳥影

お見舞いをお断りする紙オムツ  
僕ちゃんのままで大人の顔がある  
古里の便りを運ぶ風が絶え

鳥取市 宮脇道子

今までにいくつ渡った恋の橋  
淋しさも素直に吹かれ春の風  
世の移り動物進化追いつけず

兵庫県 仲井素水

裏に裏あるのを学ぶ政治学  
祝祭日 日の丸を出す老いの役  
グイエットなんて贅沢やせ蛙

和歌山市 吉村さち子

目立たない雑用ばかり降ってくる  
付き合いの程度で決めるのし袋  
プランターの苺をせかす水加減

兵庫県 西川一繁

寄り添って撮ると仲良く見えてくる  
慎ましく生きて世間の目が温い  
呑んべえに意見するにも酒がいり

横浜市 明渡トヨ子

マネキンを裸で運ぶ手のやり場  
褒められた耳朵そつと撫でてみる  
パパママと呼ぶなくなつて声変り

岡山市 藤原一平

今日もまた妻の死角で泳いでる  
十本の指にそれぞれある美学  
ほつとけば手の鳴る方へ行きたがる

八尾市 高橋明子

そのむかし習え習えと針仕事  
犯人になんで風呂敷かぶせるの  
銅鐸は地下千年の住み心地

鳥取県 高尾 京

癒やされて花の心を探る朝  
世話出来る夫婦はよいと論される  
新鮮な野菜にいのち満ちてゆく

大阪市 塩谷 徳子

これからはいらぬ心配しないこと  
長電話手がしびれたよ早よ切って  
明日は孫東京へ発つ桜咲く

尼崎市 的場 十四郎

もしもして妻は二十歳の声を出し  
ゆつたりと湯気に浸かっている命  
孫がきて冷えた茶の間を笑わせる

富田林市 杉本 とも子

春風が飛ばしてくれた冬帽子  
留守電に春告げ鳥の友の声  
リストラはエープリルフルでいてほしい

北海道 中里 つね一

万歩計買ってむりやり歩かされ  
八十路坂これからゆつくり行くとしよう  
硬軟の使いわけでは議員なみ

和歌山市 木村 初子

青春を翔けて無限の夢伸ばせ(孫英国留学)  
白と黒取捨選択のくり返し  
キャリアアウーマン忘れ上手になつて老い

岸和田市 亀井 皎月

薬漬け今日も見かけは元気です  
肝臓にストツプかかる恨み節  
失せ物が恋しくなつて来る季節

大阪市 三浦 千津子

春嵐ドミノ崩れの駐輪場  
変身願望羽搏きだけは忘れない  
生きのびた命力まず出直そう(心臓手術成功)

秋田県 湊 修水

ゆらゆらと追い抜いてゆく春の蝶  
ひとつだけウソでなかった四月バカ  
ペテン師にバッジを売つたのはたれだ

羽曳野市 内田 さとみ

飲む誘いふたつ返事の軽い腰  
生きるとは悶えながらの遠い道  
風もなく淀みもなくて路地住い

唐津市 岩崎 實

遠ざかる読書に届くご案内  
ゆきずりのはずみも遠し春彼岸  
来ぬ人を待つて待つてる花の雨

米子市 猪森 スミエ

開発か自然護るかヤジロペエ  
初節句小さな主役大写し  
我こそがクインと競う牡丹園

唐津市 宗 弘

床の間の石に観る目を試される

闘争を知らぬ若者たまごっち

曇り後晴れの子感で暮して

岡山県 富坂志重

しらぬ間に祈ってあげる人が出来

茶を替えて話のつづき聞くとする

言うだけは言っておこうと座を正す

尼崎市 河津正治

胸張って人一倍の苦勞する

油には遠い国です汚染です

勢いに乗って強氣の空財布

松江市 佐野木みえ

花の宴一期一会の人となる

杯の中に一ひら花の精

桜茶を味わっている幸せな

日立市 加藤権悟

妻よ妻 俺を残してなど逝くな

金ピカの釦よ奢り過ぎないか

無冠だがエース父さんだと思ふ

兵庫県 西山八重子

酔ったふり寝たふり里の膝枕

春の花植えてほんのり匂う庭

修羅越えて嫌とも言えぬ五十年

泉佐野市 稲葉洋

平成も昭和に負けぬ有為転変

陽と月と星が教える無限大

尼崎市 長谷川佳山

気がつけばこの朝もまた麗しく

教団を衆愚と変えて納得し

泉佐野市 大工静子

ちっばけな八百屋新鮮だから買う

留守番の猫へ砂箱うちに入れ

福岡県 本田忠男

平和とは景色でわかる汽車の窓

変ったな角かどしてる家並ぶ

和歌山市 山根めぐみ

しなやかに天を突いてる竹の伸び

うきうきと倅せ芝居してひとり

交野市 山川日出子

術後すぐ五指の動きを確かめる

病室で夕日とさくら目の保養

羽曳野市 山本たけし

消費税アップ春怨ベレー帽

寿命だけ平均点は取れそうで

京都市 勝山美千代

置いた菓子笑った孫の盗み食い

何時までも世間知らずの内娘

席順は会社と同じ花見宴

肩書きが付いてクラブを振り回し

使ひ捨てカイロが余る花だより

平衡感覚少し狂ってきた余命

欲出した遺品の時計動かない

ローン組む三十年は羨まし

自分には無い才能が憎いだけ

能力がないから今へしがみつ

定年にネクタイ無聊な日々送る

通ぶってブラックコーヒーしか飲まぬ

さすがプロ ツアーアウトから楽しませ

フルムーン退職金で予算組み

虎落笛 君の心が見えすぎる

誘惑の落し穴にはないランブ

大和撫子箒構えたおばあちゃん

受話器をとれば無言で切る電話

唐津市 松本圭

富田林市 欄 智久

兵庫県 緒方美津子

八王子市 播本充子

高槻市 傍島克治

滋賀県 中宗明

和歌山市 武本碧

羽曳野市 森田四三郎

野仏も今は団地の道しるべ  
九十分並んで鯨の金に会い

あり余る水仕方なく滝で落ち  
好きだから海鼠の固さ苦にならず

折にふれ陰でささえてくれた亡母  
子の世界 親の世界の見えぬ垣

安楽死相談されて悩みます  
息子等も犬も浮き浮き春日和

無為無策あくびの数が嫌になる  
きなくさい横のひそひそ気にかかる

極楽は足を伸ばして寝てる風呂  
病院のヒントで手すりつけた風呂

シベリアの凍土になった兄の骨  
北風にどんでん返しされた海

春うらら青春切符年忘れ  
通勤車 花の見所知りつくし

和歌山市 福重美子

大阪市 平井露芳

香川県 向山治延

大阪市 鈴木トヨ子

松江市 安食友子

橿原市 西本保夫

米子市 池尾保子

豊中市 岸田知香子

睦まじく若芽啄む夫婦鳩

熊本県 増田 一 乗

日脚伸び庭の雑草よく目立ち

寝屋川市 井上 すみれ

いよいよか三度読んでる同じとこ

ようちビタ靴の子まわり笑わせる

岡山県 土居 ひでの

ラストシーン尾灯に別れ揺れている

ほどほどの欲を積んでる一夜干し

出雲市 加藤 スズコ

伝統の紙漉き守る紺餅

長生きの葉お酒とえびす顔

東大阪市 松山 隆

出来映えを見つめコーヒー甘くなり

正直と嘘を見分ける血圧計

川崎市 和泉 見早子

恋遂げた猫も娘もよく食べる

友達のともだちも来て悪びれず

横浜市 宮村 ちよ路

ダイケア 今日も拗ねてる二度童子

腕を組む夜道楽しい唄が出る

鳥取市 森本 和子

還暦に夢のパズルを一つ埋め  
ニユールック春の色着て老い弾む

古希すぎて趣味の花咲く春となる

西宮市 井上 俊二

言うたとして叶わぬことの多い今

大阪府 島崎 孝一

一休み茶の香漂う描き疲れ

七五三代るがわるに背負ってる

高槻市 小林 一閑

先人の句集毎朝半時間

お習字の手本いつしか隅へやり

鳥取市 西村 半畳

大辞典買った思春期はるかなり

山動くこの一言に惑わされ

鳥取市 山本 益子

きのこ雲 平和な今も目に残る

深呼吸これから先の策を練る

鳥根県 松本 聖子

病窓で眺める風も春のいろ

古里がさくらさくらと呼んでいる

鳥根県 三代 朝子

入試祈願神も戸惑う絵馬の数

受話器に温い人柄だと思ひ

和歌山市 和田 美寿子

長電話切るきつかけは震度五  
国民は怒っています消費税

鳥取市 森 明 美  
動燃のたびたびの嘘許せない  
駅前赤提灯にまた負けた

富田林市 山 原 昭 水  
平凡な暮らしが好きでわらび餅  
信心をしてるが腹は減ってくる

松江市 松 本 知 恵 子  
彗星へ思わず願いかけている  
花に酔いラストダンスを踊ろうか

千葉県 大 川 晚 翠  
美化奉仕いつもの人がゴミ拾う  
遠回り裏道ばかり歩いてる

松江市 松 浦 登 志 子  
転勤の置きみやげにと流行風邪  
母が待つ気もいそいと豆を煮る

枚方市 二 宮 紫 鳳  
子に学ぶこと多すぎて威厳なし  
母として熱いものあり背に祈る

鳥取市 山 本 崇  
ぼかぼかと日向で長い立話  
自転車の乙姫様の長い髪

松江市 川 本 畔  
こだわりへ遊ぶつもりと言いきかす  
塩鯖の尻尾のような女でした

### 各地句会報から―「川柳みか月」

意志のはたらきが課題をとらえ、その題を連想すると、いろんな情景が浮かんでくる。焦点を上げると自分の気持と題が合うところが出てくる。題を横から視点を含ませ、うしろから眺め、自分の気持ちが納得するまで焦点を合わせてみる。(螢)

七色のじゆうたんを敷くチューリップ  
赤い夕日今日一日へさようなら  
島根県 児 玉 幸 子

八重桜もつと優雅に散れないか  
和歌山市 水 田 秀 男  
財政赤字の重さに沈む日本丸  
鳥取県 垆 寛 子

申すことありて八十路の御出張  
再入院余生がジャンプして困る  
横浜市 豊 田 羊 子

世帯主の無力に代り子が支え  
人間もパーツに分ける時代かな  
静岡市 中 西 雅

菜種梅雨足元わるい医者通い  
夜なべの灯繕いものの亡母の影  
大阪府 団 野 恒

木々芽吹く曾孫の名前あれこれと  
掛軸を芽柳に変え花も変え

# 秀句鑑賞

—5月号から

中原 諷人

先代の大きな屋根で着ぶくれる

山本 正光

先達の築き上げてきた大きな伝統の下に、のんびんだらり着ぶくれた、怠惰をも連想させてくれながら、消費税五パーセントという殊更に陽当たりの悪くなった大屋根の下での薄ら寒さを気づかせたようだ。

もういつべん寒なりまつせお水取り

神原 まさと

古川柳にあったような感じの作品なのだが、やはり佳句は良い。

恒例「お水取り」といえども「小鳥殺し」

の彼岸雪だつて降ってくる寒さ予報。

穿った鑑賞すれば「消費税」との兼ね合いにも読み取れるから面白い。「寒なりまつせ」という関西弁にユーモアな皮肉味もある。

五パーセントにした消費税に因って「寒戻りえろう寒なりましたなあ」と叫ばんかな。

じいさんと呼ぶな呼ばすな呼ばれるな

木村 親路

格言や標語的な作品とも見えるのだが、巧く穿っているのである。

初めて「おっちゃん」と呼ばれた時はガクンときたが待望の甥ゆえに許すことにした。

「じいさん」はせめて喜寿を過ぎてからにしてもらいたい……と男の希いである。

色紙・短冊に描ける句を生まんとして努める中で、この句それとなく書いておきたい気持ちに誘うようである。やはり格言かな。

寄り添った胎は塚から出られない

渡邊 伊津志

軟弱に寄り添う引つ込み思案の氣質、高齡・在宅介護・身障者など、胎で仲良しぶっているのだが今一つ真骨頂に届かない。

塚の口を転び出る気はあっても、不安感との葛藤に苛まれ親離れも子離れもできない。胎を溶かすか、固めて塚を割るまいか……

もう遅いテールランプが遠ざかる

秋元 和可

発った後の赤尾燈は、淋しく虚しく悲哀にさせる。流行歌の題材になる景である。

確かに、青春時代の赤尾燈は遠ざかり戻ってはこない。未練断ち切る心境を詠んだ……が待てよ、幸福の神々の赤尾燈は此方へ向いてい

ないのではなからうか。信じたいなあ。

辛苦を積んだ貨車の小さくなってゆく尾燈。

すぐ熱す血がありいまを生きている

流 奈美子

熱くなる血を保っていないければ（それもなるべく即熱が良い）現代社会は生きにくいのである。何に対しても燃える血を養わねばならないとの暗示がこもる。他人のことに、

自分のことも熱中して生きられるのである。「すぐ熱す」が、忙しさと愉しさに変わる。

針も錆びてわたし一体何してる

吉田 孔美子

女性の立場からの懺悔にも思わせる。「針も錆び」から「一体何してる」までの起

承転結が爽快な表現にされており愉快。平等均等を訴える声のなかに貴重な心遣い。この後も心変りない優しい妻「ころを希う。

この辺で味方の数を読み直す

藤原 一平

直木賞 芥川賞だけは読む

川島 良子

表現を変える回転ドアがあく

松本 聖子

芽が出たよ山がくすくす笑いだす

猪森 スミエ

作家は、もう少し本を読みたいものである。

# 沙湖抄

## 八木千代選

平常心と言うブレイキをつけている  
 塩壺の塩の甘さを知ってから  
 階段を降りる一身上の都合  
 真ん中に居ることがとても苦しい  
 雲の上の雲に覆われてしまう  
 前線停滞やたら輩が溢れ出す  
 エレベーターに二人で乗っている恐怖  
 花筵 生き抜くことの難しさ  
 差向い これは錯覚かも知れぬ  
 情けないことにイエスしか言えぬ  
 空っぽの音楽堂に椅子ひとつ  
 月見草 月の恵みが欲しいのか  
 モナ・リザの視線の先に立っている  
 大きな葉の椿大きな花が咲く  
 微調整 私の火を守る  
 後ろの山が燃えているのに動けない  
 火をつけにきたのは春の余り風  
 菜の花の真っ黄に染まるかくれんぼ  
 薄野の獣は月とねんころり  
 タンポポになって原野に根を下ろす

岡山県 小林 妻子  
 富田林市 池 森子  
 米子市 政岡日枝子  
 大山市 早川 盛夫  
 米子市 林 荒介  
 西宮市 牧淵富喜子  
 海南市 三宅 保州  
 和歌山市 田中 輝子  
 西宮市 奥田みつ子  
 八尾市 高杉 千歩  
 和歌山市 野々 圭子  
 米子市 茂理 高代  
 和歌山市 古久保和子  
 西宮市 亀岡 哲子  
 和歌山市 川上 富湖  
 島根県 松本 文子  
 藤井寺市 高田美代子  
 和歌山市 木本 朱夏  
 米子市 林 瑞枝  
 富田林市 藤田 泰子

生きている証明の現況届  
 一輪挿しの水枯れて鳴らない電話  
 父に似てきて母に似てきて黙って居よう  
 一人歩きが可能な限り石を積む  
 箒目がうしろ姿に揃わない  
 みくじ吉言うべきことは今日言おう  
 風向きのよい風吹いてる仏の日  
 おふくろも親父も月の裏側に  
 最後まで写経を書いたことがない  
 もう何も飾るものなし夕茜  
 小道具の足りないままで幕が開く  
 陽炎になってしまった水たまり  
 一年をかけた桜の心意気  
 ほの灯 桜あかりに昏れなすむ  
 手紙焼くなまぐさきもの燻らせて  
 澄んだ目に映る鏡を磨いている  
 鯉に餌 別れの言葉言いやすい  
 糞虫の抜けた糞だけ揺れている  
 一心不乱に祈る私にできる事  
 花曇りあいまいな過去問い詰めず  
 浅瀬から海の掙は深くなる  
 老いぬれば小規模の竜巻もこわい  
 悪の芽は手入れをしなくても伸びる  
 裏付けの言葉が散歩して困る  
 朗報を葬儀の列でもて余し  
 まっすぐに烽火を上げている凱歌

和歌山市 岩本美智子  
 吹田市 山本希久子  
 松原市 小池しげお  
 尼崎市 春城武庫坊  
 寝屋川市 森 茜  
 和歌山市 桜井 千秀  
 八尾市 宮西 弥生  
 鳥取県 新家 完司  
 和歌山市 川上 大輪  
 広島市 流 奈美子  
 羽曳野市 吉川 寿美  
 鳥取県 岩崎みさ江  
 米子市 青戸 田鶴  
 尼崎市 春城 年代  
 弘前市 佐治千加子  
 米子市 驚見 正子  
 大阪市 榎本 露児  
 砂川市 大橋 政良  
 東京都 山口 新子  
 和歌山市 福井 桂香  
 倉吉市 淡路ゆり子  
 守口市 結城 君子  
 鳥取県 土橋はるお  
 寝屋川市 江口 度  
 大阪市 本間満津子  
 松原市 玉置 重人

暗がりではろいはなしに触れてくる  
 極楽の旅はこれから成田発  
 乗り換えの駅でたしつかめ合う切符  
 言うなればりんご二つに割った仲  
 勝った負けたとちっぽけな宇宙論  
 風紋が動く私は砂の粒  
 雨空の今日はゆっくり傷いたむ  
 約束のなかで軽重選り分ける  
 北風の仕打ち今では礼を言う  
 一対一で勝負がしたい塩送る  
 空の青 一気に翔んでみたくなり  
 覚えていた呪文が効かなくて困る  
 崩すため積木を高く積みあげる  
 かるく手を挙げ人混みに消えたまま  
 まっ昼間の霊柩車という麗やかさ  
 太陽が覗けば白い一頁  
 美しい花は見せ場を知っている  
 姿見の中に女は猿を飼う  
 谷揺れるうねりのような山桜  
 八分咲き 春霖に大きな誤算  
 疑問符をひとつ残して桜散る  
 二階からくしゃみがころげ落ちてきた  
 水たまり跨げずにいる浅い恋  
 大切な姑を上手にこき使う  
 ケセラセラ悪くないなと思う齡  
 泳ぎつかれて笑い袋の修理する

兵庫県 遠山 可住  
 鳥取県 土橋 螢  
 倉敷市 小野 克枝  
 弘前市 斉藤 劔  
 鳥取県 鈴木 公弘  
 米子市 中井 ゆき  
 吹田市 栗谷 春子  
 京都市 都倉 求芽  
 米子市 野坂 なみ  
 愛媛県 中居 善信  
 西宮市 西口いわゑ  
 美禰市 安平次弘道  
 富田林市 片岡智恵子  
 川崎市 和泉見早子  
 弘前市 肥後和香子  
 大阪市 神夏磯典子  
 松江市 川本 畔  
 弘前市 高橋 岳水  
 池田市 栗田 久子  
 米子市 白根 ふみ  
 八尾市 高橋 夕花  
 倉吉市 野中 御前  
 鳥取県 上田 俊路  
 八尾市 村上ミツ子  
 寝屋川市 堀江 光子  
 米子市 澤田 千春

移植鏡春のヒントを掘ってみる  
 怒る事忘れた老母に物足らず  
 置きぐすりて取れぬ微熱が娘につづき  
 右肩を落として鬼も老いてきた  
 切り返す鬼まだ育てかねている  
 ハンドルの遊びはとも好かれませす  
 指五本今朝は動いてくれている  
 春を見つけて八十歳の髪を梳く  
 生ぐさい話に人がよってくる  
 春爛漫 踊りたくなる中ヒール  
 隣席が顔のぞいてる無視しよう  
 本音なら優しくつつむ栗のイガ  
 古ばけた辞書武器のよう侍らせる  
 宙がえりして反骨の軒つばめ  
 日本晴れ赤いご飯がほしくなる  
 約束の時間も過ぎたおぼろ月  
 衰えんとする六感を研ぎすます  
 溺れば汚れた薬も放さない  
 老農の鎌は今でも光っている  
 国会に欲しい倫理の担当医  
 花束贈呈 挑戦かも知れぬ  
 PTA好意と好意火花散る  
 水溜りこえて呼吸も楽になり  
 このままで良い訳がない顔洗う  
 イミテーションでも愛あればそれでいい  
 炙り鳥賊裂いて死ぬこと生きること

鳥取市 武田 帆雀  
 和歌山市 吉村さち子  
 米子市 石垣 花子  
 倉吉市 松本よしえ  
 堺市 志田 千代  
 鳥取県 谷口 次男  
 和歌山市 福本 英子  
 岡山県 山本 玉恵  
 鳥取県 さえきやえ  
 和歌山市 玉置 当代  
 大阪市 松尾柳石子  
 岡山県 矢内寿恵子  
 出雲市 園山多賀子  
 和歌山市 山根めぐみ  
 米子市 木村富美子  
 羽曳野市 田中 透太  
 大阪市 板東 倫子  
 黒石市 相馬 一花  
 香川県 木村あきら  
 唐津市 宗 弘  
 羽曳野市 芦田 絢子  
 寝屋川市 岸野あやめ  
 大阪市 町田 達子  
 富田林市 中井 アキ  
 和歌山市 山田 高夫  
 綾部市 藤田 芳郎

早咲きの花散り妻の忌がめぐる  
 現代の武士は喜劇を背負うだけ  
 長生きの在りようふつと考える  
 スパークもせずすれ違つとも夫婦  
 うおんうおんと泣くには四方薄壁  
 春風が脆いなさけを切りにくる  
 昼休み手品の種に餌をやり  
 投函のボソリ未来の音立てて  
 おばちゃんも居なくなるよと猫に  
 医者の前いつも元気な声を出す  
 自問して握つた拳また解ける  
 移植法先手も後手も揺れ動く  
 陽性でトンボの明日は風まかせ  
 コップ酒生きるヒントは簡単だ  
 迎え撃ち特に踏ん張ることはない  
 志持つて地虫が這い上がり  
 この庭に子等の記念樹根が張らず  
 立派だなまだ食いしばる歯があつて  
 どちらとも取れるポーズで逃がっている  
 桜満開 活断層は忘れられ  
 ライトアップ桜に光強すぎる  
 元氣よい順に活魚は掬われる  
 ふれ合つて若い世代はビタミン剤  
 勉強をさばるときしみ出す机  
 荒波を薬一本にすがりつき  
 大切にすることからという空手形

豊中市 田中 正坊  
 川西市 松本ただし  
 鳥取県 林 露杖  
 箕面市 岩津ようじ  
 今治市 村上久美子  
 西宮市 門谷たず子  
 寝屋川市 平松かすみ  
 寝屋川市 坂上 高栄  
 横濱市 豊田 羊子  
 米子市 木村 春枝  
 鳥取県 橋本多哥由  
 寝屋川市 龍本八十八  
 弘前市 一戸 ツネ  
 和歌山市 宮口 克子  
 福岡県 本田 忠男  
 今治市 渡邊伊津志  
 鹿児島県 大山舞鳥影  
 鳥取県 石谷美恵子  
 鳥取市 植田 一京  
 今治市 月原 宵明  
 横濱市 清水 潮華  
 枚方市 前 たもつ  
 貝塚市 池田寿美子  
 横濱市 川島 良子  
 倉敷市 田辺 灸六  
 八尾市 村上 剛治

善良な客にも監視するカメラ  
 人間の奢り一円玉哀れ  
 雨傘の滴切る手の乱極まる  
 童話本展げ母子で飛ぶ宇宙  
 やさしさと強さほどほど妥協ぐせ  
 無心になつて描けば自分が浮いて出る  
 包丁を研いで献立考える  
 無縁墓肩寄せ合つて花の下  
 折々の花も大地のおもいやり  
 おだやかな波にもあつた謀反心  
 人形に抱きぐせつけた幼髪  
 鉛筆の芯をとがらす菜種梅雨  
 逃げ道は六法全書にかいてある  
 モナリザを見れば貴女が甦る  
 茶の味がこつとも違つか定年後  
 菜の花とどちらが好きと蓮華草  
 死ぬ日まで悔いと道づれするだろう

和歌山市 青枝 鉄治  
 枚方市 濱田 良知  
 神戸市 船津とみ子  
 和歌山県 中後 清史  
 大阪市 鍛原 千里  
 今治市 越智 一水  
 鳥取県 西川 和子  
 広島市 森田 文  
 大阪市 津守 柳伸  
 羽曳野市 酒井 一壺  
 今治市 野村 清美  
 八尾市 吉村 一風  
 倉吉市 野口 節子  
 姫路市 服部 一典  
 泉佐野市 稲葉 洋  
 唐津市 田口 虹汀  
 大阪市 渡部さと美

小林妻子さんのブレイキは平常心でしたか。日常生活の中で平常の状態を保つために私などは、瞬時ながら抑えて抑えてと我が身に言いさかせて年を寄せてきたのですが、この大きい人間社会の坩堝にあつては途方に暮れることが多く、自制をつらいと思つています。妻子さんの凄いブレイキは自然に出てくるのですね。参りました。池森子さんの塩壺からは長いプロセスを、それもわりと激しく伝えていきます。実感をしつかり凝固させて静かに書いてあるから却つて深い彫りが見られます。政岡日枝子さんの都合はかなり大きなものです。階段を降りるのは上るのにまして勇氣が要りましよう。すれ違ふ人に道をゆずり踏み外さぬように降りるのは最後の勇氣です。

凡聖一如元旦のころ知る

昭和十年新年号の巻頭には三号活字で一頁に一句、この句が三行に分ち書きされていゝる。句集「旅人」には

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

(二行)

君見たまへ／葎稜草が伸びてゐる (二行)

凡聖一如／元旦の／ころ知る (三行)

のように分ち書きで一頁に一句または二句掲載になっていること周知の通りで、路郎は句のリズム感を大切に扱った。

元旦に誰とも等しく交わす「明けましておめでとつ」の清しい気持ちには、新しい事務所からの出発もあって、路郎先生には「ころ更なるものを感じられての一句であつたらう。新年号特集は有名川柳人十七名からのエッセー「父と母を語る」、以下二名だけ抜粋。

父は幕臣

阪井久良俊

貴問を伝統を尊重する日本の川柳家として敬意を払いし。父は幕臣にしてペルリ来船の際下田奉行配下となり、後転じて金川奉行配下となり、横浜港地形整理に従い、後横浜税

関副長となり大蔵省官吏に終る。漢詩に長じ川柳を作る。年六十一。母は山澤検校一胡弓日本一の三女、江戸久松町に生まる。父に嫁し二男七女あり、久良俊其二男、年八十三。

俳人眉山

岸本 水府

私の父は眉山といつて俳句を一寸やつていました。父の持つていた短冊に「迎へけりまづ初としの朝熊山」というのがあつたり、父が国を出る時友人から貰つたといふ「この里の味も忘れななさり汁」、また私の生れた時友人が贈つてくれたといふ「行末は艦も浮べむ春の水」など今の私として父の友だちの句ばかり覚えていますが、父の句は一句も知りません。

父と砂糖

麻生 葭乃

母は私の六才の歳に亡くなりました。私と二人きりになつた父は三百六十五日粗末な机の上で、A+Bはの鉛筆を走らせる外に時々私を連れて芝居や寄席や、川柳会へ行く事を

楽しみにしていました。父は人に對して赤裸々な意志表示をせなかつたので、唯無口な人変屈な人で通つていました。当然何と返答をせなければならぬ苦の場合に、何のアンサーも無い時の父は、必ず憤慨していました。然し其憤怒の奈辺にあるかは凡そこちらで察しなければならなかつたのでした。

「彦はんは愛があるよつてに」とは親類の人達が異口同音に父を評価する言葉でした。

或る日、父は私の母の里を訪ねるために鶴屋の生菓子を持つて行きました。父は大阪一流の生菓子を堺の人達に宣伝するためと、一つには里の人々をねぎらう意味とで得意満々としていたのですが、父の嫂にあたる人が「こんな上等なお菓子は貰うても直ぐムシヤムシヤ食べて終つて勿体ないなあ。其段お砂糖が一番重宝や」とつかり口をこらしました。

それを聞いて帰つた父は、以来里へは中元も砂糖、歳暮も砂糖、手土産も砂糖で、父の一生をつつぱりました。

他に、清明、南北、周魚、信子、不浪人、

柳秀、三太郎、五花村、久流美、紋太、雀郎五健、正光、路郎の諸氏、川柳人評伝の資料ともなる好読物である。

## 尚香のむ

## 西出楓楽選

めずらしく夫がお茶を入れてくれ  
雲囲気に酔うて答えを注ぎこぼす

滅却のできぬ心と生きている

先送りする丁度よい雨が降り

庭石が百面相をしてみせる

コーヒーが冷めて噂がふくれ出す

懐かしい声で選挙の依頼くる

こじんまり表通りで生きている

悲しみを知って倅せ掌に重い

カットした髪ので軽さで旅に出る

ライバルの愛想笑いがやや歪

仮設の灯 住めば都と思えない

想い出の賞味期限が切れている

結婚記念日 仏壇に赤い薔薇

通過駅 土砂降りだったこともある

うかつにも風のゆくえを聞かなんだ

花ひらり喜怒哀楽を封じ込め

笑ったら負けそうだから笑えない

私のイメージじひとり歩きする

西宮市 西口いわゑ

米子市 林 瑞枝

和歌山市 川上 富湖

大阪市 三浦千津子

米子市 澤田 千春

兵庫県 北川とみ子

横浜市 川島 良子

米子市 木村富美子

富田林市 中井 アキ

大阪市 鍛原 千里

和歌山市 桜井 千秀

寝屋川市 岸野あやめ

和歌山市 木本 朱夏

羽曳野市 芦田 絢子

米子市 政岡日枝子

尼崎市 春城 年代

和歌山市 福井 桂香

藤井寺市 高田美代子

鳥取市 植田 一京

人恋しさくらが咲いているのです

ここだけの話は加速して走る

原稿紙のあせり鉛筆にもわかり

可能性を逃がさぬ釘が錆びてくる

美しい錯覚があり生きられる

仲人のうまい手品に君と僕

人情にふれて本音がこぼれ出す

生者必滅この世を通り抜けていく

ふわふわと頼りにならぬ羽根布団

沈丁花匂うと喋る影がある

白髪を数えたころは若かった

じつくりと五パーセントが効いてくる

雲つかむ話に乗った軽い靴

硝子拭く初夏の朝日が恋しくて

少年の志大志パン屋になるといふ

靴選ぶ時の女はシンデレラ

花遍路 友の旅路はどのあたり

大阪の舌 大阪の味を褒め

冠は嫁に譲ってから遊ぶ

信号を無視する癖が治らない

見栄張った大風呂敷が畳めない

あっちこちから電話が掛かる雨の午後

春うらら鬼もわたしも昼寝する

幸せの尺度を少し小さくする

四季のない花屋で春の彩を選ぶ

寝屋川市 籠島 恵子

松江市 佐野木みえ

米子市 石垣 花子

大阪市 稲本 凡子

西宮市 奥田みつ子

寝屋川市 平松かすみ

岡山県 矢内寿恵子

鳥取県 西原 艶子

和歌山市 山根めぐみ

大阪市 町田 達子

鳥取市 岸本 孝子

八尾市 大内 朝子

岡山県 大石あすなろ

富田林市 片岡智恵子

弘前市 佐治千加子

池田市 栗田 久子

西宮市 門谷たす子

大阪市 本間満津子

鳥取県 田村きみ子

吹田市 山本希久子

大阪市 板東 倫子

富田林市 藤田 泰子

横浜市 山下 省子

米子市 中井 ゆき

大阪市 辻川 慶子

遊びたい靴を一足持っている  
行く道に亡母が残した道しるべ  
疑問符も抱かず今日の米をとぐ  
まだ死ぬぬ次の信号待つとする  
春だから歳を忘れた色を着る  
ふる里の山父の彩母の彩  
傷が浅くてみんな気付かぬ振りをする  
かりそめの言葉はいらぬ空の青  
鈍行で辿るコースの春うらら  
許されるのを知っている猫の顔  
満開のテレビながめて飲んでます  
生活音の中で睡眠とっている  
就職にまだ銀行と言っている  
惜別の雨はしとしと胸に沁む  
肯定も否定もせずに自己顕示  
髪型を変えてジャンプの用意する  
夢の樹が心の中で芽吹きだす  
ロボットに腕をもがれて去る職場  
のんびりとすればだんだん物忘れ  
拘泥りを捨てて釣り糸またごとり  
親心いつも心配から振りに  
走らねばわたしの手火花が消える  
貴金属売場を避けるイミテーション  
クローゼットに春の訪れ入替える  
リズム変調 春の足音軽くなり

和歌山市 古久保和子  
横浜市 秋元 和可  
八尾市 宮西 弥生  
八王子市 播本 充子  
鳥取市 福田 登美  
鳥取県 さえきやえ  
米子市 白根 ふみ  
広島市 流 奈美子  
岡山県 土居ひでの  
鳥取県 岩崎みさ江  
鳥取市 森 明美  
和歌山市 玉置 当代  
西宮市 牧淵富喜子  
和歌山市 宮口 克子  
横浜市 保田 絹子  
横浜市 清水 潮華  
米子市 永井三津子  
今治市 野村 清美  
寝屋川市 坂上 高栄  
鳥取市 坂田和歌子  
唐津市 浜本 ちよ  
羽曳野市 吉川 寿美  
大阪市 津守 柳伸  
具塚市 池田寿美子  
吹田市 茂見よ志子

ふくよかな顔に正義が満ちあふれ  
体温計 日ごと吐息が増してくる  
カラオケが洗濯物を入れてはる  
傷つけたことに気づかぬバラのトゲ  
掘ごたつ仕舞かねてる菜種梅雨  
人混みで手を挙げたままそれつきり  
不器用では済まぬハンドル握らされ  
日が浅い友と思えぬ波長合う  
残光や何度卒業した恋か  
満開の花に酔うてる生きている  
空澄んで村に子供の声がない  
靴下がわずかに自己を主張する  
目があつた幼なじみと立話

鳥取県 権代 康女  
松江市 安食 友子  
寝屋川市 井上すみれ  
熊本市 永田 俊子  
枚方市 森本 節子  
川崎市 和泉見早子  
岡山県 山本 玉恵  
鳥取市 山本 益子  
和歌山市 岩本美智子  
今治市 中村 好恵  
米子市 鷺見 正子  
横浜市 後藤 早智  
米子市 青戸 田鶴

いわささんの句―何ということもない日常生活のひとコマだ  
が、するめのように噛めば噛むほど、味が出てくる句である。  
「歳をとつてからの夫婦」という言葉がある。夫がお茶を入れ  
てくれる行為に「めずらしく」と、それが自然になつたと  
き、本物の夫婦になれるのであろう。瑞枝さんの句―答えを  
注ぎこぼすの表現が巧みで、経験者として「わが意を得たり」  
の感を強くした。富湖さんの句―自分の心でありながら、快々  
にして自分で操れない場合がある。そのもどかしさ、幽痒さを  
うまく手懐けている、バランス感覚のよい作者の人柄がうかが  
える。『滅却』という難しい言葉が完全に咀嚼され消化されて  
いる。千津子さんの句―物事を先送りするための自分への言い  
訳が、ゴリ押しめいているところが面白い。

習う

坊農柳弘選



習うより慣れよと上司素っ気ない  
パソコンで師弟になった孫と祖父  
慣れるほどむずかしくなる芸の道  
残り火をかきたて習う好きな道  
生涯学習初心の墨をすつている  
生涯学習あれもこれもとみな半端  
一生が勉強だった舞扇

ミツ子 潮華 杜的 ひで 蛭 つね一 洞庵

側



つげの櫛亡母はいつでも側にいる  
狂わない時計の側で老いてゆく  
寝たきりの仏が側にいてくれる  
頑ななあなたの側にいて素直  
側にいる夫を重宝して使う  
桜満開 側のすみれに気が付かぬ  
側に居る妻が敵にも味方にも  
すぐそばに居るから数に読まれない  
何とでも岡目八目軽く言い

よしみ たず子 強一 めぐみ 和重 哲子 高夫 満秋 奈美子 帆雀 仁緑 恭昌 幸夫 愛論 次男 勝巳

パソコンを息子に習う下り坂  
フラダンス習い登るそ古希の坂  
習うより慣れろとキーを打ち続け  
ロボットのようになんでキーを打つ  
過去帳の泥 因習のとばっちり  
ワープロを習って誤字に気が付かぬ  
修身を習って行くは檜山か  
塾へ行く鞆が未来ばかり言う  
塾通い習う気のない青林檎  
盗まなきや誰も秘伝は教えない  
習わずに覚えてしまふ恋の路  
手習いが三日であいたいろは文字  
すんなりと前に見習う蟻の列  
ひらがなが女体と思ひ習って  
習うより我流に活けた壺の花  
新秘書が習う芝居の二枚舌  
お茶習い着物で女らしくする  
手習いの墨絵と余生楽しんで  
習う気になった色紙の墨の跡  
一つずつ習って積んだ八十路坂  
お料理を習って太る摘まみ食い  
耐える母習う女の返し針

岳水 美智子 奈美子 あき 政良 あずま 隆風 芳郎 和歌子 虹汀 朝子 狸村 よしみ 東雲 さち子 勇太 照子 とよ子 みつこ ツネ 周信 京子

村の因習に姑と同じく溶けている  
何習っているのかいつも金送れ  
挨拶の仕方見習うおじぎ草  
シャルルウィグダンス習い人生観変わる  
習い事終われば只の女です  
筆順を逆に習うた癖のまま  
いやいやで習うた芸が身を助け  
仮免許妻が路上に付き合わぬ  
生き甲斐を習い始めた趣味百科  
一日講座手話で優しくまた会おう  
見様見真似で祈るかたちを習つて  
習うより盗んだ芸は忘れぬ  
曲つても習うのです父母の背な  
人  
手話習い言葉の重み知りました  
地  
レッスンをしても怪しい英会話  
天  
非課税の老いが節税習つて  
軸  
花嫁修業見様見真似の母の味

大輪 しばお 一風 愛論 英子 倫子 正子 雅城 哲子 日枝子 重人 典子 保州 美代子 洋

座布団が一つあいてる私の側  
流感の側の座席は空いている  
向い側もいらいらして赤信号  
ファインブレ 相手側から湧く拍手  
側に来て山の姿を見失い  
新学期側の顔ぶれよそよし  
ビル側に住んで開けない窓一つ  
王様の側にいるのはイエスマン  
側近と呼ばれて骨が細くなる  
敵側に立つと味方が見えてくる  
敵側に回せば僕の首が飛ぶ  
うちの子はいじめる側にいるらしい  
裏側に私の本心書いてある

杜的 喬水 旋風 ミツ子 勝巳 次男 愛論 幸夫 仁緑 恭昌 幸夫 愛論 次男 勝巳

路 集

わたくしの裏側を時どき洗う  
両側にバランスとって歩いてる  
日の当る側に回った老いた夫  
内側に母をかばって散歩道  
減反の側で見おろす開拓碑  
春めくも北側の芽はのびなやみ  
温室咲きの花の側にもある不満  
都合よくミスの側から忘れていく  
どちら側ですか本音が聞きたいの  
淡水化どちら側かを決めかねる  
真実を言うと裏切る側になる  
反対の側に回ってからの修羅  
右側ばかり歩き崩れた未来像  
陽のささぬ側からのろし上ってる  
側において何かを盗むことにする

悪人の側に磔られてゆく  
子はみんな母さん側についている  
田を売って病気の父の側にいる  
手ぬかりのないよう裏側も覗く  
人間の側がいちばん恐ろしい

佳

分譲地の側に活断層がある  
高いびきの側で安心して眠る  
天

地

一服の毒は自分の側におく

軸

フィナーレの花びらを切る側になる

隆風 奴夫 伊津志 和枝 権悟 シマ子 露児 省子 あやめ 圭一郎 京子 保州 良知 あずき 日枝子

完璧な嫁に手伝うすきがない  
手伝いはいらぬ黙っていてほしい  
定年の余白を埋めるポランテア  
手伝って興味を湧いた今の職  
邪魔してるような子供のお手伝い  
不揃いのおにぎり並ぶお手伝い  
手伝って邪魔せんといと叱られる  
手伝ったあとのコーヒーうまいこと  
さりげなく手伝うひとの汗の彩  
お手伝いママの口調になる娘  
ローン返済 手伝う妻のアルバイト  
はらはらとしながら孫に手伝われ  
脱輪をさっと手伝う茶髪の子  
邪魔になる手伝い夫の台所  
のれん分けよくも此処までがんばった  
里帰り母を手伝う蓬餅  
宿題に親が助けたららしい個所  
ゴミ袋提げて出て来る朝の靴  
手伝いのつもりらしいが邪魔になり  
手伝ってあげてるつもり口を出し  
片棒を担いで罪を背負う羽目  
猫の手も借りたい過疎の田植之歌

手 伝 う

田中正坊選



ロボットの手伝いらしい父の職  
手伝いに行った帰りの千鳥足  
手伝いをさせて秘伝を盗まれる  
お役所が何もせぬからポランテア  
最後には手伝うつもり父母の愛  
手伝いに来た子へ持たす母の幸  
手伝ってほしい時には留守ばかり  
ポランテアを当てにしすぎている政治  
手伝いに手伝いがいる事務机  
手伝いに来たらしいのが邪魔をする  
八起き目の闘志へ神が味方する  
手伝いを頼まれ母は嬉しそう  
手伝ってあげたい老いに手伝われ  
たまに来る母がエプロン持ってくる  
共稼ぎ手伝いさんよありがと

倫子 あずき 政良 勝美 佳雲 哲子 克治 清美 朝子 恭昌 強一 満秋 仁緑 英子 杜的 シマ子 武史 清史 洋 高夫 さち子

佳

治癒力へ手伝いすると名医言う  
電気釜 何も手伝うことがない  
下請けにウソ手伝わす動力炉  
有難う汗に一言はしかった  
お手伝いしながら盗むプロの芸

人

農繁期 私も数に入れられる  
地

手伝いに来たふる里のうまいめし  
手伝いに来たたら仕事ですんでいた

軸

洋 鉄治 智洋子 大輪 芳郎 富美子 保州 照子 露児 岳水 美子 登美 美代子 豊

たもつ しげお 正子 多賀子 俊子 重人 重人 たず子 片上明水

# 初歩教室

題一置く

吐田公一  
ばだきんいち

「歲月人を待たず」初歩教室を担当して早や二年目。その間多くの方々からご投句を頂き、担当者として心からの感謝を申し上げると申しますのは、一つの課題に対して真摯に取り組んで居られる姿が、作句の巧拙は別として、彷彿と眼に浮ぶような句に接するだけに、私自身反省させられることが多いからである。

この一年間、本当によい勉強になりました。これを機に私も一から川柳の勉強をやり直す所存ですので、どうぞご一緒に続けて下さいますように。

なお、評では辛辣なことを書くこともありませんが、ご寛恕下さいますように。

## 添削句

○置き忘れ呆けの兆しかひどくなる ミツオ  
中七が推敲不足のよ

▽置き忘れ年々ひどくなる怖さ

○好物のビールきょうぎ置く夕餉 啓子  
品名を並べすぎると余韻がなくなる。

▽好物を並べ夫を待つ夕餉  
○野仏さん彼岸のおはぎ置きますよ ふゆ子  
置きますよとするより供えるで置く意も含む。省略した分、他の動作を詠む。

▽野仏におはぎ供えて祈る朝

○得意げに耳に手を置く村雀 忠男

○悪戯の孫に手を置く師を慰問 忠男

二句共置くには相当無理な表現だと思ふ。

原句とは趣意が大異なるが

▽村雀噂話を置いて去に

▽腕白を置いて来たよなしおらしさ

○病院に忘れた傘は置いたまま 静子

原句の場合の「忘れる」と「置く」は同義語といえる。冗句はできるだけ省く。

▽病院へ傘を忘れた雨上り

○無人駅置き傘だけが人を恋い 馬洗

着眼点はいい。ただ表現技法の問題だけ

▽置き傘が人を恋うてる無人駅

○留守をするおやつを置いて鍵を掛け 徳子

鍵っ子共稼ぎの感は否めないが

▽鍵っ子へおやつを置いて共稼ぎ

○今そこに置いた場所を探す老母 久子

具体的に探しているものを詠むこと

▽今置いたメカネ探している老母

○花一輪置いてお客を待っている とよ子  
冗長のきらいがある。省略すれば内容が充実したものとなる。

▽花一輪娘のフィアンセを待つ客間  
○距離置いてじっと観察して居る眼 義男  
「観察している眼」だけでは説明句

▽距離置いてみれば相手がよく分かり

○私腹肥え国債肥やし置き土産 公一朗

いわんとするところはよく解るが、五七五

に腹一ぱい詠み込もうと欲張り過ぎ

▽国債を次の世代へ置き土産

○横文字が私を尻目に置いて行く 登美

見付けはいい。ただ中八の部分冗句

▽横文字に置いて行かれた戦中派

○置き去りにされた内容理由に触れるとよい。 美恵子  
置き去りにされて腹立つグルメ旅

▽置き去りにされて腹立つグルメ旅

○娘が嫁ぎ手作り仔猫置いていく みやこ  
上下を入れ代えただけで川柳らしく

▽手作りの仔猫を置いて娘は嫁ぎ

○破れ傘置いて父さん逝つたきり 八重子

原句の上五が以下の句とどう関連している

のか、私には分からない。一人合点の句

▽し残した仕事を置いて父は逝き

○生きざまをなぜか置石語り出す 雄幸

▽定退の過去置き石と語り合い

○二人ずつ去って置かれた花時計 明美

上の語をもつと詰めてみるとよい。

▽恋愛を置いてきばりの花時計

○自叙伝をはたと詰って筆を置く 宗明

着想はいい。詰った内容に触れればもつとよかつたのでは

▽自叙伝に掲載迷う筆を置く

○筋書きが佳境の本を置く電話 幸枝

この場合の佳境とは当然筋書きであり、同義の弊となる。でドラマとすればテレビも想定できるし、より残念さが増すのでは

▽電話ベル佳境のドラマ置いて立つ

○食卓に瓶の桜で酒を酌む トキ

▽食卓に桜を一枝置いて飲む

○そつと置く受話器の向う計の知らせ サト子

上五の表現では感情の現わし方が弱い。

▽受話器置くどつと涙の計の知らせ

○均等法もオンブズマンを置くときよ 楽生

叙述的で川柳とは言えない。

▽オンブズマン置いて市政も締め出し

○石一つ置いて変わる庭となり 富江

どのように変わったかが重要

▽石一つ置いてわびある庭となる

○窓際にどなたの椅子が置いてある 睦子

どなたは不要

▽窓際に置かれた椅子に差す斜陽

○置き場所に眼鏡がないと妻を呼び 俊二

○ついそこに置いて眼鏡を見失い 省子

久子さんの添削句をご参考に。このような類想句が多かつた。着想はユニークに

○思い出と恥置いて来たボクの旅 つよし

この場合、恥一点に絞らなければいいのでは

▽恥いくつ置いて来たのかボクの旅

○春風が大きな土産置いていく 利徳

同じ内容だが、具体的なゴミを入れること

よつて句が生きてくる。

▽春一番大きなゴミの置き土産

○風当り肩身の狭い身の置き場 晩翠

風当りの強くなつた原因を

▽失敗に肩身の狭い身の置き場

○その話横に置いてと酌をされ 徳三

話を少し具体化してみると

▽込み入つた話置いてと酌をされ

○友たずね積る会話を置きわすれ タツエ

積る話も置き忘れるほどの因を考えて

▽なつかしき積る話も置き忘れ

○花置けば遠来の友待つばかり きん子

上五に難。置けばより置いてでは

▽テーブルの花遠来の友を待つ

○置くだけで気休めになる招き猫 絢子

単に気休めというよりそのものを詩つ。

▽気休めに招き猫置く不況風

### 佳句

置き手紙薔薇一輪を添えておく まさ

花見客宴のあとの置きみやげ 幸子

子と同じ高さに目線置いて翔ぶ 碧

間を置いてそつと差出すアラレター 正道

追伸へ本音をちらりペンを置き 道子

置いて来たつもり過去の過去が迫ってくる かずお

(過去の内容がわかればなおいいのだが)

一目も二目もおかれ淋しがり 奴夫

(男の心情をうまく吐露)

忘れたか故意か骨壺綱棚に 智洋子

(強烈だが今の世相を諷刺)

偽物と知らず刀を床の間に 日出子

(置くこと詠み込まずにうまい)

うかつにも尻尾を置いて来てしまふ 多哥由

(なかなかユーモラスな句)

置き時計余生を刻む寒い音 志華子

(一人居の老いの姿を上手に)

風上に鉢置き換える沈丁花 美子

(軽みの句で実がいい)

結納を床の間に置く春うらら 益子

(慶びを素直に。下五がいい)

花ぐもり肩に置かれた掌が温かい アキ

(さりげない愛の表現。上五がいい)

### 私の句

低気圧文字に溢れる置き手紙

# 葉先生の思い出

## 八尾のたいじん

### 高杉 鬼遊

昭和四十六年二月七日、西尾葉邸で「菜の花句会」が発足した。出席者は、藤井二三、谷垣史好、飯田一治、荒木鶴翠、古川鶴声、菊沢小松園、加藤河産、吉居奈々、河内天笑、香川酔々、野坂つき子、浜田儀一、極高薫風、阿部柳太の各氏と、西尾葉会長と私の十六名だった。他に傍島静馬氏の投句参加が記録にある。この日は、葉先生にとって大きな喜びの日だったと思う。それまで阪大川柳会、川柳雑誌、不朽洞会等への全身的な関わりがあったものの、自立した川柳磁場としての句会を持たれたのはこれが始めてだった。

本社句会の掃りだった。タクシーの中で私に「八尾に句会がない」と嘆いておられた。「八尾になくても京阪神には夜店のように毎日何処かで句会があり勉強するのに困りませ

ん。初心者対象を目的にするなら別ですが」と私の無下な返事へ「それで行こう。それがいい」と、川柳塔八尾支部「菜の花」の名称まで国道二十五号線の車中で決定した。

八尾木村の村長さんだった義父の田圃で、田植えを手伝っておられた葉先生へ、通りがかった村の人が「未生流ですか」と、やゆされた昔の話をさりげなく言われたことがある。そんなことが大人（たいじん）の先生にできなくて結構である。「菜の花」の会員だった内海幸生氏の志があつて高野山に「川柳塔」が建立できたのは葉先生の人徳の賜である。

## 達人

### 河内 天笑

私が川柳塔社の同人にしていただいて間もない昭和四十四年二月、復活した大萬川柳の大会が松崎町の割京大萬で催されました。この日の司会役が葉先生でユーモアたっぷりと

会を盛り上げられた技もさることながら、その夜の宴席では小松園さんとの辛辣なやりとりに打たれました。まわりをひやりとさせる程のパフォーマンスも見事で、深い信頼で結ばれた友情の形を見せていただきました。

昭和四十三年六月を最後に本社句会は自安寺から天性寺へ、そして翌年一月から天王寺の以和貴荘へと移りました。句会の掃りはいつも近鉄南側のK.Y.K. トンカツで一杯飲む常連に葉先生もよくつき合っていました。

会計をとり仕切って居られた鬼遊さんに大枚を手渡され、われわれは半端分を割り勘で払うただけで酒を飲んだことを思い出します。

「お嬢ちゃん熱いお茶頂戴」と葉先生。すると四十五、六のお嬢ちゃんが「こりとお茶を運んでくれます。」

松江で会のあつた日の宴席で色紙を所望された先生は筆のちよん先をつまんでさらさらさら。その旨さと格好よきにも惚れぼれさせられました。「お嬢ちゃん」も「筆のちよん先」も達人西尾葉先生から黙って真似をさせて貰って居りますが、盗めないのはあの温顔と笑顔です。

たとえたと私達に愛を下さつた葉先生ありがとうございました。

「しあわせなまるむし」の三月六日、啓蟄の日は葉先生の日になっています。

# 路郎賞 候補作品中間発表

川柳塔賞

平成九年一月号〜四月号

板尾 岳人

路郎賞候補作品

田中 正坊

吉岡 美房

小島 蘭 幸

美田 旋風  
堤 くに子

形状記憶 拗ねてた妻がすぐ戻る

川上 富湖  
木本 朱夏  
高須賀金太  
野坂 なみ  
榎山 隆盛  
林 荒介

マルクスにおぼれた頃の安い酒  
たましいの峠があつて灯をともす  
枯葉踏むしやりしやり骨の音がする

吉田あずき

新世紀につなぐ三年日記買う  
金髪に染めてみたとして蒙古斑  
孫二十いまだ男の顔でない  
逆転はもうない坂にさしかかる  
冬の雨まずしき人ら駅へ急ぐ  
指先が痛くなるまで天津甘栗食う  
元旦晴れ誰にともなく有り難う

春城武庫坊  
新家 完司  
榎本 路児  
高橋 岳水  
田中 薫  
桑原道夫  
麻生アート

眼帯がとれてまぶしい妻に逢う  
ダイエット グラムで瘦せてキロで増え  
古き良き時代優しく貧しかり  
今日の顔映して「よし」と靴を履く  
だんだんと三時のお茶が濃ゆくなり  
水溜り跳んで夢から覚めました  
似合うよと貴方が言った靴も老い  
決め付ける人差し指という凶器  
法善寺こんな処に昼の月  
ふり向いて欲しくて母を困らせる  
一度きりの人生だからノーと言う  
鍵穴を覗きやつぱり留守らしい  
孫の名で嫁から届くチョコレート  
生かされてまだまだ恥をかかずもり  
美田 旋風  
井齋一齋  
前たもつ  
宮西弥生  
石川侃流洞  
伊藤藤美  
木村あきら  
山門 幸夫

種を蒔く我が背の形思いつつ  
闇の深き女測りに行つたまま  
手遅れになつてしまつた長い舌  
高瀬 霜石  
山太鼓 小太鼓鳴つて返す乱  
林 荒介  
山茶花の赤へ嫉妬をくり返す  
砂噺んでひと遠くなるあざり汁  
田中 薫  
ひたすらに生きて見つけた冬虫  
伊藤 寿美  
悲しみの日付がたまる冬の天  
高橋 岳水  
若菜摘む手へ淡雪と君の面  
島 ひかる  
生涯を愛しつづけた母の白  
山本 花匠  
わたしにも冬が来ました仏さま  
横田 英詩  
しっぽだけしつかり出した自己主張  
宮尾みのり  
疑問符をいつも抱かせるスリガラス  
大石あすなろ

小池 しげお

菊日和 飽くことのない米の飯  
春城 年代  
ポケットに忘れたままの清め塩  
氏林 洋敏  
秋が来るたびに買った目鼻  
池 森子  
電線や冬をぼろんと奏でんか  
桑原 道夫  
遺書にしてあれこれ指図してやろう  
林 荒介  
川上 大輪

建前と本音シーソーして困る 堀端 三男  
万歳の手の伸びる時伸びぬ時 海老池 洋  
それだけで倅せだつたお茶の味 松本 文子  
一・一七 わたしの命日だつたかも

妻の茶碗が女を主張したよ 榎本 落児  
逃げ腰の私に当たる雪つぶて 福岡 雅楓  
寝たきりの母と大きな字で話す 江口 度  
薄氷の上で踊っているいのち 木本 朱夏  
恋ひと文字を書く極細の筆よ 山本希久子

### 河内天笑

出来ること何にもなくて百度石 山本 半銭  
ひとり旅走らなくてもいいだろう 山本義子  
マイカーを磨いて牛の顔忘れ 乾 隆風  
生かされてまだまだ恥をかくつもり 木村あきら

隣から焼き松茸が攻めてくる 米田 恭昌  
遺言にしてあれこれ指図してやろう 林 荒介

散る紅葉残る紅葉の美しさ 山門 タミ  
除夜の鐘まだ降参はしていない 鈴木 公弘  
食い溜めの代りをさせる冷蔵庫 相馬 一花  
年金をもらうと命おしくなり 藤田頂留子  
目移りを許してくれる花の店 大河未佐子  
占いは夫の居ない夜にする 坂田和歌子  
ネクタイの要らぬ職場で太りだす 橋本多哥由

少しぐらい埃立つのが頼もしい 榎本 落児

### 川柳塔賞候補作品

#### 川島 諷云児

灯台の父は黙って子を照らす 今若あき子  
伸び縮みする良心を持ち合す 田辺 鹿太  
病院に預けっぱなしの余命表 森 茂美  
飲まず馬鹿 飲む馬鹿がいて終電車

箸を割る森の嘆きを聞きながら 岸本 宏章  
ペースメーカー入れて電池で生きている 奥田 明  
みきわきみ

軽々しく言えぬ愛とや生きるとや 長浜 澄子  
兵隊の気楽さ前を向いたまま 高野 不二

陽の射さぬところではぐれる影法師 村上久美子  
親展に息の乱れが入れている都会 古谷 みさを  
犯人が隣に住んでいる都会 佐々木森哉

冬景色の隅に凍ったままの僕 中井 正秀  
北枕何ごともなく二十年 三浦 強一  
神さまの気紛れもある縁結び 流 奈美子  
自問している間に遮断機が下りる

#### 福本英子

出る杭の頭ときどきなでておく 村上ミツ子  
俺に似た子なのになんな妻につく 尾宮弘治

頂点の男難聴かも知れぬ 大谷幸次郎  
母さんが生きてるわたし死ねませぬ 川島 良子

泳げないから散骨は富士の裾 宮村ちよ路  
人脈の果てに疲れた鳩がいる 原 みさを  
良くまわる独楽は静かに立っている 菊地 政勝

四捨五入 四捨の涙を買い戻す 一本 勇太  
本音いつ出すか女の小引出し 藤井 春子  
やっこ風 本音は高所恐怖症 田辺 鹿太

うしろ手に妻が持つてる不発弾 村上久美子  
現金で買う値ではない0の数 高野 不二  
消費税すくマンネリ化する財布 尾田 綾子

言い負けておこつ今夜は眠りたい 湊 修水

#### 榎本吐来

大法螺を提げて一升ビンが来る 山内 芳江  
三食はひとり暮らしの句読点 明渡トヨ子  
ビー玉もメンコも知らぬアスファルト 安宅美代子

大の字を実家の畳に書いてくる 岡田 幸生  
仲のよい夫婦で通すバスツアー 篠原いつぶみ  
ままごとで離婚される男の子 木村 親路

ゆつくりと答弁スジを曲げながら 徳山みつこ  
託児所を併設したらバチンコ屋 仲井 素水  
正月の酒へ片目を瞑る医師 荒井 広和

リストラの首が浮いている露天風呂 森安夢之助

皆勤の通院かせて欠席に  
 経済大國 重油柄杓で掬い上げ  
 葉飲むためにごはんを三度食べ  
 先生の口調がかわる参観日  
 偏差値が世間知らずの子を育て  
 和田 和風

小山 林 由多香

頂点の男難聴かも知れぬ  
 目立たない妻の力に支えられ  
 生かされて生きて歩いた靴の減り  
 二度の職 息子に頼む保証人  
 父さんがしょんぼり見える休肝日  
 伊藤 尚子  
 杉山 精子  
 丹下 智洋子

亡きあとも亡妻の時計が止まらない  
 安野 案山子

まぐれでも糸が通ってほっとする  
 ましい顔で寝棺の同い歳  
 ねじ巻けば少しは戻る老いの坂  
 口きかぬ日もあり夫婦こんなもの  
 形見着て今日は一日母といる  
 雑巾をきつくしぼって気を晴らす  
 山本 正光  
 円増 純子  
 福岡 博利  
 八木 芳水  
 早川 盛夫  
 増田 扶美

鬼の目に涙限界かも知れぬ  
 反省をすれば優しい風に逢う  
 有沢 せつ子  
 芦田 絢子  
 藤井 春子

宮口 笛生

面白そうな男だ揺すってみてやろう  
 哀しみの受け皿となる母の膝  
 藤田 芳郎  
 田辺 鹿太

さよふならを言うとき哀しい風が吹く

真つすぐに歩いて白を通し抜く  
 門灯が消えて嫌な予感する  
 子の名前も忘れて老母が逝く  
 もっと不幸な世間話で慰める  
 終の地と決めて柿の木植えておく  
 藤原 一平  
 八木 芳水  
 大西 文次  
 岸本 宏章  
 尾宮 弘治

犯人が隣に住んでいる都会  
 電線へひと休みする昼の月  
 手加減をせねば沸騰してしまふ  
 一寸先の闇のことなど考える  
 情念の川に積もらぬ雪が舞う  
 後始末ばかり気になる苦勞性  
 飽食に言いぶんがあるパンの耳  
 佐野 木みえ  
 古谷 ひろ子  
 伊藤 ふみ  
 山中 康子  
 吉村 さち子  
 杉山 精子  
 村上 剛治  
 原 みさを

番傘本社水府忌(33回忌)句会

とき 8月6日(水)午後6時  
 ところ 弁天町「三井アーバンホテル」  
 宿題・選者(各題2句・席題なし)

「脱ぐ」 今川 乱魚選  
 「捨てる」 細川 聖夜選  
 「一番」 外山あきら選  
 「良い」 加藤 翠谷選  
 「言う」 橘高 薫風選  
 「父」 磯野いさむ選

会費 500円 締切 午後7時

大阪川柳の会

とき 6月3日(火)午後5時開場  
 ところ サンケイビル本館322号室  
 題と選者 せめて玉利三重子△真つ先  
 〓西口いわゑ△止まる〓久保田元紀  
 △本物〓磯野いさむ(各題2句)  
 会費 500円 締切 午後6時

群像の「江原とみお」について

東野大八先生の練達の筆による「川柳の群像」は毎号興味深く拝読させていただいていますが、とりわけ四月号の「江原とみお」はお世話になった大先輩であっただけに感慨深いものがありました。ただ、ひとつだけ気になる箇所がありましたので申し添えます。

私の追悼文を引用していただいた文章で「そしてとみおさんは、そのスナックの百メートル先の用水路に入って死亡していた」と記述されていますが、私の原文は「転落して」であります。「入って」となるも本人の意志で入った、というニュアンスも含まれますので誤解なきようお願い申し上げます。

新家完司

# 本社 五月句会

五月七日(水)午後五時半

メンズフアツションセンター

一気に初夏の熱気に包まれ、会場のクーラーの効き目も弱いほどの宵、五月句会は九十二名の参加により定刻開催された。

はじめに中田たつお氏から、四月二十日の句集発刊記念句会の御礼が述べられた。

次いで五月三日亡くなった同人犬野武太氏へ一分間の黙祷を捧げる。

お話は定年後の余暇をボランティア活動に活かしている前たもつ氏。地元の方から、奉仕時間を預託して、自身や家族の老後に備える相互扶助の会W.A.Cの支部があることを知り入会、昨年かから実働開始。日頃自宅庭で餅をふるっている経験を生かし、手入れする人のいない屋敷の草取り、根おしの作業をして、さわやかな汗を流している体験談を日焼けした顔をほころばせながら語る。家事などの援助サービスもあり、ふるさとの親に「プレゼントすることもできると言う。ボランティア活動をやってみようという人、求めている

人に何かの参考になればと結ぶ。

初出席は枚方市の寺川弘一さん。

月間賞は吉岡美房さん(藤井寺市)に輝く。

(司会―隆盛)(記名―月子・弥生)

(受付―しげお・たす子・房子)

## 席題「動く」

久保田半蔵門選

大阪よガンバレ五輪動きだす

新幹線ゆつくり富士が見られぬ

通学路ランドセルだけ動いてる

タンポポの綿毛が動く日の岬

小錦のもろい動きにある人気

動きたい日もあるだろう仁王様

タクシーに乗ったら電車動きだす

講演会前の頭がよく動く

代打の代打動く監督賭けに出る

本籍を動かぬ祖母の佝び住い

ライバルの動きいちはん気にかかる

人事異動動き回ってとばされる

透析の血かいらいのちが動きだす

一円の安さへ主婦たちまだ動く

身動きをすればするほど蟻地獄

太極拳空気が掴んでよく動く

運動が特効薬と言う主治医

胎動へこわこわ男手で擦る

動かない時計と暮す五月病

大ものが動くとき真実が消える

胎教のモーツァルトに動いた児

脳死でも心臓はまだ動いている

風動く茶摘み唄から夏になる

世の中がどう動くこうとマイペース

タイガーウッズ動くキャラード引きつれて

よく動く男でまたも呼び出され

動く動く大きな腹を突き出され

電動の猿 人間を笑ってる

動くもの皆あとを追う初生雛

住民を無視してブルドーザー動く

よく動く一つ年上だけの妻

草の根が怒って山を動かした

自己不信手の鳴る方へすぐ動く

黒幕が動くとき霧が深くなる

風動く風と少年走り出す

酒が入ると父の時計が動き出す

風が動いてふとわたくしを取り戻す

産み月の赤子手で蹴り足で蹴り

冷静で無駄には動かない象だ

天

首を突つこむとすぐに反応する風よ

動き出すときD51に夢託す

軸

兼題「腰」

三代ののれん守った低い腰

腰痛をなだめすかして生きている

平成は腰に電話をぶら下げる

立ち上がった人類腰痛は宿命だ

腰軽い父で便利に使われる

どっこいしょと言わぬと腰が上がらない

希久子

風云児

桂 香

鬼 遊

三 男

いわゑ

柳宏子

萬 的

しげお

射月芳

楓 楽

楓 楽

一 風

鹿 太

たす子

笛 生

美代子

美代子

半蔵門

兼題「腰」

安藤 寿美子 選

強 一

吉太郎

たもつ

三 男

昭 子

保 州

保 州

ぎっくり腰わるい予感ほこれだった  
盆踊りまでに腰痛癒さねば

英士子  
義子

足腰は弱いが口は達者です  
反撃へ腰のかまへは出来ている

義子

足腰が痛む生きている証だ  
腰袋吊れば大工の顔になる

義子

いかなごを煮る日は母の腰がのび  
腰痛の友に教わるのがたとある

義子

ふらついた腰けたのはお母さん  
修羅一つ二つ越えて来た強い腰

義子

心配はさせない妻の腰まわり  
逃げ腰の男に投げける変化球

義子

丸腰と見せて秘策を持つ余裕  
腰くだけあとは言ひ訳ばかりする

義子

鋤鍬で鍛えた腰にあるねばり  
雨風にも腰折れせずに耐えた葦

義子

腰おろすたびに煙草の火をつける  
及び腰でゆくから犬に吠えられる

義子

腰掛けのつもりではない女子社員  
還暦を過ぎ妻の腰重くなり

義子

腰叩く癖を孫からいたわられ  
中腰になって後ろの顔立てる

義子

夫唱婦随どちらも腰がいたみ出し  
セールスに頑張る妻の二枚腰

義子

ねばり腰妻のリモコンきいている  
腰だけは低いがなにも出来ぬ人

義子

腰を伸ばして二十一世紀待っている

義子

佳

腰据えて上げ潮を待つ父の船  
腰据えて飲めば人間見えてくる

洋  
金太

足腰の元気のうちは黙っている  
腰据えて見詰めています新世紀

洋  
たもつ

魂胆があるから今日の低い腰  
腰ひくく低くし風をやり過す

洋  
みつ子

腰ひくく低くし風をやり過す  
モノリザの笑みは腰痛かもしれぬ

洋  
楓

蓮如忌へ老女の腰はみな丸し  
天

洋  
冬葉

物腰の品良さについだまされる  
兼題「ピカピカ」 玉置重人選

洋  
あやめ

ピカピカの靴が段々重くなる  
定年の朝へ夫の靴磨く

洋  
幸生

試歩の杖ピカピカひかるうれしい日  
お姑さんにとてもかなわぬ艶ぶきん

洋  
朝子

ピカピカのキッチン宅配ピザを食べ  
贖物の方がピカピカしています

洋  
英子

君ひとりピカピカ反対論を吐く  
ピカピカの心でかかると初仕事

洋  
寿美子

プレゼント夜店の指輪よく光る  
メッキはメッキ光失う日の悲哀

洋  
大輪

ピカピカの包丁妻の馬印  
ピカピカのママの手を引くランドセル

洋  
文秋

ピカピカの長靴市長のポラントエア  
兼題「ピカピカ」 玉置重人選

洋  
鬼遊

ピカピカの靴も光らせる  
ピカピカの廊下へ嫁が恐くなる

洋  
丹吉

行くあてはないけど靴は磨いとく  
ピカピカと貴方の胸から来る電波

洋  
文秋

ピカピカの妻よれよれの僕を連れ  
エッセイを書くペン先を光らせる

洋  
典子

鍋はピカピカ食事はいつも外です  
ピカピカに磨いて妻の不発弾

洋  
天笑

ピカピカの百歳はまだ働く気  
ピカピカの顔が噂を斬り捨てる

洋  
正坊

ピカピカの過去を引きずるのは愚か  
ピカピカに爪ひからせて人嫌い

洋  
武庫坊

ピカピカの鏡正直過ぎないか  
熟年の右脳をピカピカに磨く

洋  
鹿太

顔にだけ自信ピカピカさせてます  
ライバルの光がまぶしくて困る

洋  
路見

ピカピカに磨くしこり消えるまで  
長生きの道ピカピカに磨かれる

洋  
富湖

星ピカリうかつにハイと返事する  
ふたたびの命ピカピカたがり出す

洋  
森子

醜男ですが心はいつもピカピカ  
水を得たカッパの皿のぴっかぴか

洋  
花梢

二十一世紀の絵をピカピカに描いておく  
ピカピカの顔で息子の午前さま

洋  
たもつ

ピカピカで居たくて吃水線守る  
雷鳴の中を一番機が還る

洋  
希久子

人

よう様く妻でピカピカ光ってる

天笑

地

ピカピカの男に距離をとっている

恵子

天

ピカピカのママの乳房が光ってる

美智子

軸

エレジーに情感こめる2カラット

重人

兼題「誘う」

小池しげお選

暮参り誘ったあとが高かった

幸生

花の香に誘われしばし無我になる

花梢

花の香に誘われ曲がる散歩道

正子

おばちゃんは誘ってくれぬ戎橋

鬼遊

カラオケに音痴も一人連れて行く

弘一

誘ったがはつきり断られました

金太

誘ってくれないうと心配するおんな

幹斉

美しい文字の誘いへ乗ってみる

英子

飲みにゆく誘い万障繰り合わず

三男

月影に誘い込まれた軽い罪

正雄

誘われた森で心も洗われる

正雄

幸せが続き悪魔に誘われる

楓楽

人間の知恵が哀しい誘蛾灯

典子

指定券二枚企みある誘い

度

千金の春宵 誘い待っている

美房

四次元の世界に誘う大ジョッキ

いわゑ

楽に儲かる話を持って来た悪魔

文秋

悪友の誘い合図はきめてある

稚代

電話機を磨いて誘い待っている

シマ子

ラベンターの香りが誘う北の旅  
風船に誘われおんな空を翔ぶ  
真つ先に誘ってくれる奴がいる

弥生  
鬼遊  
隆盛

お茶だけですまぬ誘いと知っている

寿美

一枚の絵に誘われて無人駅

弥生

神様の誘いは何時も向い風

美代子

泣き虫のボクが誘うと雨になる

鹿太

誘う友妻が一番嫌う人

悟郎

誘われるうちが華だといつてゆく

保子

誘惑に負けた自分が許せない

諷云児

耳よりの話が誘う落し穴

たず子

誘い水母さんの声天の声

グン吉

左遷地へ着くなりのみ屋に誘われる

萬的

誘い水 母にみーんな打ちあける

朝子

葉桜に誘い待ってる娘鏡

稚代

薄情な男が誘う通り抜け

高栄

出世した奴から誘いかからない

隆盛

ただ酒をのむ宴会に誘われる

笛生

ハンサムに誘われてついワラフラと

シマ子

佳

上へ上へと誘うてつべんのカラス

森子

整形をしたら誘われなくなった

希久子

誘われた飲み屋は僕も知っている

紫香

武士の情けで新婚は誘わない

重人

誘いには乗らないお父さんの靴

恭昌

軸

ひと口はとつても甘い誘い水

しげお

兼題「まさか」

高杉鬼遊選

預金利子まさかこんなにあいとは

一閑

反旗振る先頭妻だとは不覚

強一

奥さまと同じコロンにする不倫

正子

大学の出てタコ焼屋しています

美代子

そのまさかですと妻から乱反射

恵子

突然死遺言状が間に合わず

森子

まさかまさか保険会社もあぶないね  
序盤からまさか奥の手使うとは  
まさかとは思いが精密検査受け  
救急車僕のまさかが乗せられる  
尖閣島へおりてしまったそのまさか  
ご馳走をするというのに信じない  
あらとまさか連続しとく立ち話  
盆栽を賞めたらもっていけと言う  
焼香へ知らぬ女が泣いている  
たまごつちまさかまさかの類似品  
神様がまさかと思つ謀りごと  
葬式はせんでもええと言つてある  
まさかまさかあれよあれよという政治  
ガン保険役に立つ日が来るなんて  
腰かけのつもりで添うてくれていた  
わたくしがまさか痴漢に遭うなんて  
まさかとは思つが誘いかけてみる  
胃カメラのまさかをコーヒーに溶かす  
沖繩はまさかアメリカ領ですか  
石鹼でまさかの首を洗つてる  
まさかあの子がお金返しに来るなんて  
巣の中のまさかの卵抱かされる  
親もびっくり女になっている息子

満州  
悟郎  
笛生  
路児  
幹斉  
千歩  
義子  
大輪  
柳弘  
金太  
美房  
楓楽  
天笑  
英子  
月子  
美智子  
楽生  
しげお  
シマ子  
洋  
雅文

阪神にまさかポバイのほうれん草  
まさかとは思ふが妻の靴がない  
棺の中から僕を呼んでる声がある  
まさかとは思ふが妻が戻らない  
死んでやると喧嘩の度に妻が言う  
東大の話隣がしているぞ

佳

地震雷まさかを忘れ生きている  
ダンスシューズまさか母のと思えない  
初出社ガラスの靴を履いてくる  
コンビニで空気が買う日が来るまさか  
僕のクローンは僕が茶碗で食べている

人

動燃のまさかに慣れてくるこわざ  
非常袋まさかを詰めて吊つてある

地

大丈夫やろかわたしの保険金

天

援助交際夫婦でそれはおかしそ

軸

兼題「協力」

橘高薫風選

駅前に花を咲かせるボランティア  
私にも協力出来る消費税  
協力費と言つわいろがあることを  
目に見えぬルールがあったボランティア  
姑さんも協力するわ残り物  
冠婚葬祭 村は総出のお手伝い  
協力の凱歌が上がる 三国沖

桂香 鹿太 武庫坊 紫香 保州 重人 恵子 信子 鹿太 朝子 たつお 楓楽 隆盛 金太 鬼遊

そつと手を貸す踏み切りの白い杖  
頃合いのほどよく母の助け舟  
妻を見るヘルパーさんの手を借りて  
協力を意識しないで家族の手  
二人してラマーズ法の汗をかく  
献血も協力出来ず貰うだけ  
へそくりが協力をした頭金  
協力せぬがうしろに夫いてくれる  
協力をするから尻に敷かれぬ  
協力へ男はっかり産んでおく  
風はみどり力合わせているりレー  
あんな虫こんな鳥いて森は生き  
協力の後は知らない赤い羽根  
動燃が力合わせる事故隠し  
ただ座るこれで協力してるらし  
口にせずとも妻のお蔭と思えます  
協力が無理なら邪魔はせぬように  
協力はしないが口は出すつもり  
協力はさせてもらおうと言葉だけ  
禁煙協力和灰皿のある事務所  
協力を惜しまぬ握手柔らかい  
脳死論とても協力でできません  
補助席で妻が協力してくれる  
メモ通り家事を分け合う若夫婦  
別姓で暮し協力惜しまない  
協力をするほど深い仲らしい  
協力は惜しませんと逃げられる  
よく言えば協力悪く言えば邪魔  
浮草へ水深くして水が澄む

楓云児 英壬子 ますみ 信子 たつお ますみ 楓楽 希久子 典子 しみお みつ子 義子 英子 靖巳 哲夫 たず子 房子 鹿太 金太 文秋 紫香 正坊 英壬子 佳秋 高栄 狸村 重人 美代子 岳人

佳

他人様に協力ばかりする夫  
協力をされて手抜きがバレている  
協力へ茶碗の割れる音がする  
鯉轆風は協力惜しまない  
協力をしたとは妻も思わない  
白漢子 富湖 しいお

人

協力の井飯を食べておく  
協力の度合が読めぬ美女の顔  
狸村 美房

地

協力はしますが彼の処世術  
山下美津留、中田純次両氏のご遺族か  
ら供養として金一封を拝受しました。  
（清記―希久子）  
薰風

天

金でする協力金で叛かれる  
美房

第52回 尼崎市文芸祭

川柳 雑詠1人1句  
選者 黒川紫香・田淵定人・萩原金之助  
春城武庫坊・森田栄一  
締切 6月9日(月) 未発表作品に限る  
所定葉書または官製葉書で左記へ  
660 尼崎市東七松町1丁目23-1  
尼崎市国際文化室「文芸祭」係



毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

寝たきりへ優しい嘘を言うてくる  
 飽食に溺れて医者薬漬け  
 娘の成長雛に託して祝う宵  
 紙雛が胸の薄さを泣いている  
 正直に言えば波風立つ同居  
 五パーセント民の煙も細くなり  
 秒針が少し気になるフルムーン  
 一生を晴着で過ごす内裏ビナ  
 ミニ雛を飾ると童女になる私  
 これからは未だ百歳と欲を出す  
 眠ってたヤル気手をだし足も出ず  
 車間距離開けていたなら割り込まれ  
 スポラして余生楽しむ趣味一つ  
 恋人が出来るた気配の娘の仕草  
 秘め事も気配でわかる母の勘  
 暗闇で人の気配を感じとる  
 可愛さが気配にある若いママ  
 子と私同じ片側チビた靴  
 夕月夜人の気配で立ち止まる

文仙 正雪 放任 坊太郎 マツエ あきら 治 吟笑 かおり 輝夫 よしみ 治延 フミ ひかり くみに なみ子 チカエ はつ恵 いさむ

岸和田川柳会

田中

文時報

やき芋をホックリ二つに割る至福  
 やきいもで話が弾むいろり端  
 やきいも屋夜学の窓へ来て止まり  
 へんくつなおやじのいもがよく売れる  
 ゲテ物を出され勇気を試される  
 喫煙を注意するにもいる勇気  
 勇気ある人は平常温和しい  
 二次災害中止くたすにいる勇気  
 値切ってる妻の勇気に逃げる僕  
 用事だと言ってやんわりことわられ  
 玄関の見事な花に用事あと  
 もの忘れ二つの用事は二度に分け  
 妻旅行女の用事多過ぎる  
 久し振り用事作って会いにゆく  
 来客に決まって聞かす児の自慢  
 資産家のケチが出ているお茶の色  
 大型店来客奪う駐車場  
 アポなしの客へ居留守がそっけない  
 美辞麗句火種残して去んだ客  
 来客へかぶり直している仮面  
 猫だけがどうも来客好きらしい  
 お前百わしや九十九という理想  
 定年で時間に余裕あるくらし  
 他人から見れば理想の老夫婦  
 五十年理想に遠い暮しぶり  
 酔うほどにだんだん高くなる理想  
 理想には遠いが金婚までつづき

苑子 甚一 さよ子 一弥 文時 穰一 盛之 けい子 辰郎 松風 鹿太郎 呂万 東雲 ひで 朝一 敏光 一齋 蛙城 浪速子 金太 ダン吉 洋 孝三 路基 弘象 萬的

結局は理想に遠い家が建ち  
 理想には遠いが僕には過ぎた嫁  
 幸せを理想に生きている私

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

弟に寺を継がせて俺は医者  
 断崖に立たねば決断出来ぬ性  
 断りの手紙の届く寒もどり  
 決断の裏に悲しい物語  
 家族愛断ち悲しみの亡命者  
 わが糧へ大事に包むいい話  
 消費税3パーセントの大礼包  
 断ってひとりくらしの悦に入る

川柳岩出

児島与呂志報

合格に蕾が開く音がする  
 分別を欠いた一言波紋呼ぶ  
 少年の羽ばたく音を信じよう  
 わたくしの心につばみ育ててる  
 呼び合える距離でいるから安堵する  
 騒音も実感となり今生きる  
 純情なつばみでいたい女紋  
 わたしは蕾隣一輪あにきです  
 心地よい音の響きに昼寝する  
 マナ板のリズムで妻は朝の指揮  
 カラオケに内緒話も音に消え  
 呼び出しの節に浪速の春乗せて  
 車の音しなはずだよ日曜日  
 時折に母を呼んでる夢を見る

白光子 柳宏子 狸村 清芳 喜美子 能子 欣史子 香住 田実子 あずき シマ子 和子 智恵子 綾子 千鶴子 春子 正直 保子 悦男 ふみえ 良一 哲雄 正義 重徳 英子

呼びかけの募金小さな愛を積む  
いつまでも昔のままの恋ごころ  
木の芽時うっかりすると育ち過ぎ

南大阪川柳会

寺井 東雲報

憂さ溜めて溜めてさざえになる私  
妻のバートで少し潤う膳の上  
詰め襟の上着希望を抱いた頃  
上役が僕に泣かされてるらしい  
開発のニュースが怖い森の憂さ  
裏付けは相手もちゃんとしていた  
金バッジつけた上衣は脱がず居る  
阪神が負けてメガホン投げて居る  
日本の未来を憂う本が売れ  
そばに居るだけで潤う妻の笑み  
心の憂さ捨てる所を探す旅  
上役のお呼び引越し手伝いに  
若ぶって上着を着ずに風邪ひいた  
潤いの記事探してる虫眼鏡  
三寒四温上着を持って着た花見  
還暦の赤い上着が照れている  
うたた寝の孫へ上衣をそっとかけ  
裏取れた部署乾杯の準備する  
無礼講のはず上役に叱られる  
正直な水に潤いのど仏  
裏付けを妻がきっちり掴んでる  
玄関で上着の花粉よく払い  
ストレスか上役今日は低気圧  
就職の祝い奮発する上衣

愛子 精子 与呂志

久峰 頂留子 東雲 悟郎 正博 恒明 柳伸 柳的 志華子 庸佑 度 哲郎 秋子 朝子 文秋 直子 柳宏子 千里 重人 グン吉 信治 寿美 章久

銀幕に潤い残り錦之介  
上役の祝儀二次会盛り上がる  
思いやりあるから潤う我が家計  
しあわせは銚子一本夜の膳  
上役も上役なりにある悩み  
上役へ妻がいちばん気をつかい

ふくべ川柳会

橋本多哥由報

死に近い頑固の帯をほどこうか  
窓際にいても正論崩すまい  
節分に会う約束の雪おんな  
子を産まぬ頑固は離婚したかった  
節分に餓鬼大将が泣いている  
淡々と勝者おごりの顔見せぬ  
節分を過ぎたほんとの春よこい  
野良猫が時間を決めてやって来る  
節分に撒いた豆が芽が吹いた  
トップの座守る喜劇もくりかえす  
くり返し消化不良の恋ばかり  
天国の門まで行って締め出され  
おはアさんと言われてハイといえるかい  
どうしても家から出ない鬼がいる  
門を出たとたん嫌いな顔と会う  
いい子感門出に春の風が舞う

川柳東大阪

森下

愛論報

たもつ 三男 三重子 信博 勝美 千梢 和歌子 洋々 きみ子 螢 睦子 孝男 正和 一夫 輪多朗 忠良 美恵子 春恵 寛子 昭恵 信子 多哥由

釣り針の油断みつめて居る魚  
自立した女すっかり大地踏む  
しつかりと明日を夢見る地平線  
少年の地図はしつかり天を指す  
会費分しつかり飲んだ二日酔い  
負けんぞと声掛け合っている背伸び  
名門の悩み次男を背伸びさす  
背伸びした会話へ舌がもつれ出す  
少年の背伸びが重い非行歴  
強気のハトが手をつつく本願寺  
かんできて煮る黒豆は祖母の味  
雪しんしん昨日の愚痴を包み込み  
雪原の彼方人恋う窓明かり  
樹の精がジツと耐えてる白い森  
燃え尽きた命忘れて雪ざんげ

佳句地十選 (5月号から)

山本玉恵

ふところの鏡に納める裏の顔  
決心しては如何と茶をつがれ  
面影へ真つすぐ切手貼っておく  
あたたかい記憶子が居た母がいた  
陰陽の程良い位置で身をゆだね  
運命に背き一途に漕いだ舟  
北海道の雪は天使の涙かも  
満点の人でないから好きになる  
行く先をなくした豆が床を這う  
いろいろと昔が浮かぶ母の背な

シマ子 朝子 真柳 湖風 柳伸 頂留子 信紀 元治 雅文 樂正 恭昌 柳宏子 弘直 ばっは 愛論

大原川柳社

矢内寿恵子報

毛糸玉転び妙案湧いて出る  
妙案を授けてほしい神頼み  
妙案も長所短所の板ばさみ  
妙案にふと見えてきた向こう岸  
待望のオープン悲願の夢をのせ  
妙案の策がからんだ蟻地獄  
末席の妙案静かに動き出す  
幕洗う明日の妙案亡父に聞く  
妙案を提げた自信の顔が寄り  
妙案は母の言葉の中にある  
妙案はやつぱり父の胸の内  
妙案におんぶに抱っこしてもらう  
妙案を授かり急場救われる  
遺産分け妙案も出ず夜が白む  
愛別離苦抱いて妙案刻を待つ  
オープンへお祝い持つて馳せ参じ  
飲み足りぬらしい妙案まだ出ない  
妙案は二世帯住宅住む安堵  
オープンの目玉で客を誘い込む  
妙案は孫のひとりが継ぐ家業  
オープンにしてから女不眠症  
母さんがたまに妙案出してくれ  
妙案を煮つめるお茶が冷えてくる

岩美川柳会

羽津川公乃報

お父さんその考えが甘いのよ  
ばあちゃん孫に甘いと叱られる

みづえ さちこ あやこ やすこ すみえ 玉恵 辰江 悦子 妻子 たけよ 喜美子 正己 巴子 敏子 朝代 みさえ 美佐子 たづ子 ひでの 和子 あすなろ 寿恵子

蟹郎 信子

立派だとブランをほめて左遷させ  
負け方が立派でしたと褒められる  
思い思いに立派なダンスして老いる  
立派な人を見るとクスクス笑い出す  
立派な髭を生やしてドギツイ話する  
生きてきた瘤だ立派なあかしかも  
黒粋に立派なひげが貼つてある  
立派だと言われてよそ見など出来ぬ  
師と仰ぐ立派な人が手を汚す  
ボス猿の向こう傷なら立派です  
立派な嫁に敬語使つて耐えている  
立派だなまだ食いしばる歯があつて  
墓石を越える立派な草が生え  
立派な字書いて無心の手紙来る

高槻川柳サークル卯の花

川島颯云児報

打ち消せば逆に大きくなる噂  
逆風に強い女の自己主張  
逆らえば逆らうほどに好きになる  
お粗末な答えにオンブズマン吠える  
動燃の粗末な管理あはかれる  
あの頃は粗末ではない芋の蔓  
お粗末な扱いチップが惜しくなる  
政治家の顔をマンガで知りました  
負けたとてあたふたするな亡父の声  
宝くじ当ればあたふたするだろう  
あたふたと逃げて行くから怪しまれ  
あたふたと来れば面会謝絶中  
吐きが総理の耳へ届かない

節男 孝男 多哥由 一夫 単車 きみ子 睦子 希久代 忠良 公乃 美恵子 和歌子 大漁 女 芳子 一笛 かおり 石舟 稲子 秀夫 重人 吉太郎 とし子 よ志子 紫香 艶子

つくり話聞きつつ人殺す吐き  
吐きの中に本音がふと洩れる  
スコップで春のつぶやき掘り起こす  
さようなら吐くように日が沈む  
草萌えて春に吐く絵の具皿  
あと戻り出来ぬ蝸牛の吐き  
診察券お前も値上げするんかい  
利子倍につられ虎の子行つたきり  
血圧が少し上がったためすみ酒  
安らぎが欲しくて降りる無人駅  
何よりの敵は油断と引き締める  
勇退の首を安値で売りにゆく  
手拍子も歩幅も合わぬ家族です  
言い訳をしながら心売り渡す  
手を洗うように心も洗えたら  
親の愛知らぬ虚ろなクローン猿  
人生は双六早い雲おそい雲

竹原川柳会

時広

赤ちゃん笑顔ボカボカ春が来る  
車の下猫の親子がかくれんぼ  
真っ白になるまで汗を流さんか  
猫温いこたつ代りでびぎの上  
縁側で日向ぼっここの親子猫  
妻よりも猫があるじを出迎える  
愛猫に言えても妻に言えぬこと  
伝統を継いだ荷飾り目を見張り  
波ももう春を感じている音だ  
花粉症に少し嬉しい花ぐもり

一路報 高史子 中千枝 蘭幸 喜久恵 八重美 静枝 汎美 比呂子 淑子 白澤子 薰 仲子 比呂志 静江 惠美子 大輔 東雲 マツエ 英一 庸佑 あきら 克治 ルイ子 杜的 柳宏子 しげお

朽ちかけた梅の古木に芽がひとつ  
春を呼ぶ心に芽吹く露のとう

房子  
喜美子

孫達も芽ばえる春のフアッション  
孫も高校新芽が出たよ春だもの

夏規  
夏喜代

木々の芽も天仰いでる夢見るか  
木の芽和え匂の味には適わない

千年  
清水枝

新芽から本葉に変わるうれしい日  
芽が出たよ本葉と孫が呼びにくる

節夫  
笹舟

春一番なんばでも吹んた柳の芽  
春そこに芽接ぎナイフを研いでいる

青居  
蝸牛

白酒にみんなが弾む童歌  
母逝って白いエプロン夢に出る

幸子  
一枝

真っ白い和紙にかすかな色がある  
雲流るあなたの好きな白を着る

栄恵  
静佳

父の汗軍手は白に戻らない  
煮ごごりの皿の白さは母だろっ

笑子  
一路

風白し笛も太鼓もない踊り

### 三幸川柳教室

三宅

保州報

らくらくと儲けた金の軽いこと  
付き合ってみれば楽しいへそ曲がり

敏子  
めぐみ

戦前に会える楽しみ古本屋  
極楽もよいがこの世はもつとよい

親路  
正匍

楽に勝つ味を覚えて転び出す  
チケツトが二枚うふふの春の夢

嘉平  
朱夏

夫唱婦随夫の色に染めました  
藍染めのドロに私の人生譜

美智子  
満洲子

手のひらに染みた忍の字まだ消えぬ

初子

染み抜いた紋にこだわる武家屋敷  
染め斑はわが人生の疵の跡

孝子  
三千子

猜疑心雪の白さを黒く染め  
大根の白さ染まらぬ主義通す

秀男  
和子

しきたりを染め変えていく核家族  
せんひでさんと呼ばれ振り仮名打っておく

碧  
千秀

達筆の仮名を少々持て余す  
ひらがなしか書けぬ私に重い辞書

正一  
かず子

胸中を仮名に託し筆の跡  
外来語医者名のカルテが騒がしい

当代  
桂香

梅の香を夢の国まで持ってゆく  
梅が枝に愛をしつかり結んでる

美子  
昭枝

脇役の紫蘇がきわめる梅の艶  
菅公のいわれを知っている古梅

さち子  
保州

梅干に先人の知恵生きており  
やんわりと奮い立たせる朝の梅

和代  
貞子

凜と咲く梅に姿勢を正される  
魔線の駅に律義な梅ひらく

みね  
鉄治

梅の香を野暮なたこやき邪魔をする  
分校の快拳へ梅もほころびる

章子  
町子

### 川柳大阪

坊農

柳弘報

奇麗だね君の瞳を見ていると  
今もお若さの風で飛んでいます

信圭  
須賀夫

コギヤル達奇麗に眉を書いています  
スマイルは疲れ私もセピア色

多香  
叭笑

スマイルは平和戦士の武器となる  
スマイルの裏に隠した悪企み

河南子  
しげお

口答え背丈も母を越えた孫

スマイルが迎えて文句言いそびれ  
基地返上スマイル戻る地元民

雅果  
喜楽

笑いじわ増えさす孫の春を待つ  
そのスマイルが私の心を悩ませる

良花  
青道

恐ろしやゲーム機子供育ててる  
直球をさけて妻へは山ボール

隆司  
醉舟

奇麗とは言えないけれど魅力的  
モナリザが夫婦げんかの壁にあり

美心  
鉄心

無印できれいに歩いた靴を脱ぐ  
奇麗です童女となった母の顔

美すゞ  
柳昌

震度四なのにモナリザ微笑ってる  
鶴橋のにおい客呼ぶ高架下

まつお  
かよこ

沖繩が怒る政府の弱い腰  
朝を出る靴に仕事の唄を踏む

本蔭棒  
洛醉

美術館を出るスマイルに春の風  
山盛りのおまけきのうの残り物

一步  
比呂志

貧乏の中でサンマが香ばしい  
核ゼロになって地球が香ばしい

希久志  
グン吉

ほほえめばほほえみ返す地藏さん  
指切りの指がきれいな嘘をつく

金太  
笑風

自惚れて鏡に暗示かけられる  
姿見にわたしたち奇麗と聞いてみる

重人  
柳弘

### ほたる川柳同好会

井上

直次報

ポケットに無理偏入れた不発弾  
元の体型戻すのが無理古着ふえ

ただし  
馬洗

少し無理してでも着たい色がある  
子供等のずばりが隣から文句

キヨ子  
明光

デートの金足らぬとずばり母に言う  
ずばりもの言うて男は孤独です  
ストレスにずばりお金が効くという  
子報ずばり桜も雨もあたらず  
ずばりとは言わぬが花の社交術  
ずばり言う勇氣がなくなつてお茶っ腹  
ずばり聞く私と姑とどっち取る  
仏壇に名案ずばり聞いてみる  
細いけど家計支える妻の腕  
生き甲斐をパチンコ玉が支えてる  
震災後妻と支えて立ち上がり  
四季の花ひとり暮しを支えてる  
初出社胸躍らせて切符買う  
嘲笑を買つてもバツジにしがみつ  
私を買いくるまで売らないで  
お花見の帰り箱買うている

眞郎 吉太郎 直次 正三郎 久しろう まみ子 博史 万之助 竹二 桂子 正安 祥風 英子 敞子  
川柳塔唐津支部 久保 正剣報

川柳ささやま

酒井 靖子報

袋帯女の命まるる如  
音沙汰もなくてひよっこり笑顔見せ  
美しく老いたし春のリズム音  
うっとりで見守る孫の初歩み  
音沙汰のない子の幸を信じきり  
福寿草咲いて周りが動き出す  
じわじわと押し寄せる古い音もなく  
財布には音のするよな金ばかり  
裏書きをしたばっかりに苦汁飲む  
手足みな動いて今日の幸がある  
裏話こっそり聞いた床の壺  
迷っている神を動かす絵馬の数  
揺れ動く絆をつなぐ遺言書  
義理チョコもなく夫の忌がめぐる  
一滴の油で動く父の貨車  
うっとりとい児が安らいている乳房  
十人を育てた部屋に音が消え  
母の鞭裏には温みたとある  
城北川柳会 吐田 公一報  
純子 恵美 芳乃 美智子 多美子 末野 一繁 すす子 八重子 素水 とみ子 つや子 ヒサ子 和子 富美 可住 靖子

コンバクト覗き彼待つ花時計  
親ひとり子ひとり嫁が決まらない  
あなたとのプランこっそり楽しもう  
被災地に残した桜に春めぐる  
一人居る母をねぎらうプラン立て  
雨風に耐え風化する石仏  
ほっこりと心の隅に母がいる  
備前焼壺に心を遊ばせる  
仲人が覗いて笑顔持ち帰る  
診断書遊び過ぎとは書いてなし  
還暦が米寿の親に叱られる  
退院のベッドに欲の熱が出る  
目の中に入れた子供が目に余り  
試されているとも知らぬ紙風船  
泣き砂も水仙も咲く黒い海  
剣幕の荒さへ一歩退いて観る  
老春のデートベンチの陽が温い  
親の打つ釘は急所に突き刺さる  
春のプラン隣のポストもあふれる  
七味少々プランに入れて練り直す  
母さんが覗くと父も覗き出す  
かぞえ唄十から先は子にゆずる  
震度七地獄覗いた神戸っ子

八重 あやめ 寿美子 あい子 久留美 満津子 朝子 典子 だし 扇帆 倫子 とし子 秀夫 睦子 誠一 達子 一枝 白峰 千歩 昭子 和歌子 静子 公一

妻の背にしがみついてく濡れ落ち葉  
霊園へ将棋の駒に似て並び  
借りところ日がさすまでは党の傘  
白魚は大きな口に吸い込まれ  
詐欺師から上前はねる金バツジ  
滝水を柄杓に受けるこれも滝  
玉手箱開けぬ中から友が消え  
そっくりの孫のしぐさを皆笑い  
クローン猿ヒト科に迫つて来る不気味  
旅日記一字写経を復習し  
どの顔も曲学阿世の永田町

公一朗 久仁於 弘 圭 高明 あき 虹汀 實 勝視 四郎 正剣

当らない宝くじまた買つてくる  
鬼は外異国の豆で鬼を追い  
寒餅を掲ぐ音もなし旧正月  
再建のプランは鬼になる人事  
一言で親は泣いたり笑ったり  
杉花粉散歩のままならぬ日々  
一言でえにし広がる出湯宿  
公一報

川柳クラブわたの花 吉村 一風報  
大切に作るからという空手形  
告白できれいな花が咲くことも  
大切な家族全員飛行中  
余命いくばく今日という日を大切に

剛治 ミツ子 道子 君江

大切にしてます脚をあの世界まで  
祈られて神も仏に頼いごと  
油断も隙も大の字に寝る里帰り  
うちの犬餌は比べず食べてはる  
里便り桜も咲いた母達者

大切な宝わたしの笑顔です  
大切な残り時間が騒ぎ出す  
大になりれんげ畳に空ぶとん  
大切にしてます母の桐簾笥  
大切にしてます母の笑顔を  
大切にな一円玉とありました  
大切な妻ほど雑に扱われ  
彼の背にスキと何度も指で書く  
嫁姑思いおもしろい午後のお茶  
ふたりっ子供べられない時ほしい  
犬と僕大切なのはどっちやねん  
残生のレールなかなかな決らない  
野心なき老いにも一つある祈り  
生命がけ告白した日遠くなり  
じいちゃんと呼ぶ孫からの黒電話  
ブラモデルねじ一本へ子が騒ぎ

わかあゆ川柳会  
松本はるみ報

鴉でも新年祝う声で鳴き  
新調の服がお出掛け待ち侘びる  
耳鳴りを何時でもどこでも連れてゆく  
新しい畳の上で拗ねる猫  
新しい生命が呱呱の声をあげ  
ダンボール母の思い出捨てられぬ

春子 幸枝 一風 隆盛 友甫 朝子 ますみ トシエ まさと 明子 けいこ いつみ 春江 知佐子 美代子 民子 明 八寿子 宏 鬼遊

ほとばしが冷めたらあれは何だっけ  
ほとばしが冷めたら飯面は脱ぎすてる  
新雪を踏んで八十歳確かめる  
新家庭やがておむつがひるがえる

溝口川柳会  
小西 雄々報

小春日に雀の学校よく歌う  
餌を蒔き雀と話してかえり  
よく喋けたすずめが今に喋りそつ  
良く喚る雀近所にして困る  
知恵袋あげて雀と競い合う  
豊穰を雀が先に試食する  
啓蟄で雀も餌にありついた  
庭の木へ雀ストレス吐きに來た  
しあわせの雀踊りを忘れない  
待ちきれず春の帽子を雀買う

川柳ねやがわ  
江口 度報

名物の塩辛買いに途中下車  
嫁姑どちらも辛いから揉める  
時々はからい味付けして同居  
塩辛が僕のどん底知っている  
大勢の仲間が好きなたメタカ達  
お互いに過去には触れず飲み仲間  
妥協点さがしあぐねて仲間割れ  
良いときだけの仲間やないと手をかきね  
よく切れる男で仲間からははずれ  
要求は貴男の心欲しだけ  
要求はメザシ一匹父の酒

聖子 博利 清泉 白汀 弘子 鈴枝 康女 静江 久子 正光 信敬 豊枝 智恵子 雄々 勇太郎 一途 良知 高栄 光子 吉之助 頂留子 小路 小ルイ子 仁清

手土産に何か要求かくれてる  
春の花いっぱいほしい仏様  
臍出して歩く青春だつてある  
年金の額で青春しています  
七色の風に夢見た青春譜  
青春逃げて男ひとりの庭繁る  
火の匂いする青春を危ながる  
ページから落ちた四つ葉の青春譜  
原色ばかりとく青春の絵の具皿  
だまし絵の中を青春かぬける  
青春へ巻き戻したい人生を  
先ず妻を讃えて祝う金婚式  
灰皿があふれてやつと腹決まる  
シナリオをもたぬわたしもはる風も  
おいしそうに妻食へるから手がのびる  
孫抱いて花の喧嘩を遠く見る  
東西線の下見というて北新地  
行間に溢れる母の愛を汲む  
囲いなどするから雑草生い茂る

八尾市民川柳会  
宮崎シマ子報

伏す老母へ安らか祈る春の冷え  
筆の先祈る心が文字に出る  
お祈りの声が聞えるミレーの絵  
灯を上げて旅先の無事祈る母  
祈ることばかりで満ちる母の海  
野仏にたんばば供えランドセル  
手がかりを見つけたメモはきつとある  
メモ一枚切り札に持つ裏の裏

黎之助 かつみ とし子 冬葉 朝子 静江 時弘 洋女 惠子 文秋 波留吉 博泉 一風 英壬子 たもつ 庸佑 度

たもつ 東雲 三男 頂留子 夕花 春子 柳伸 信博

お喋りなメモですっかり妻にばれ手違いのメモで一日踊らされ反省のメモを小出しにする枕一枚のメモが時効に待ったかけ咲きさら雨に流れる花いかだ更地の跡にボツンと桜咲いている落花紛々吉野哀史を語りつぐ点滴を供に花見の車椅子

さくらにも酒をこぼしてやる花見南から春を作って行く桜のほほんと休日に飲む茶がうまい信心の母は茶断ちをして耐える歳月のなかで泣くお茶笑うお茶吊り橋を渡りいたたく茶の情けほうじ茶の香り路地から店は夏油断した報いがウエストに溜まる

球場の隅に油断が置いてある今にして思えば少し気のゆるみ亀の勝つ話信じて油断する体重計石へみぎへとよる油断油断かも味方の弾丸を背なに受け

**川柳塔きやらばく**

流し雑河口の汚れ見せてしまっ  
原産地の表示見ながら買うことに  
駆け足の一年神輿また拝む  
縁に這う小虫が春を出迎える  
多くなるにこり絵に立ち向かう母  
海原の重油に鳥がいとおいしい

**政岡日枝子報**

柳宏子 一風  
とみをとみを  
八寿子 泰  
萬的 シマ子  
朝子 朝子  
いつふみ 賢子  
雅文 欣之  
英一 隆盛  
剛治 美幸

喉仏動いているのが男だらう  
味噌汁の匂いみんなが起きてくる  
お大事にその一言で元気づく  
太い根で梢は天と向き合った  
半世紀つげも石の思を抱く  
さびしくて動きまわっている私  
脇役で終る痛みがいとおしい  
ころ傾きいつも男を困らせる  
矢印が森の途中で消えていた  
目覚めれば昨日と同じ脈が打つ  
気負わずに女あるじの紙兜  
空き缶といっしょに拾う宇宙塵  
夕ぐれる口約束はもう出来ぬ  
萌えだした春の力を授かった  
捨てきれぬ少年の日の青い曇

**川柳塔まつえ吟社** 恒松 叮紅報

痛いとこ突かれ本音が横をむく  
横道へそれて話が弾み出す  
母親が横に居るらし電話口  
横縞の君の浴衣を忘れない  
横文字がふえてとまどうマークット  
横着なしぐさ真似する孫の知恵  
ゆっくり撫でられゆっくり叱られる  
指撫でてきのうの愛を確かめる  
価値観のわからぬ壺を撫でている  
人形を撫でれば炎抱いていた  
明日ねらう仮面を撫でている女  
裏口に猫撫で声が覗いている

花子 弘子  
天雀 晶子  
ゆき 田鶴  
ふみ 亜弥  
千春 千春  
美世 千代  
寿々子 玲子  
荒介 荒介  
義良 与根一  
茂美 清子  
静枝 アキエ  
主詩朗 早苗  
日出处 蚤  
芳枝 米子

マジックで咲かせるばらは刺がない  
掛軸の牡丹も咲いて春の床  
すみれ咲く道だ自転車ゆるく漕ぐ  
咲くのものも足踏みしる菜種梅雨  
咲く日あり散る日もあつて時は行く  
今ひとつ咲かぬ桜に世の不安  
美しく老いる心の刺を抜く  
醜も美も若さがカバーしてくる  
終章の美学を憶う花吹雪  
何も彼も美しく見える嬉しい日  
美観地区やはり他人の町にいる  
美しい姿で魚をねらう鷺  
無駄口も女のストレス解消法  
無駄口も世渡り上手の秘訣です  
雨やどりつい無駄口で日が暮れた  
無駄口をたたき合つてるチューリップ  
無駄口の座る座布団見当らぬ  
勝ちそうになると無駄口出る将棋

**西宮北口川柳会** 龜岡 哲子報

ボランティア 花びら色の汗が散る  
散りざわが大事と肩を叩かれる  
散る時は悔いなく打とう句読点  
病室の窓閉めました散るサクラ  
有情無情さくらは知らず散り急ぐ  
舞いませず散るさくら花雨しとど  
友の計の寒さのままの花曇り  
インスタントカレーに拗ねる銀の匙  
わたくしの命あなたの匙加減

友子 房子  
きみ子 邦代  
登美子 知恵子  
桂子 桂子  
きみえ 多賀子  
鶴丸 鶴丸  
太泡 太泡  
午朗 午朗  
ひふみ ひふみ  
静江 静江  
れいじ れいじ  
叮紅 叮紅

さじ投げた子も持つている思いやり  
木の匙のぬく味野心は捨てました  
言い出せぬ言葉うながす銀の匙  
滅塩滅糖一匙毎に愛も盛る  
砂糖つばにひと匙分の嘘がある  
銀の匙に私の命預けてる

手続きが面倒だから取下げ  
手続きをすると手続きいる役所  
手続きは電話一本ノンバンク  
税払う手続きなんとややこしい  
非常時に必ず持つて出る袋  
別れしな必ず小指をからませる  
男の料理少しかやくが多過ぎる  
砂時計ゆっくり生きてゆくつもり  
法善寺話しかけたい女性と合う  
ギックリ腰あんなも齡ねと妻笑う  
中途半端な老後結構面白い  
捨てようとも誰も言わぬ亡母の杖

サークル標榜

小林

一夫報

狸々の切り絵にされて山恋し  
偽りの朱盃の影にある悲劇  
二十一世紀も自転車こいでいるだろう  
屋上に耳解き放つ午後のコーヒー  
春愁がいちどに晴れる子の帰国  
切れぎれの記憶紡いでいる日向  
特急通過 ひとり静かに待つている  
おぼろ夜に纏むものなし花匂う

雅子  
智恵子  
希久子  
薫  
正坊  
房子  
みつ子  
あずき

欲しいものないというのは淋しかり  
動くもの動かし冬を振り落とす

川柳塔わかやま吟社

宮口

克子報

結論は世間の風に触れてから  
子を庇う形に母は老いていく  
別姓や耐えた女の一揆かも  
葉桜をバックに摩崖仏映える  
葉桜もつとめ果した自負がある  
葉桜に老いのしるべを教えられ  
葉桜になつても一度デートする  
葉桜が笑いとばした無駄話  
出しゃばつて世間の角にけつまずく  
世間から見放されても妻がいる  
生きざまを世間の風に暖かれる  
ボランテア世間の風を暖める  
風の私語掴み世間を狭くする  
片方の耳は世間へおいてある  
世間体だけで譲れぬ意地がある  
その先は白紙の地図を子に渡す  
飢餓の子を思えばたかがダイエツト  
子離れをして文芸の道に出る  
子育てに一番育つたのは我  
翔べぬ鶴折つて家出の母を待つ  
子沢山苦勞の皺にある笑顔  
子の秘密母に呑み込む度量あり  
子に残す境界線を見せておく  
酸性雨にも耐えて居ります鬼瓦  
母さんが一番重い荷を背負つ

楓 楽  
千代  
精子  
さち子  
富湖  
鉄治  
呑天  
富美子  
紀久子  
美羽  
利治  
良  
重治  
大輪  
めぐみ  
輝子  
英子  
射月芳  
保州  
豊太  
泰子  
寿子  
美子  
誠子  
稚代  
萬的  
愿

二人なら耐えて行けます一間でも  
貧乏に耐えてた癖がなおらない  
試験にも耐えて揺るがぬ芯柱  
淋しさに耐えた鍵つ子よく眠り  
ライバルとしての巢立ちを娘に願う

川柳高知

川竹 松風報

忘れたい酒思ひ出す酒となり  
おとなしい児が先生に忘れられ  
仲直り過去を忘れた訳でない  
忘却とボケの違いを考える  
人妻の熱い視線は忘れよう  
フルムーン誘うポスター湯の煙  
編み棒を持つては心が風いでくる  
鈍行で行く人生を摸索する  
酒のせい年のせいだと物忘れ  
酒忘れ友去り春の孤を愛でる  
友二人追憶つれて初散歩  
見舞客みな口々に酒にふれ  
病人の見舞いへ嘘の二重丸  
ゲラゲラと笑つて暗さ追い払い  
忍従の日々は忘れたことにする  
生きるため逃げ生きるため追いかける  
追いかけて母が渡した裸銭

川柳塔打吹

米田 幸子報

袴姿と角かくしから始まった  
春浅く小川のメダカ目がさめる  
どじよつことあそびし川も今はなし

正博  
和重  
高夫  
三枝子  
克子  
功  
快風  
ただし  
孝雄  
佳風  
春枝  
菊野  
有佳  
千恵子  
幸泉  
竹萌  
朱坊  
子龍  
和子  
幸  
圭風  
松風  
一京  
御前  
克枝

羅生門三船演技に息を呑む  
門を出て七人の敵未だ見えぬ  
袴地の仙台平を知ってるか  
裏門で見事な花が揺れている  
弔辞聞きながら笑いを噛み殺す  
赤トンボ大きな声で笑いたし  
門はないが脱税だけはしていない  
センターで一次関門テストする  
春一番肉体の門吹き抜ける  
地獄の門はまだまだ叩く気になれぬ  
種糶を浸すのにちようどよい小川  
袴はき身をひきしめて的を射る  
花婿ではいた袴がまだ残り  
公邸にいつ春がくる固い門  
先は見えた四十曲りが関門だ  
あの門に消えた女はどこの方  
三下り半それから女よく笑う  
門前払いしたら裏からもぐり込む

川柳塔みちのく

小寺

花雀報

宗光 富枝 (小)康子 和枝 明美 しみ子 かつみ 石花菜 季芳 螢 松盛 弘朗 康子 玲子 睦子 節子 幸子

通夜の酒笑い上戸を連れ帰る  
呑み助もコップの裏で人を見る  
愛妻の機嫌うるわし回し酒  
上戸下戸あつてカラオケ盛り上がる  
揺すつて下さい真つ赤な愛がこぼれます  
白無垢にどんなドラマが待つものやら  
古傷の呵責に疼く白い闇  
地獄からの脅迫状は白いまま  
中立であった男の落し穴  
輝きはほんの少しの火花火で  
まっ白な面布一枚を子に残す  
花終えて風に頼らぬ紅椿  
白桃を剥けば真夏の風になる

翠洋会

柴田英壬子報

凡々子 柳々 只男 準人 ばかり しげる 花匠 ツネ 北歩 銀波 岳水 花峯 五葉庵 会美 真砂 志華子 光子 東雲 みつ子 佳秋 周信 義 蛙 蕉子 恭昌 正坊 宣司

いつの日の安楽椅子か子だくさん  
振り出しに戻り男の譜を探す  
表札は5人家族のまま暮す  
一人居に表札だけがする同居  
美容院椅子が女にもどらせる  
降板の投手ベンチの固い椅子  
ふたつ並んだ椅子の意見が食い違つた  
たてまえで往つたり来たりする襦紗  
ロッキングチェアでわるい夢を見る  
表札の裏にしつかりものの妻  
たてまえの愛かげろうに揺れている  
大臣の椅子は魅力があるらしい  
過疎の村表札残し屋根が落ち  
帳尻を合わすとたてまえゆらぎだす  
ものぐさはテレビリモコン重宝し

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

絹子 石舟 千歩 綾子 照子 正雄 希久子 澄子 鬼遊 さと美 英壬子 靖巳 叔子 喜美子 千枝子 善人の言葉の裏に白と黒  
白地図に足袋の足跡二度の旅  
表だけ白無垢を着て嫁に行く  
言葉尻つかまれ過去を告白す  
白黒をつけてギクシヤク夫婦仲  
白無垢に覆われている過去数多  
条件にとらめつこする家探し  
ほめ言葉探すに困る抽象画  
和解する糸口裁判所で探し  
潮干狩足の裏にも探させる  
縄文のロマンを探す考古学  
来ぬ人を探しに出かけ探される

杯に天下を落かしぐいと呑み  
上戸仲間と語り明かした国訛り  
泣き笑い女将上戸を使い分け  
ヴァージンロードでわが蝶を解き放つ  
子の失意落下地点に母がいる  
神様が忘れていった絵馬がある  
景氣よい話が弾む上戸の輪  
男性が生唾を飲む脱ぎ上戸  
はしこした上戸のしゅんとなる朝

龍人 アサ 哲郎 黙人 井蛙 生恵子 一花 順三

席をとりあけて待つ椅子気がひける  
手作りの椅子居間にあり木の温み  
赴任から帰る日待つ父の椅子  
復興の街表札も新しく  
一筋と言つてはいるが浮気性  
春愁の椅子ひっそりと動かない  
たてまえの笑顔にいつも騙される  
たてまえの通りシャンシャン総会屋  
表札が家を守ってくれている  
八起き目の表札太い筆でかく  
沈丁花表札通りの主居る  
恥じらいを忘れひたすら守る椅子  
気がつけば私の椅子が消えていた  
表札は別姓だけど夫婦です

会美 真砂 志華子 光子 東雲 みつ子 佳秋 周信 義 蛙 蕉子 恭昌 正坊 宣司

ふみ 芳江 羊子 見早子 のぶ子 絹子 良子 愛生 潮華 雅子 広和 亜希子

肉親も孤兒も探して年をとる  
探し物古い写真にはかどらず  
雑踏で自分を探している詩人  
親探し戦後終らぬ大地の子  
物売りの日本語みやげ多くなる  
毒舌が新たな敵をまた作り  
おはようが真綿のよた湯につかる  
方言の耳ざわりよし湯にわかる  
商談になると出てくる関西弁  
世界ツアー日本語だけで用をたし  
古里の父の訛りに和まされ  
一言が足りずにいつも損してる  
手話出来て社会の役に一つ立ち  
花言葉解せぬ鈍な人が好き  
ほめ言葉抱いてスキップして戻り  
胸元の白さへ酒を追加する

京都塔の会 (前月分) 松川

顔ぶれが揃いお鍋が煮えてくる  
顔ぶれは元氣印のでかい声  
顔ぶれが何時も揃っている平和  
顔ぶれをみてから料理追加する  
新党の顔ぶれもう騙されはしない  
カウンター私の好きなタイプの娘  
進学へ父の鋳型を好き嫌いの  
型抜きで押し入れ個性を見失う  
信用を築いた父の丸い背な  
面影は全くないが手を握る  
面影へ供えた酒が減っている

トヨ子 和可 よし一 徳三 純子 サト子 笑子 明玄 あらた 天々 早智 政勝 達也 ちよ路 道子 満秋

杜的報

美穂 女子 葉子 正芽 飛鳥 石舟 英子 白溪子 しげお

老いた庭師の面影浮ぶ庭の石  
ほろ苦い面影ばかり過去ばかり  
面影を絵にする淡い彩を溶く  
冷や酒を呷り面影消してます  
憎いはずの面影がまだ胸に棲む  
面影も私の傷も消えかかる  
似顔絵にすると面影見えて来る  
O型の妻にとられる主導権  
血液型妻にせず結ぶ赤い糸  
型通り蒔いても背丈違う苗  
再流行亡母の型紙生きて来る  
型通り生きて傘寿の風に逢う  
一本の心で築くマイホーム  
島人の情けで築く流人墓地  
道なき道へわが構築の海図はためく  
実力で不動の地位を築き上げ  
新築はしたが駅から遠いとこ  
面影が赤いポストと夕暮れる  
土筆萌えて人の面影あたたかい

京都塔の会

松川

身の程を知って近づく君との歩  
子定日が近づく名前まだ迷い  
近づくと五条大橋下駄の音  
両乳房女の旗のようにある  
乳はなれずばなれ出来ず愚痴ばかり  
満腹の顔で母の乳房もてあそぶ  
牛乳がコトンと朝を連れてくる  
栄養源脱脂粉乳だった頃

萬的 磯 百合子 圭坊 楓云児 寿美子 福子 英一 波留吉 ただし 三男 杜的 欣之 武庫坊 京子 庸佑 紫香 友熙 年代 百合子 求芽 友熙 豊次 栄 英一 福子

杜的報

乳牛に春を奏でるモーツァルト  
競り市の前夜乳牛動かない  
沸点を過ぎればただの雑魚だった  
この家の躰をケーキ見てしま  
お行儀でお里が知れる人の群  
行儀良い男がなぜかものたらぬ  
受付の行儀で分かる杜の空  
行儀よいとは思えないバイクの娘  
大根を切るよに過去を切り捨てる  
気配りが過ぎて居心地悪い席  
子供より親に行儀を教えねば  
行儀よく並ぶことから保育園  
子の行儀親の躰が囁かれ  
この家の行儀を知ったつまみ食い  
思い切ってお捨てた亡夫の古い靴  
ぼちぼちと出好きの足も弾み出す  
空瓶に花さし春を待っている  
春のきざしの確かな音よふきのとう  
盆石のここ築山という砂の色  
かたくなな心がとける雨の音  
洗濯によい日は花粉も飛びたがり  
ひと足ひと足と春が近づいてくる

静江 岳人 京子 女子 圭坊 波留吉 白溪子 吉之助 諷云児 巨詩 庸佑 飛鳥 笑女 達子 武庫坊 杜的 静子 美穂 水客

いずも川柳会

園山多賀子報

小回りが利くからバイク止められぬ  
最後までバイクで句座に燃え尽きる  
自分史を未完のままにバイク逝く  
ふと亡父かと思うバイクが通り過ぎ  
蓮の座バイクは娑婆に置いたまま

まこと 水煙 桂子 寿美 多賀子

般若経唱え追憶する合掌

追憶へ昨日も今日も春の雨

人情を小皿に盛って両隣

人情を束ねてくれた花屋さん

人情が届く勝手の笑い声

人情に触れてそのまま根を下ろす

隠れんば太陽の子はもう泣かぬ

太陽と今日も握手が出来るぞうだ

太陽と働く鉄に嘘はない

あくせくと太陽系の中で生き

陽が沈むもう後悔はしていない

太陽を避けて女の曲り角

太陽が弱いわたしを強くする

太陽と共に男がする仕事

料金は同じ灰皿ない電車

半分を灰皿に捨て聞き上手

ちっげきな窓にもやってくる太陽

満一歳これがわたしの太陽だ

クリスタル灰皿にさす夏の花

バイクでももう物足らぬ反抗期

面影も遺物も一つに袖だたみ

追憶の中でいきいきおばあさん

追憶は七十七の暮れの暮れ

川柳塔おとり

上田

俊路報

計画が固まらなくて流れそう

計画は厄年すんでからにする

計画の異論山まで漕ぎ上げる

子作りが親の都合に合わされる

明朗

満江

清子

久代

房子

一葉

叮紅

きみえ

鳳笙

ちかし

青湖

芙佐子

蘭水

鶴裕

丸枝

芳枝

れいじ

文子

茂子

茂美

太泡

陽子

草丘

崇

千秋

登美

孝子

計画はいつも立派に立ててある

しあわせの計画倒れおどろかぬ

煩惱を捨てて計画立て直す

計画の出来ぬ不幸が戸をたたく

葬はいらぬ散骨してもらおう

子のケンカ出るにやらねず落ち着けず

その時期が来れば芽が出る花が咲く

ねぎ坊主みんな負けん気首のばす

核心を突かれて本音出してしま

切り札が出ると風向き変りだす

磨鉢になっても唄の月は出る

先生のくせを生徒はあだ名つけ

若いくせ年寄りじみた仕草する

知らぬ間にくせが出て顔赤くなり

くせのある髪まで彼にほめられる

嫁姑たがいにくせを知っている

手を合わすくせは母から教えられ

負けくせがつきトンネルを抜けれぬ

メンバーのくせを見抜いている司会

倉吉川柳会

谷口 次男報

猿をみていて愉快になって猿の真似

頂上は愉快な嗽吹くところ

誰はばかり愉快に騒ぐ花の下

人の輪にとけて愉快な小半日

愉快だんだけど明日は二日酔

母さんがとても優しい愉快な日

本心をだまし愉快な輪に染まる

惚けたかな愉快な話ばかりする

真一

艶子

道子

風花

みさを

伝住

和子

佳子

宏章

銀嶺

俊路

小生

敬之介

清子

幸次郎

多哥由

野草

野草

由多香

舍人

一合の酒で愉快になるわたし

愉快さを抑えた洗い顔が来る

先生は愉快悩みは奥にしま

子はいつも愉快な顔をもっている

余命表愉快な記事で埋め尽くす

年とって愉快の感度にぶくなる

はちやめちやな仲間が集う愉快な日

愉快だな天狗の鼻がへし折れた

外面は愉快苦虫噛むおなか

はびきの市民川柳会

菅田 絢子報

散骨の海はきれいなところがよい

土の香がする恋歌に惹かれます

思いきりジャンプをさせる夢を見る

春風に乗って花粉と消費税

雛壇の前で我が家のシンデレラ

岬まで逃げて来たのに風が追っ

貸し借りのない友達で長続き

借金を軸に回っている家計

借り傘を買う羽目となる梯子酒

借りた日の微笑忘れていたらしい

うすうすはこうなる事と知っていた

うすうすと洩れていました機密です

行く先がうすうすわかる弾みよう

病床でうすうす知った癌告知

うすうすは知ってる顔が聞き上手

そっぴいば年賀の文字が乱れたた

うすうすは気付いてました水の音

姑のミスを狙っているわたし

御前

柳生

小生

智子

幸子

ちよ子

節子

次男

和枝

重人

専平

悦子

和風

猿杏

一壺

吐来

たけし

扶美代

利武

敏

りつえ

四三郎

みつこ

かつみ

美代子

美喜

ミスうけて大きな笑いとなる宴  
そつとしておきたいミスが二つ三つ  
掛けられた畏にはまった欲の皮  
喝采も同情もする敵のミス

笛を吹く母さんだけが踊つてる  
草笛に托して別れ惜しむ唄  
無人駅一笛だけで通過する

荘厳さひととき増した笙の笛  
わたくしを踊らす笛を妻が吹く  
説明はいらぬ笑顔が語る首尾

捨てる時初めて読んだ説明書  
説明の通りにも出来不出来

竿頭の端午の風車はドンキホーテ  
花信くる東風こちよし風車  
饒舌な五月にさせる風車

生きのこり生きのこり夜明けの風車  
受胎して女たこまし風を切る  
遠景に一人の女歩かせる

嘘つけば女ごころがきしむはず  
女の湖におよがせている鮎の群れ  
命のいろを地味に地味にして女

みくじ引く大吉が出た要注意  
引き時を心得ている苦勞人  
窓ガラス拭いて日射しを引き入れる

再会へ負い目引き摺る擦れた靴  
眉を引くときのためらいが哀しい  
悔しいが五パーセントにすぐ慣れる

ニ崎いくしま川柳会 春城 年代報

恭子 辰子 絢子 金太 庸佑 二南

比ろ志 義芳 嘉矩 薫 十四郎 紫香

一笛 年代 美子 正子 愛

千恵 涉 芳子 久子

さとみ 志洋 洞庵 和樹

ダン吉 晋

二南 庸佑 金太

絢子 辰子 恭子

比ろ志 義芳 嘉矩

薫 十四郎 紫香

一笛 年代 美子

正子 愛

千恵 涉 芳子

久子

切り札を最後まで持ちチャンス去る  
流人墓を囲みひっそりさくら咲く  
どうせなら騙されてやる四月馬鹿  
陸橋に上ると春がよく見える

七回忌小さな秘語を抱いている  
電線の緊張ゆるむ春日和  
マニキアをしらない綺麗な手はナース  
することが無いから時間余っている

一枚のカガミの中の孤独かな

お値段は張ったが飽きのこない服  
父死すのショック小二につらかった  
謝罪されショックな事件風化する  
関病記亡夫はがんを知っていた

春ゴルフタラの芽わらびとる余裕  
父譲り床の布袋の飽きぬ顔  
告げられたショック隠して背をさする  
震災のショック打ち消す槌の音

落選のショック尾を引く花ぐもり  
試着室鏡の方が飽いてくる  
飽きもせず父もパチンコ生息申妻に  
ショックだな俺の彼女が嫁にゆく

政治屋の詐欺師のニュース飽きる程  
立ちばなし飽きの来ぬ間にとま告げ  
飽きもせず妻の手料理四十年  
ショックを妻に分けると倍になり

腐れ緑明治の女がまんする  
花見の宴たまには笑え泣き上戸

岬川柳会 八十田洞庵報

寂子 浪速子 鉄男 里子 孝子 悦子

年子 みやこ 信博 幸子 正義 ヤエ

令子 ミチエ 龍弘 勇

みつ子 庄六

吉太郎 光穂 澄子 武庫坊

昭三 ハツエ

弘治 夢之助 節子

寂子 浪速子 鉄男

里子 孝子 悦子

年子 みやこ 信博

幸子 正義 ヤエ

令子 ミチエ

龍弘 勇

みつ子 庄六

母に似たひとが信号トボトボと  
夢追いに飽きず女株る

川柳藤井寺 高田美代子報

たゆまざる努力に辿り着く彼岸  
亡母に似た人に彼岸にあいました  
彼岸団子 食べ競べした若かつた  
彼岸だけ手を合わせてる無神論

和尚さんのバイクが走る春彼岸  
老いた母つれ彼岸参りの老夫婦  
春彼岸 亡妻に会いたく一心寺  
仏さまの花の値上げて知る彼岸

未だつぼみ彼岸桜がじれったい  
彼岸から一つ入門決意する  
煙草吸う煙よけてる手内職  
負けて勝つゆとりも出来る年になり

梅終る桃と桜と合格と  
幾千の慟哭を聞く城の石  
お喋りにお茶がたつぷり欲しくなる  
ふところにたつぷりあって慌てない

たつぷりの愛がこない子に育て  
芽を出した恋へたつぷり水をやる  
砂糖盛るたつぷりと盛る妻の乱  
たつぷりと眠って頭錆びかけて

お言葉返すたつぷり塩かけて  
狂い咲きもいなたつぷり水をやる  
上段に構え弱気の虫を斬る  
かずら橋彼の弱気を見てしまつ

サンングラスとれば弱気な目が笑い

史郎 桂子 宗一 六平 吸江

みよ子 智久 正一 昭水 二南

利武 昭水 二南

正一 昭水 二南

智久 正一 昭水

みよ子 智久 正一

吸江 六平 宗一

桂子 史郎

史郎 桂子

宗一 六平 吸江

みよ子 智久 正一

昭水 二南

利武 昭水 二南

正一 昭水 二南

智久 正一 昭水

みよ子 智久 正一

吸江 六平 宗一

とみ 洞庵

史郎 桂子

宗一 六平 吸江

みよ子 智久 正一

昭水 二南

利武 昭水 二南

正一 昭水 二南

智久 正一 昭水

みよ子 智久 正一

吸江 六平 宗一

桂子 史郎

史郎 桂子

宗一 六平 吸江

みよ子 智久 正一

昭水 二南

利武 昭水 二南

正一 昭水 二南

智久 正一 昭水

みよ子 智久 正一

吸江 六平 宗一

桂子 史郎

史郎 桂子

宗一 六平 吸江

みよ子 智久 正一

昭水 二南

惚れたのが僕で弱気になつてゐる  
弱気でも充電したら絵になつた  
最後まで仮面脱げずにいた弱気  
Uターンばかりしたがるボクの靴

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

店の顔で歩いてます紙袋  
春の陽に金魚ゆらゆら動きだす  
雑談の中に火種が動いてる  
母さんの辞書に悪人などいない

宿の蟹 夫が器用にむいてくれ  
梅酒が器用に風邪に効いたらし  
あやとりで器用に遊ぶ小さな手

花冷えに腕を借りてる通り抜け  
出不精を誘うきっかけ桜咲く  
感謝され慰められて備前焼  
自立した女の眉が美しい

冷戦へ造花のような妻と居る  
甲子園の土 全国へ青春譜  
吊り革の器用字眠る通勤車

追伸の二行用字にはだされて  
花よりも団子が好きで独り旅  
倅せも過ぎると瘦せる力こぶ

年月の過ぎる速さに孫見上げ

豊中もくせい川柳会

田中 正坊報

青丹よしすべて大きい東大寺  
息子を見上げてもの言うあほらしさ  
甲高いサクラの声で買わされる

昭子 敦子 絹歌 美代子

ハツエ すみ 六浦 昌子

江美 向西 まさ 満寿美

勇次郎 一閑 澄子 弘舟

石治 夢之助 正治 十四郎

鹿太 いわお

博史 重人 一笛

日本を買えと株儲が走り出す  
みんな好きだから一役買つておく  
欠かさずに妻の命日花を買う  
参観日うしろに母がいたる安堵  
気休めに安心保つ無農薬  
安心のための日課の受話器おく

花や月 四季おりおりの酒の種  
四季の花咲かせて私の小さい幸  
折り折りの四季 人間に問ひかける  
四季旅情 卑弥呼に会えるかも知れず

桜より野の花似合う水子塚  
親の贅言わず先生のせいにする  
今夜雨キープボトルも切れている  
残り火に分別ゆれる男ざかり

余力まだあるから降りるトップの座

川柳塔鹿野みか月

土橋

紙風船のんびりと舞うことにする  
風船に尾鰭がついて飛んじやった  
スキンシップ孫と風船とばし合う  
風船のおかげで桜散つちやつた

薬売り紙風船を添えて置き  
紙風船折ればむかしがよみがえる  
銀行の窓で風船媚を売る

脳味噌は風船ほどの軽やかな  
風船が離れてからの乱気流  
生きたれた風船がまたふくらまる  
風船に似た生き方をしています

風船のようにふくれたこともある

ただし しげお 石舟 慶子 知香子 英子

正三郎 英子 悟郎 きのこ

萬的 柳宏子 路児 吉太郎

正坊 螢報

保子 智恵子 八重子 喜与志

公子 房子 幸枝 節子

富久江 諷人 三千代 久枝

久枝

久枝

第6回 島根川柳まつり  
とき 7月5日(土) 10時開場  
ところ 出雲市民会館  
会費 2000円(発表誌呈)

題と選者 壺―土橋螢・脈―佐々木裕  
家族―加本義良・グラス―渋谷久代  
やがて―恒松町紅・名物―内田久枝  
不思議―尼れいじ

各題2句・締切正午・欠席投句拝辞

風船の穴そそのかす花の風  
ぎこちないが未来愛する夢がある  
ランドセルまだ背に添わぬ一年生  
ぎこちなく花束抱いて姑になる

ぎこちない日々が続いている不安  
脳味噌がぎこちないので忙しい  
乱読の本からヒントひとつ得る  
医学書をつろたえさせる黄信号

火煙の走る恐ろけと春の山  
気の弱い私を庇う好きなひと  
ぎこちない世話役だからついて行く  
焼香の列で人間らしくなる

顔ぶれが列ぶとなぜかききな臭い  
献血の列に並んでホッとする  
売り切れを知らず並んでいる女  
歯列びが美しいのでよく笑う

終点の見えない列の中にいる  
花の乱修羅に並んだ首の数

和子 汲香 実満 忠良 かつ乃

登美枝 野草 睦子 隆風 美恵子

きみ子 高栄 茂 弘子 登美枝 野草 睦子



# 大野武太さんを偲ぶ

福本英子

手のとどく次の世代に夢がある 武太

川柳塔のこの句に出会ってまだどれほども過ぎていないのに、クラスの友人から武太さんが亡くなられたとの知らせに驚きました。

連休初日の五月三日ドシャ降りの憲法記念日でした。

几帳面で腰が低く、それでいて御自分のお仕事に誇りを持っていられたので、クラス会でも句会でも随分皆さんに愛され、重宝がられていました。

ここ数年は体調を崩されて入退院を繰り返されていられたと奥さまから伺いました。

お家でもとても大切にされて亡くなられる寸前まで川柳塔への投句を続けられて、投句はいつも御長男の朗さまのお役目だったとか、一寸ワンマン振りも武太さんの一面が覗かれて嬉しくなりました。

御商売の塗料店も早くから朗さまにお任せして専ら御養生と作句の明け暮れと奥さま

や朗さまに甘えられていた御様子でしたが御家族への愛情とお商売への情熱の句、それに何よりも愛したギターこれはセミプロの腕前でしたが、句にも沢山出ています。

ギター弾く木村好夫のポーズとる  
ワタシにも弾けます妻がギターとる

愛犬に家族の序列つけられる

予約してもう五時間も待つ検査

心機一転塗料屋らしい色を塗る

親も子も脱サラ小さな塗料店

店主療養中 税務署サマに届け書く

窮鳥へかぼそい腕をさしのべる

川柳へ参加されたのはクラス会でお誘いして、早速、昭和五十四年春から川柳わかやまの誌友になられ、五十六年十一月に同人に、とても熱心な川柳家になりました。中でも大茂津主幹の一字頂いて武太と号されてからは、骨身惜しまずミニ句集を作って配布したり、大会の合唱用にと川柳わかやまの唄を作

詩作曲して、主幹を感激させたり力の入れようでした。ずっと大阪在住でしたので本社への参加もお勧めして誌友になられ、同人に推薦されたのも間もなくでした。

下請けに泣かれ値下げをのまされる  
相続の最後は山を売る話

無位無冠 家業に生きる素晴らしさ

ありがと♪配達さんにも冷茶くむ

優しい心の持主が句からも窺えて、今年に入ってから川柳塔の句に頭が下がります。

ふる里に父竹次郎の石碑たつ

はしくれの生業なれど子にのこす

戒名 円満院釋行徳 享年七十三歳

どうぞ安らかに眠り下さい。 合掌

## 甲 吟

川柳もギターも余韻なおつづく 緑良

ギター弾く君の姿も雲の峰 大茂津

佗しさは訃報の友と同意 正博

思い出を偲ぶ温顔まなうらに 三男

君乗せて雲は西へと早くなる 豊太

新緑の向こう安らく里がある 寿子

お会いする約束反古に過ぎ給う 紀久子

温厚な御霊を送る五月雨 稚代

天国へ続くつじの真つ盛り 輝子

葉桜に柳友の訃を聞く雨しとど 英子

# 柳界展望

★第17回ときせん賞が次のとおり決定した。

傷つかぬようにおどけて  
いる私 喜福恵美香

準ときせん賞は中林酔虎

北川茂子の両氏で、本社同人の田中透太氏が佳作の一人に選ばれた。

★平成8年度の川柳研究年度賞が次のとおり決定した

〈正賞〉

子に残す杭は荒野に打つておく 村上 正一

〈準賞〉

深追いはよそう背中は見  
ずにおく 本阿弥光敬

一番に着いて一番隅の席

堀 豊

★平成8年度ふんえん賞の一〜三席が決定した。

①幸せに向かつて歩く靴を  
買う 阿久津大三郎

②着崩れぬ女でいたい足袋  
の白 筒井智伊子

③並べない越せない母の優  
しさに こばやしたえ

★社団法人全日本川柳協会  
の常任幹事が決定した。任  
期は今年4月から平成12年  
3月までで、本社関係は次  
のとおり。

波多野五楽庵・牛尾緑良

川島颯云児・田中正坊・河  
内天笑・奥田みつ子・小林  
由多香・恒松町紅・奥谷弘

朗・小島蘭幸・野村太茂津

★川柳大原400号発刊記

念川柳大会は4月6日、大  
原町総合センターで175

名が参加して開かれた。各  
題の特選句次のとおり。

沈んでも掴み続けて来た

葉だ 福原 辰江

この空の続きに飢える国  
がある 三輪美智子

人間より高いところに芽

をつける 政岡日枝子

洗っても人間不信の芽が  
残る 北川 拓治

原点に帰る生家の井戸の  
水 林 荒介

原点に帰ろう影が咳をす  
る 井上 和太

乗り継いでこの駅弁を食  
べに来た 高田 星子

駅までを母の歩幅に合せ  
とく 福田 幸子

★第2回桜まつり川柳大会  
は4月13日、尼崎市立立花  
地区会館で開かれた。各題

秀句は次のとおり。

落花さかんその下をゆく  
はくのおとむらい 谷口 光穂

サラサラとわたしの過去  
をめぐる風 浜 知子

朝ドラが終ると妻が動き  
出す 浅雅美智子

ちっぽけな希望つないで  
集積回路 岩城 義芳

なお、「桜」は3名共選  
で、総合得点1位の河瀬芳

子さんが兵庫県知事賞を獲  
得した。

さくら闇ひとり生きて  
ひとりて死ぬ 河瀬芳子

散り果てて桜の長いブラ  
ンクよ 田辺 鹿太

白紙から始めてみたい桜  
咲く 長浜 澄子

▼訂正▲

■5月号 P50下段19行目  
(川柳の群像)「2月22日」

↓「3月22日」▽P56中段  
10行目(寄稿)「妻よ子よバ  
ラ／＼にならば浄土なり」

↓「子よ妻よばらばらにな  
れば浄土なり」

▼おことわり▲  
■5月号 P7下段(川

## 新同人紹介

高田 星子

— 薫風・天笑・月子推薦

以倉 菜々

— 薫風・天笑・月子推薦

## 6 月 各 地 句 会 案 内

句会名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	5日(木)午後1時から 狙 う・ほんと(共選)	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	6日(金)午後1時から 午後・近い・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 わかやま	8日(日)午後1時から 塩・天国・細い	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	9日(月)午後1時から 修理・絞る・まさか・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662 西宮市岡度町2-19-515 山本義子
ほたる 川柳 同好会	10日(火)午後1時から ふんぎり・集まる・乗る	豊中市立蜷池公民館 阪急宝塚線蜷池駅西へ150米 〒560 豊中市蜷池中町3-10-28 井上直次
八尾市民 川柳会	10日(火)午後6時から 事実・水溜まり・損・疑う	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 まつえ	14日(土)午後1時から 両手・色・探す	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 ねやがわ	15日(日) 正午から 奇抜・相場・鼻血・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	16日(月)午後1時から 証人・サイズ・返す・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木) 正午から 反応・すれすれ・割れる・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3-8-8 川島風云児
南 大 阪 川 柳 会	20日(金)午後6時から 我意・開花・介添え・解決	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
岸 和 田 川 柳 会	21日(土)午後1時半から 有名・要領・ライバル・裏面	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地裡村
はびきの 市川柳 民会	22日(日)午後1時から 論す・すっかり・ヌード・啖呵	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
富 柳 会	26日(木)午後1時から 蝶・しとひと・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池 森子
京 都 塔 の 会	27日(金)午後1時から 黴(かび)・呆れる・急所	ハートピア京都 地下鉄九太町駅南改札東出口すぐ 〒600 京都市下京区藤町通松原下ル弁財天町 都倉求芽
東大阪 市川柳 同好会	28日(土)午後6時から 本物・びっくり・達者・曇る	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

# 編集後記

★本誌の「柳界展望」欄や本文中のスペースに「おことわり」というタイトルで数行のお知らせが載るのを見かけられたと思う。これは、いわゆる「訂正記事」ではなく、いったん掲載された作品を取り消すという告知である。

★これには、さまざまなケースが考えられる。第一は他柳誌に発表された作品が本誌に掲載された場合、第二は本誌の複数の投句欄に同じ句が掲載された場合、第三は過去に発表した自分の句を再び投句し、掲載された場合、第四はいちばん好ましくないケースだが、本誌または他の場所へ発表された他人の句を自分の作品として投句し、掲載される場合である。

★およそ人間のすることだから、往々にして「つい、うっかり」ということがある。第四のケースにしても作務的な「盗用」は皆無とは言わないまでも、まず少ないだろう。記憶の底に沈んでいたものがヒョイと浮かんでくることもある。

★本人が気付いて通知される場合もあるが、編集者または読者が発見することが多い。その第二次責任は選者、第三次責任は編集者にあるわけだが、選者・編集者ともに数千という作品に目を通すのだから「発見」は至難の業である。

★何と言っても第一次責任は投句者にあるのだから、すべての投句者が自分の作品をキチンと管理し、誤りを未然に防ぐことである。そして過ちが分かった場合は、できるだけ早くこれを正すようにしたい。(正)

☆三十五年前、私は子育て真つ最中、生後三ヶ月の長男を抱いて途方にくれていた。発育は悪くないのだが、ミルクを飲まない。離乳食にはまだ早いし、なにしろ食欲がないのだから……

## 祖父(路郎)を読む

少年時代マンガも読まず、学生時代教科書しか読まず、言葉も知らず、漢字も読めず、そんな私が

何と川柳という文学に出会った。それも、祖父が書き示した川柳の本を見た、ただそれだけで出会ったのである。読むと、何やら分かったような分からぬような、読むということは、今の今でも私には

苛酷な動作である。

しかし、川柳をもっと好きになりたい故に、私の読むということに対する重い腰を、少しは上げねばならなくなった。

祖父のことは、全く分からない私ではあるが、川柳を好きになると、祖父のことが好きになるように感ずるのは不思議

祖父は、川柳そのものである。今私には、そう思うのである。

西村 哲夫

## ひとこと

☆三休橋の中島小児科医院を訪問。大きなお屋敷という構え、中庭には床几がおかれていて、子供連れの若い母親でいっぱいである。

☆先生は熟年の貫禄あり信頼できる感じ、子供にはやさしそうな印象であった。

☆十年程前から川柳をはじめた私は、その小児科医が川柳塔社初代主幹中島生々庵であったことを知る。

家庭医学の知識で院長とわたり合い 生々庵(希)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「 発表（8月号）

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。



## 作品募集

川柳塔(8句) 橋高薫風選  
 水煙抄(8句) 高杉鬼遊選  
 渺湖抄(3句) 八木千代選  
 茴香の花(3句) 西出楓楽選  
 吟課題 「か裏」 池森子選  
 「かむ」 野口節子選  
 「あいまい」 河井庸佑選  
 初歩教室 「入れる」(3句) 吐田公一担当

8月号発表(6月15日締切)

## 本社6月句会

とき 6月9日(月)午後5時半  
 ところ メンズファッションセンター3F  
 中央区内本町1-1 電06・941・1918  
 地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角  
 兼題 「脳」 吉川寿美選  
 「スーブ」 八十田洞庵選  
 「ほめる」 福本英子選  
 「やっぱり」 田中正坊選  
 「鳥」 橋高薫風選  
 席題 1題 当日発表(各題2句以内)  
 会費 500円 投句料 400円

本社7月句会は、6月28日(土)に追悼川柳大会を行うため、中止いたします。

9月号

吟課題 「露」「あきれる」「プライド」  
 初歩教室 「肩」

## 夜市川柳募集

第1回「顔」 小島蘭幸選  
 ハガキに3句 6月末締切  
 投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3  
 河内天笑方 堺川柳会

## 本社句会の投句について

川柳塔社本社句会への投句を、4月句会から復活いたしました。  
 投句者は句箋(19×4cm)に1葉1句、各葉ごとに裏面に氏名を明記し、投句料(80円切手5枚)を同封、必ず句会の前月末までに到着するよう、川柳塔社事務所へお送りください。

## NHK川柳作品募集

課題「我慢」 森中恵美子選  
 ハガキに3句 6月10日締切  
 投句先 〒540-01 NHK大阪放送局  
 「文芸部」川柳係  
 発表 6月28日(土)午前11時5分  
 からラジオ第1放送(予定)

定価 六百元(送料76円)

半年分 四千元(送料共)

一年分 七千九百元(同)

平成九年六月一日発行

編集兼 橋高薫

発行人 橋高薫

印刷所 美研アクト

大阪市阿倍野区三明町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

電話(06)941-1691 四番

振替〇〇九八〇一五二三三六八番

川柳塔社

第12回国民文化祭・かがわ97



川柳

作品集要項

—みずみずしい詩歌を玉藻の国から—

一 応募受付期間 平成九年四月一日(火)〜六月三十日(月) (当日消印有効)

二 応募規定

(1) 一人各題2句詠(未発表作品に限る)  
宿題(事前投句) 石 打つ 島 寺  
照る(当日投句) 情 橋 幕

(2) 一人につき一、〇〇〇円  
宿題(当日投句) 絵 情 橋 幕

(3) 応募料

香川県実行委員会作成の「募集要項」を御覧のうえ、  
所定の応募用紙を使用して御応募ください。

(4) 応募方法

香川県高松市番町二丁目八十五  
〒七六〇 香川国民文化祭高松市実行委員会事務局

三 選者

第一次選者(五〇音順)  
(事前投句)

石原 伯峯 谷口 幹男 西田柳宏子  
石井 有人 松岡十四彦 山田 良行 吉岡 龍城  
藤沢 岳豊

(当日投句)

安藤富久男 片岡つとむ 塩見 草映 渡邊 蓮夫  
第二次選者(五〇音順)

仲川たけし 西村 在哉 福家珍男子 福田 白影  
宮本 時彦

四 賞(予定)

文部大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・香川  
県知事賞 他

五 発表会場

川柳大会(入選発表・選評等)  
平成九年十月二十六日(日)十時〜十四時

高松テルサ

入選作品は、作品集として刊行し、応募者全員に無料  
配付します。

六 問い合わせ及び募集要項請求先

〒七六〇 香川県高松市番町二丁目一一一

第12回国民文化祭香川県実行委員会事務局

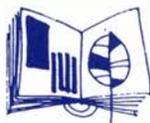
「文芸祭」川柳係

(Tel)〇八七八一三一一一一一 (内線三三七〇)

七 主催者

文化庁 香川県 香川県教育委員会 高松市 高松市  
教育委員会 (財)全日本川柳協会・香川県川柳協会 第  
12回国民文化祭香川県実行委員会 第12回国民文化祭

高松市実行委員会



自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530 大阪市北区浪花町9番4号

TEL・FAX(06)372-1178